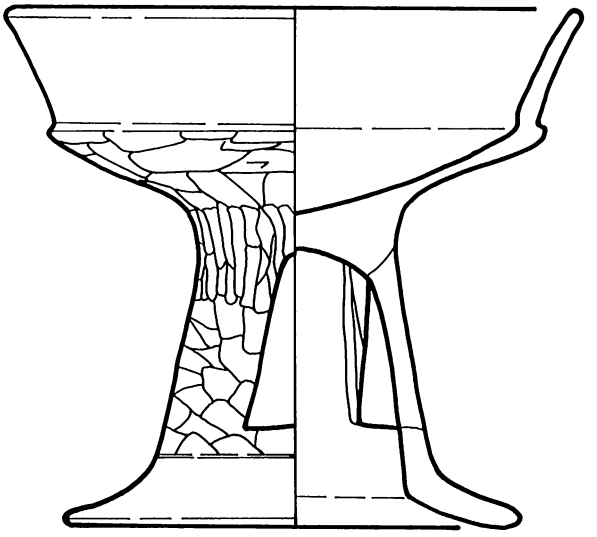
芳賀北原遺跡

－民間開発(配電用変電所新設)に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－

1992

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

芳賀北原遺跡



H－4号住居址出土の高坏

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

巻首図版

1．芳賀北原遺跡全景（東より）

2．芳賀北原遺跡出土古墳時代土器群

序

芳賀北原遺跡が所在する群馬県前橋市は、関東平野の北西端に位置し、北に名峰赤城山を望み、坂東太郎の名で知られる利根川が市域を貫流する「水と緑」に恵まれた人口28万を有する県都であります。

前橋の地形は、南部に広がる前橋台地、市の北西から南東にかけて帯状に広がる広瀬川低地帯、そして今回調査されました芳賀北原遺跡が立地する赤城火山斜面の三つに分けられます。その中でも赤城火山斜面は、日本でも一二を争う日照時間の長い地域であり、また古代の遺跡が広く分布していることで知られる地域となっております。

昭和48年から55年にかけて実施された芳賀団地遺跡の発掘調査では、500軒を越える平安時代の住居跡が発見されており、「和名類聚抄」に記述のある「芳賀郷」にあたるのではないかとの推論も出されました。

このように、近年における各種開発に伴う発掘調査の成果により、古代史の空白部分が次々に埋められて来ています。

このたび東京電力株式会社より、市内鳥取町における変電所建設に伴う埋蔵文化財確認調査依頼が前橋市教育委員会に提出され、調査を実施しましたところ、古墳時代および奈良・平安時代の住居跡が確認され、遺跡地であるということが分かりました。遺跡の取り扱いについて協議しましたところ、現状での保存は難しいということとなり、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。

限られた部分の調査ではありましたが、住居跡10軒が検出され、地域史を解明する上での貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり、物心両面にわたりご協力いただきました東京電力株式会社の方々、並びに発掘・整理作業に従事していただきました方々に対し厚くお礼申し上げます。

本報告書が芳賀地区の歴史を解明する一助となり、また考古学研究の参考となれば幸いに存じます。

平成4年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　遠藤次也

例　　言

1．本報告書は、民間開発（配電用変電所新設）に伴う芳賀北原（はがきたはら）遺跡発掘調査報告書である。

2．遺跡は、群馬県前橋市鳥取町字北原353－５番地に所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が東京電力株式会社群馬支店長岡島徹と委託契約を締結し実施した。

調査担当者および期間は以下のとおりである。

発掘・調査担当者　　鈴木雅浩・狩野吉弘　（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

試掘期間　平成３年１月７日　　発掘調査期間　平成３年５月７日～平成３年６月７日

整理・報告書作成期間　平成３年10月１日～平成４年３月13日

4．本書の原稿執筆・編集は鈴木・狩野が行った。整理作業をはじめ図版作成には、岩木佳代・岩木　操・大田一郎・岸フクエ・住谷文彦・渡木秋子・湯浅たま江・湯浅政夫・湯浅道子の協力があった。

5．下記の専門的分野については、次の機関ならびに方々のお世話になった。（敬称略）

地層・地質：有限会社古環境研究所　　石材鑑定：飯島静男

6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1．挿図に使用した北は座標北である。

2．挿図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図（宇都宮）と1/2.5万地形図（前橋）を使用した。

3．本遺跡の略称は２Ｃ８である。

4．各遺構の略称は次のとおりである。

Ｈ…古墳～平安時代の住居址　Ｄ…土坑　ＪＤ…縄文時代の土坑　Ｐ…柱穴（ピット）

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構　　住居址・土坑…1/60、竈…1/30、全体図…1/100

遺物　　土器・石器…1/3、瓦…1/4、石製品…1/3・1/6

6．スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構断面図　　構築面…斜線

遺構平面図　　焼土…淡点、堅緻面…一点鎖線

遺物実測図　　炭化物…斑、黒色土器…網

―目　　次―

序

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地 …… 1

2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査の経過

1　調査方針 …… 4

2　調査経過 …… 5

Ⅳ　層　　序 …… 6

Ⅴ　遺構と遺物

1　住　居　址 …… 7

2　土　　坑 …… 16

Ⅵ　ま　と　め …… 17

付　　編

芳賀北原遺跡周辺の地形と地質（古環境研究所） …… 18

図　　版

口 絵　1　芳賀北原遺跡全景　　口 絵　2　芳賀北原遺跡出土古墳時代土器群

頁

PL. 1 遺　構（1）…… 58
2 遺　構（2）…… 59
3 遺　構（3）…… 60
4 遺　構（4）…… 61
5 遺　構（5）…… 62
6 遺　構（6）…… 63
7 遺　物（1）…… 64
8 遺　物（2）…… 65
9 遺　物（3）…… 66
10 遺　物（4）…… 67
11 遺　物（5）…… 68
12 遺　物（6）…… 69
13 遺　物（7）…… 70
14 遺　物（8）…… 71

挿　　図

頁

Fig. 1 芳賀北原遺跡位置図 …… V
2 芳賀北原遺跡周辺図 …… 2
3 芳賀北原遺跡調査経過図 …… 4
4 芳賀北原遺跡標準土層図 …… 6
5 芳賀北原遺跡全体図 …… 24・25
6 芳賀北原遺跡遺構図（1）…… 26
7 芳賀北原遺跡遺構図（2）…… 27
8 芳賀北原遺跡遺構図（3）…… 28
9 芳賀北原遺跡遺構図（4）…… 29
10 芳賀北原遺跡遺構図（5）… 30・31
11 芳賀北原遺跡遺構図（6）…… 32
12 芳賀北原遺跡遺構図（7）…… 33
13 芳賀北原遺跡遺構図（8）…… 34
14 芳賀北原遺跡遺構図（9）…… 35
15 芳賀北原遺跡遺構図（10）…… 36
16 芳賀北原遺跡遺構図（11）…… 37
17 芳賀北原遺跡遺構図（12）…… 38
18 芳賀北原遺跡遺構図（13）…… 39
19 芳賀北原遺跡遺構図（14）…… 40
20 芳賀北原遺跡遺物分布図（1）… 41
21 芳賀北原遺跡遺物分布図（2）… 42
22 芳賀北原遺跡遺物分布図（3）… 43
23 芳賀北原遺跡遺物分布図（4）… 44
24 芳賀北原遺跡遺物分布図（5）… 45
25 芳賀北原遺跡出土遺物（1）…… 46
26 芳賀北原遺跡出土遺物（2）…… 47
27 芳賀北原遺跡出土遺物（3）…… 48
28 芳賀北原遺跡出土遺物（4）…… 49
29 芳賀北原遺跡出土遺物（5）…… 50
30 芳賀北原遺跡出土遺物（6）…… 51
31 芳賀北原遺跡出土遺物（7）…… 52
32 芳賀北原遺跡出土遺物（8）…… 53
33 芳賀北原遺跡出土遺物（9）…… 54
34 芳賀北原遺跡出土遺物（10）…… 55
35 芳賀北原遺跡出土遺物（11）…… 56
36 芳賀北原遺跡出土遺物（12）…… 57

表

頁

Tab. 1 芳賀北原遺跡周辺の地形分類図 … 19
2 古墳・平安時代遺物観察表 …… 21
3 石器・特殊遺物観察表 …… 22
4 縄文式土器観察表 …… 23

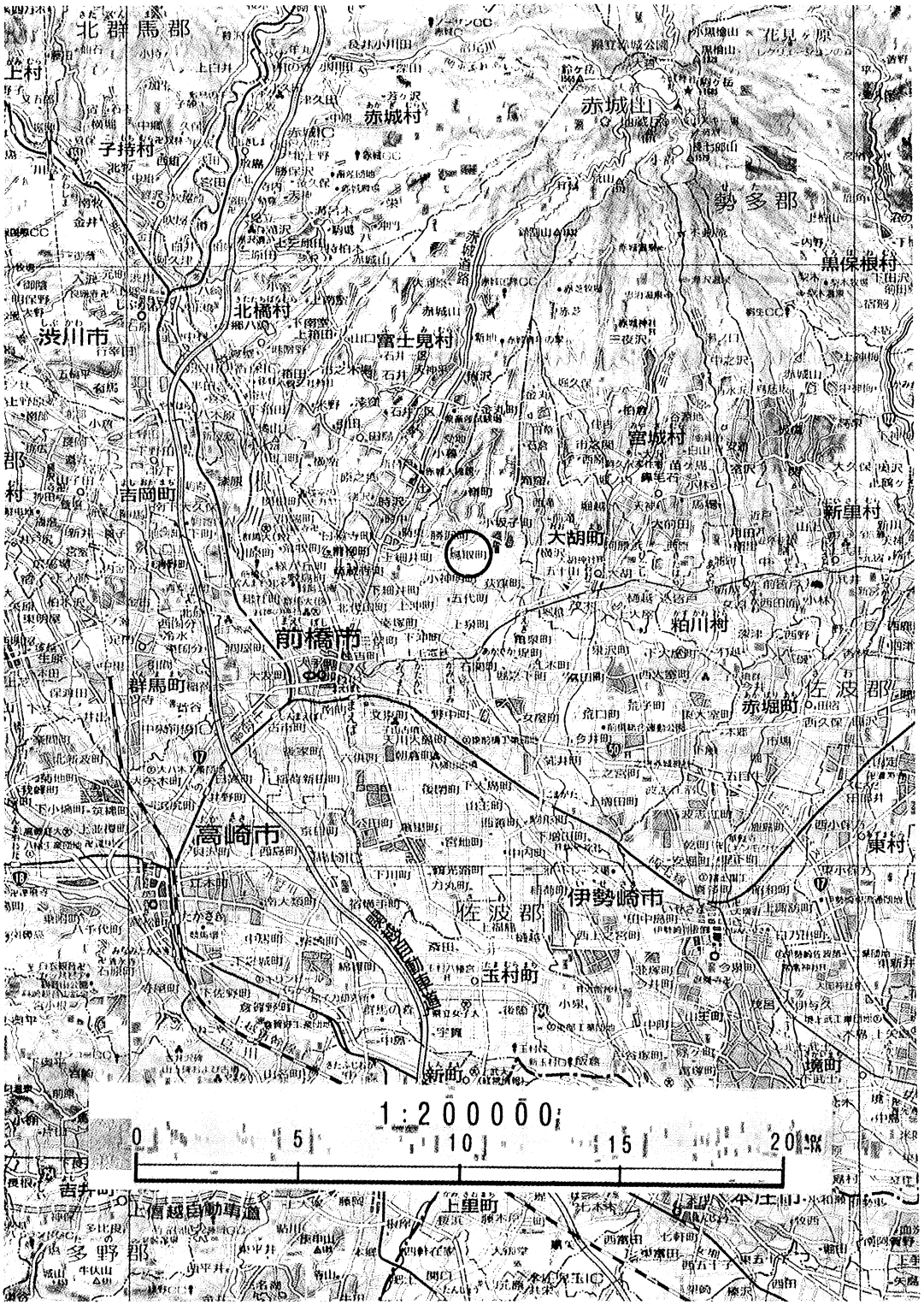


Fig. 1　芳賀北原遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経緯

平成２年度に芳賀地域の電力需要の伸びに対処するため配電用変電所ならびに送電線を新設する旨、東京電力株式会社より前橋市教育委員会に通知があり、協議の後、建設予定地について遺物分布調査を実施し、平成３年１月７日に試掘調査を実施した結果、住居址等の遺跡の存在が確認されたため変電所および鉄塔部分を中心に埋蔵文化財の本調査を実施することが決定した。

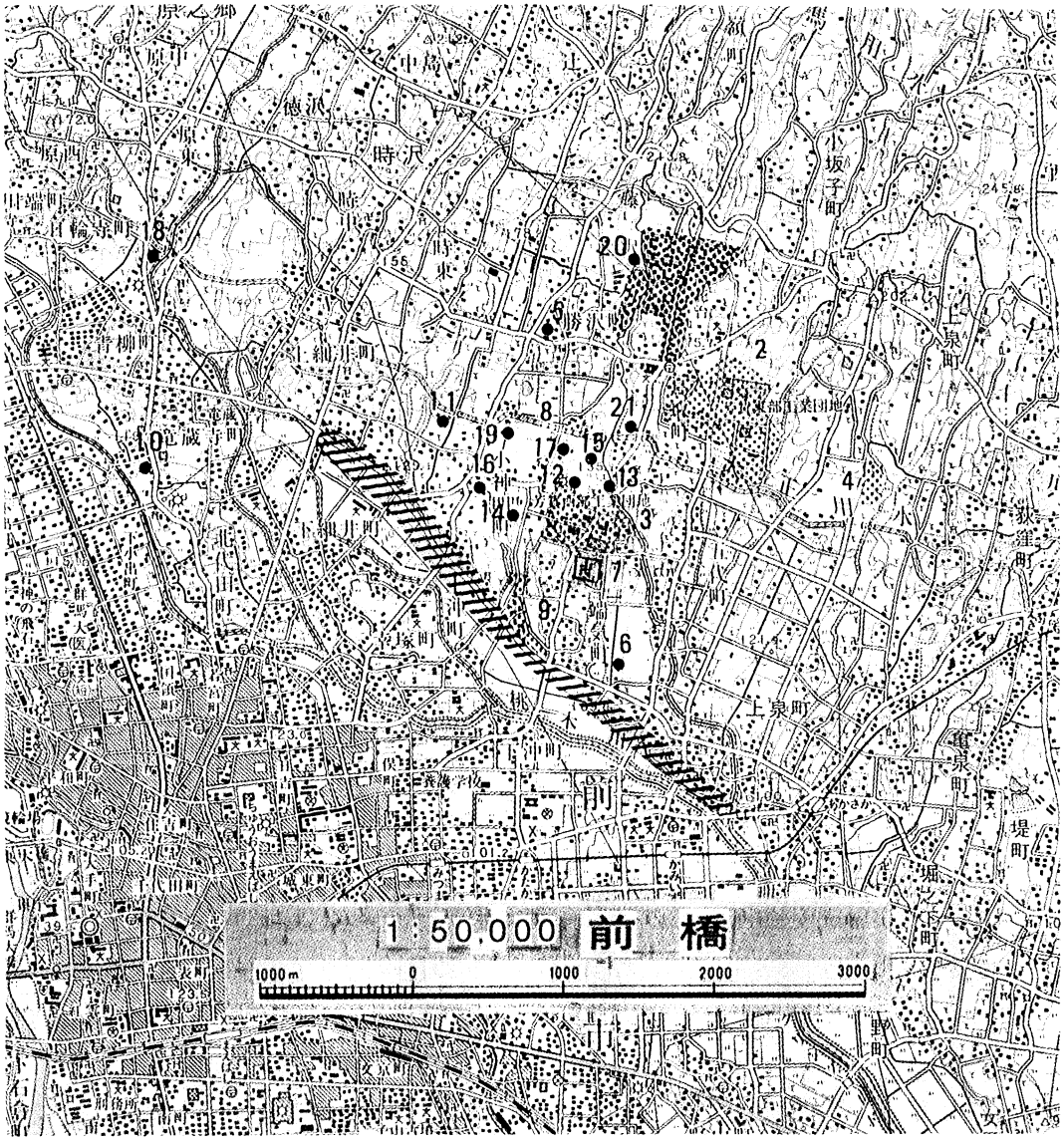
調査は前橋市教育委員会の組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団が東京電力前橋支店の委託を受け実施することになった。平成３年４月19日付で東京電力株式会社前橋支店より調査依頼書が提出され、５月２日付で委託契約が締結され事業実施の運びとなった。

本遺跡の名称は調査地域の小字名を採用して芳賀北原遺跡とした。調査面積は250㎡で、現地での発掘調査期間は平成３年５月７日から６月７日まで、整理作業は10月１日から平成４年３月13日までであった。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の立地

芳賀北原遺跡は前橋・今井線、端気町の交差点から高花台方面へ約1.5㎞北上した大正用水わきの台地上にある。遺跡地の地番は前橋市鳥取町字北原353-5である。鳥取町は、昭和29年に前橋市に合併されたもので、それまでは勢多郡芳賀村字鳥取であった。旧芳賀村は赤城山の南麓にあって、南北に細長い三角形状を呈している。頂点に当たる北端は標高620ｍ、底辺に当たる南端は旧利根川の河川敷とされる沖積地で、その標高は110ｍ、平均斜度約5/100である。本遺跡地の標高は、143.90ｍで、赤城火山斜面と呼ばれる赤城山の裾野に属する傾斜地上にある。赤城火山斜面は台地状の地形であり、ところどころ山麓に源を発する中小の河川が南流し部分的に解析谷を形成している。したがって舌状台地上では水に乏しく、おもに桑畑等が広がり、小河川により形成された谷地では、狭隘ではあるが水田が営まれている。そして、この斜面の末端部は比高差10ｍ前後の直線的な段丘崖をなしており、旧利根川のつくった広瀬川低地に接している。本遺跡から南へ約1.5㎞下った前橋今井線付近（端気町）がこれに当たり、ここから南に関東平野が広がっている。本遺跡地の現況はおもに桑畑で、遺跡地の南側には大正用水が隣接し、赤城山南斜面一帯の農業用水として広く利用されている。



遺跡の位置と周辺の遺跡

1．芳賀北部団地遺跡（S48～50）
2．芳賀東部工業団地遺跡（S51～55）
3．芳賀西部工業団地遺跡（S50）
4．桧峯遺跡（S56）
5．オブ塚古墳
6．大日塚古墳
7．善　勝　寺
8．小神明遺跡群（S57）
9．端気遺跡群（S57，58）
10．青柳寄居遺跡（S58）
11．南田之口遺跡（S59）
12．小神明遺跡群（倉本遺跡S58）
13．小神明遺跡群（西田遺跡S58）
14．小神明遺跡群（大明神遺跡S58）
15．小神明遺跡群（九料遺跡S58，60）
16．小神明遺跡群（谷向遺跡S59）
17．小神明遺跡群（湯木遺跡S60）
18．引切塚遺跡（S60）
19．小神明遺跡群（S61）
20．芳賀北曲輪遺跡（H2）
21．芳賀北原遺跡（H3）

古利根川左岸

Fig. 2　芳賀北原遺跡周辺図

2　歴史的環境

赤城山の南斜面の台地では、掘れば必ずといってよいほど遺跡にぶつかる文化財の宝庫と言われている。昭和10年、県下一斉に行われた古墳調査において芳賀地区では64基の古墳があるとされ、赤城山南麓では旧荒砥村、粕川村、旧桂萱村についで古墳の多いところとされている。しかし、昭和50年、芳賀西部工業団地遺跡（芳賀団地遺跡群）の調査では記載漏れの古墳が31基も確認されたほか西田遺跡（小神明遺跡群Ⅱ；鳥取町）、嶺町東公田地内にもあり、これらの古墳を併せると芳賀地区には実に100基もの古墳が存在することになる。また芳賀地区は、昭和40年代後半から昭和50年代前半にかけて実施された芳賀団地遺跡群の発掘調査によって、縄文時代から近世に至るまで、ほぼ各時代の遺構が多数確認されたところである。周辺図をみても分かるとおり、この時実施された芳賀団地遺跡群（芳賀北部団地遺跡、芳賀東部工業団地遺跡、芳賀西部工業団地遺跡）の発掘調査は芳賀地区の中心部40万㎡を全面的に掘り返すものであり、前橋の発掘史のなかでも特筆されるものであった。ここでは、この昭和48年から昭和55年に及ぶ芳賀団地遺跡群の発掘調査を中心に、その後現在まで行われてきた中小の発掘の成果をふまえながら同地区の歴史を概観してみたい。まず芳賀団地遺跡群の概略を述べる。芳賀北部団地遺跡（調査面積約6.1ha：現在の芳賀団地，高花台）では、奈良・平安時代の竪穴住居址231軒を始め、縄文時代前・中期の竪穴住居址、中期の敷石住居址、および中世の勝沢城址の一部が検出された。芳賀東部工業団地遺跡（調査面積約33ha）では、北部団地と同じく、奈良・平安時代の竪穴住居址420軒、掘立柱建物跡が194軒も検出されたのを始め、縄文時代前期の竪穴住居址39軒、後期の敷石住居址６軒等が検出された。芳賀西部工業団地遺跡（調査面積約2.5ha）からは縄文時代前期の竪穴住居址、埴輪棺等も検出されたが、古墳総覧記載漏れの古墳31基の集中が見られたところに特徴がある。これらの発掘の成果から芳賀地区の歴史を要約すれば、

① 土器分類および集落の変遷を検証した結果、芳賀地区は縄文から古墳、奈良・平安そして中世、近世まで、ほとんどの時代にわたって人々の生活の場として利用されてきた。

② そのなかで、弥生時代の遺構、遺物と確認できるものは極めて少なく、赤城山麓の傾斜地という自然環境が、農耕の開始されるこの時代の生活空間としては不適切であったと思われること。

③ 発見された住居は圧倒的に奈良・平安時代のものが多く、この時代になって人々は、再びこの地を生活の場とするようになること。そして、この背景には、農業技術、特に灌漑の進歩があり、弥生時代には水田に適さない谷地が、この時代に水田化されていったと思われること。

などが挙げられる。なお、この発掘調査の進展に伴って一時話題になった〝芳賀郷〟の所在をめぐる問題は、1987年、荒砥洗橋遺跡から〝芳郷〟と書かれた墨書土器の出現によって物的証拠を持たない〝芳賀郷〟＝「芳賀地区」の図式は説得力を失いつつある。

Ⅲ　調査の経過

1　調査方針

発掘調査を実施するにあたり、表土の掘削は調査期間の短縮を図るため重機（バックフォー0.4㎥）を使用し、調査範囲の250㎡の区域にそって４ｍ四方のグリッドを設定、西から東へ算用数字（１・２・３・・）、北から南へアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ・・）で呼称した。各グリッドの呼称方法は北西の杭の名称を使用している。

調査は表土の除去後、プラン確認に入り、並行してグリッド及びＢ.Ｍの設置を行い、その後遺構の配置図を縮尺1/100にて作成し各遺構の調査工程を検討した。

その結果、住居址の調査は、

1．中央部でクロスするセクションベルトを設けて土層観察を行う。

2．10㎝四方以上の遺物は、縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット表記した平面図を作成し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。

3．窯は原則として縮尺1/10で図化、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。

なお、測量の基準点はＡ－１グリッド（Ｘ＝46.448、Ｙ＝－65.132）で、Ｂ.Ｍは調査地内に東西２カ所設置し使用することとした。

以上、大まかではあるがこの方針にそって調査を進めていった。

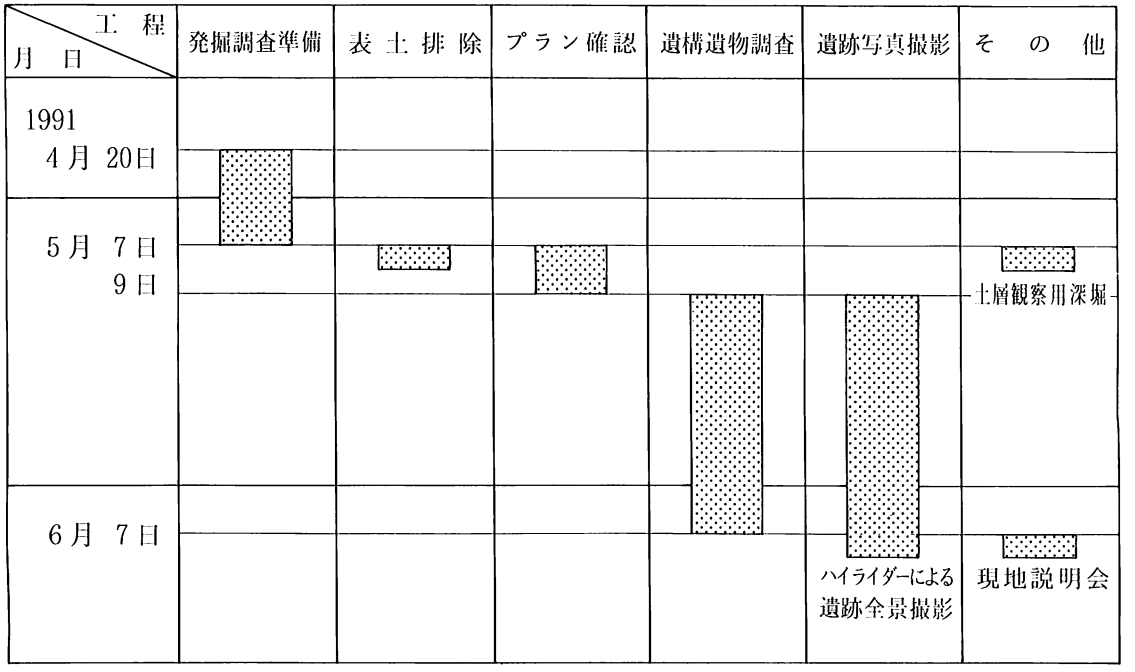


Fig. 3　芳賀北原遺跡調査経過図

2 調 査 経 過

配電用変電所新設に伴う芳賀北原遺跡の発掘調査は、平成3年5月7日から6月7日までの約一カ月間にわたり実施された。調査面積は250㎡である。まず、平成3年5月2日、東京電力株式会社前橋支店との間で委託契約を締結、現地にプレハブ事務所を設置し、5月6日に機材の搬入・点検を行った。

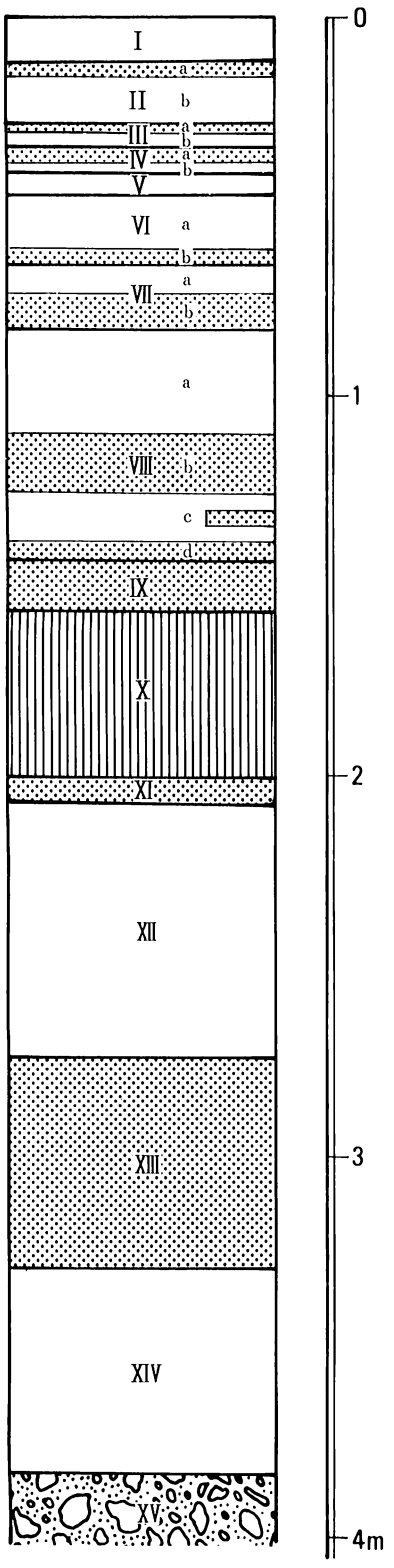
翌5月7日、いよいよ発掘調査を開始。まず、調査区東側より重機による表土掘削を行い、それと並行しながらプラン確認を順次行っていった。本遺跡地の調査面積は250㎡で小規模な発掘であるにもかかわらず、プラン確認の結果、住居址9軒（古墳時代住居址3軒、平安時代住居址6軒）、土坑3基（うち1基は、後に縄文時代の陥し穴と判明）の存在が認められた。同時に、調査区西隅に土層観察用の深堀を入れ、基本層序を確認した。そして調査区の東側では表土層（耕作土）下30cm程度で遺構を切りこむソフトローム層が検出されるのに対して、西側では表土層とソフトローム層の間にに30～40cm程度のＡｓ－ＣＰ（浅間山起源：4世紀前半）混土層が認められ、本遺跡の旧地形は東側から西側にかけてやや下りぎみに傾斜していたことも判明した。

これらの結果を元に調査方法の検討を行った。そして、調査区遺構数が多く、またプランが明確にでている調査区東側部分から遺構の掘り下げを開始することとした。遺構掘り下げは5月9日から着手したが、調査区東側部分はＨ－2号，Ｈ－3号などの平安時代住居址とＨ－4号古墳時代住居址が複雑に重複しており、各住居址の全容をつかむのに手間取った。とくに、5月の中旬から取りかかったＨ－4号住居址は本遺跡の中心となった遺構であるが、一辺約8ｍ弱の大型住居址で排土量が多く、遺物も多数検出されたため、遺構精査は6月に入っても続いた。

また、5月の下旬には調査区西側部分の調査にも取りかっかたが、ここでは、特にＨ－5号平安時代住居址とＨ－9号古墳時代住居址との重複関係の把握や、その掘り下げに予定外の時間を費やすことになった。

調査は、後半に入り雨天により当初の予定より進捗が遅れたが、西側部分の試掘によって新たに検出されたＨ－10の調査を最後に、6月7日、現地説明会及びハイライダーによる遺構全体写真を撮影し、現場での作業をすべて終了した。その後の整理作業は、6月11日より文化財保護課の整理棟で始め平成4年3月末日には作業を完成させる運びとなった。

調査期間中は東電の関係者にも幾度となく足を運んでいただいたほか、近隣の住民からは調査区付近の口伝など貴重な情報を提供していただいたことを申し添えておく。



Ⅳ　層　　序

Ⅰ　層：黒褐色細砂層。耕作土。浅間Ｂテフラ（Ａs－Ｂ：1108年）を30％以上含む。粘性がややあり、締まりがある。

Ⅱａ層：灰褐色粗砂層。Ａs－Ｂ。粘性はないが、締まりはややある。

Ⅱｂ層：暗褐色細砂層。平安時代遺構構築面・遺物包含層。Ａs－Ｂ、浅間Ｃ軽石（Ａs－Ｃ：４世紀初頭）、榛名－二ツ岳軽石（Ｈr－ＦＰ：６世紀中葉）を含む細砂層。締まりがあり、粘性もややある。

Ⅲａ層：灰黄褐色細砂層。Ｈr－ＦＰ、榛名－二ツ岳火山灰（Ｈr－ＦＡ）を主体とした層。締まり、粘性共にややある。

Ⅲｂ層：黒褐色細砂層。Ａs－Ｃ、Ｈr－ＦＰを20％程度含む細砂層。古墳時代遺構構築面・遺物包含層。粘性を少し有し、締まりがある。

Ⅳａ層：黒色細砂層。Ａs－Ｃを主体とした層。

Ⅳｂ層：明褐灰色細砂層。Ａs－Ｃを10％程含む層。弥生時代遺物包含層。

Ⅴ　層：黄褐色細砂層。ソフトローム層。粘性はややあるが、締まりが弱い。縄文時代遺物包含層。

Ⅵａ層：明黄褐色微砂層。ハードローム層。浅間－板鼻黄色軽石（Ａs－ＹＰ：約1.3～1.4万年前）を10％程度含む。粘性があり、固く締まる。

Ⅵｂ層：明黄褐色硬質ローム層。Ａs－ＹＰを主体とした細砂層。

Ⅶａ層：明黄褐色硬質ローム層。浅間－白糸軽石（Ａs－ＳＰ：約1.5万年前）を３％程含む微砂層。締まり、粘性共にある。

Ⅶｂ層：明黄褐色硬質ローム層。Ａs－ＳＰを主体とした微砂層。

Ⅷａ層：明黄褐色硬質ローム層。浅間－板鼻褐色軽石群（Ａs－ＢＰ Group：約1.6～2.1万年前）を少量含む微砂層。粘性があり、締まりが弱い。

Ⅷｂ層：明黄褐色硬質ローム層。Ａs－ＢＰ Group を主体とした層。

Ⅷｃ層：明黄褐色微砂層。Ａs－ＢＰを少量含む層。締まりややあり、粘性がある。

Ⅷｄ層：明黄褐色硬質ローム層。Ａs－ＢＰを含む微砂層。締まりは弱いが、粘性を有す。

Ⅸ　層：明黄褐色硬質ローム層。姶良Ｔn 火山灰（ＡＴ：約2.1～2.2万年前）を主体とした層。

Ⅹ　層：明黄褐色粘土層。暗色帯。粘性が強く、締まりはあまりない。

Ⅺ　層：明黄褐色硬質ローム層。榛名－八崎火山灰（約３万年前）を主体とした微砂層。

Ⅻ　層：明黄褐色粘土層。粘性が強く、締まりのある粘土層。

XIII　層：明黄褐色軽石層。榛名－八崎軽石（Ｈr－ＨＰ：約4.1～4.4万年前）。比較的大粒な軽石層。

XIV　層：褐色粘土層。水性堆積で非常に粘性が強い。

XV　層：淡黄色土層。赤城－大胡火砕流堆積物（約６万年前）。

Fig. 4　芳賀北原遺跡標準土層図

V 遺構と遺物

1．住　居　址

本遺跡から検出された住居址は、合計10軒である。このうち調査区西側の4軒（H－1～4号住居址）と東側の2軒（H－9、10号住居址）は、基本層序Ⅲb層で確認され、床面はハードロームまで掘り込まれている。その他の住居址は基本層序Ⅱb層で確認された。表土掘削後の標高は144.00m前後で、地形は東から西へ緩やかに傾斜している。

調査区域の関係上、全掘できたのは4軒のみで、他の住居址は調査区域外のため部分的な調査にとどまった。特に調査区域西端に検出されたH－7号住居址とH－8号住居址は、竈部分しか調査が及ばなかった。

調査した住居址は、すべて方形プランを呈し、H－4号住居址を除き東壁に竈を有する。

また、時代別にみると、古墳時代住居址4軒、平安時代住居址6軒である。

H－1号住居址

位　置　A－6、A－7　　標　高　144.04m　　挿　図　Fig. 6、20、25

写　真　PL. 1　　調査面積　(4.45)㎡　　方　位　N－55°－E

形　状　発掘区域外になるため全体の形状は確認できず、調査は南壁側と東壁側の一部のみ行うことになった。そのため確認規模は南壁3.50m、東壁2.30mで調査面積は4.45㎡である。平面形は東壁と南壁の一部が明らかになったにすぎないため推測になるが、両壁とも一直線に掘られ壁はほぼ直角に交わることから、方形のプランを呈していたと想定できる。また、確認面からの壁高は平均10cmで他の住居址と比較し浅い。ローム壁は平均75°の角度をもって立ち上がり明瞭に検出できた。

床　面　床面はほぼ平坦で、部分的に堅い面が検出された。

覆　土　全体で4層に分けられる。自然堆積で埋没したと考えられる土層断面で、1～2層はA_s－C等を含む暗褐色をした細砂層で、3層は炭化物を多く含み、床面付近の4層は炭化物と灰が多く認められた。

竈　址　調査区域内には検出されなかったが、東壁部分に少量の灰と炭化物が確認された。

柱　穴　床面上には南東隅より対角線上に120cm離れた地点に1ケ所ピットを検出した。直径24cm程の円形を呈し、深さは42cmを測る。主柱穴と考えられ、これに対応するピットが調査区域外に存在するものと思われる。

掘り方　中央部が高く掘り残される傾向が認められる。また貼り床下のP_1周辺から2基の土坑が確認された。規模はD_1：長径92cm×短径61cm、深さ12cm、D_2：長径102cm×短径48

cm、深さ18cmである。

遺　物　総点数96点程で、中央付近から南壁にかけて多く分布する。縄文土器の混入もみられる。また、実測可能な遺物は小甕１点（１）と石器１点であった。（１）は床面直上より出土し、口縁部が外反し底部が偏平気味で、胴部に斜位のヘラケズリが施される。

Ｈ－２号住居址

位　置　Ｄ－６　　標　高　143.84ｍ　　挿　図　Fig. 7

写　真　ＰＬ．１　　面　積　8.29㎡　　方　位　Ｎ－83°－Ｅ

形　状　確認面においての形状は長軸方向が3.58ｍ、短軸方向が2.48ｍである。平面プランは南北に長い長方形を呈し、東壁の中央より南に偏在して竈を有する。床面積は8.29㎡である。本住居址は確認面においてすでに耕作等による削平を受けており壁高は平均４cm足らずしか残存していなかった。

床　面　竈周辺に２～３cmの貼り床が施され床面はほぼ平坦であった。

覆　土　削平を受けているため、Ａs－Ｃをわずかに含む黒褐色土が２層確認されたにとどまった。

竈　址　東壁の中央よりやや南に位置し、壁面より外側にある。確認した規模は全長68cm、幅46cm、炊き口部幅36cmである。削平を受けているため残存状況は不良で構築材等、すでに流出しており検出されなかった。

掘り方　すでに確認面において、一部貼り床面が破壊されていて、ローム層上面が露出しており、やや不明瞭であったが、南壁隅に２基の土坑を確認した。規模はD_1：長径126cm×短径98cm、深さ18cm、D_2：長径84cm×短径72cm、深さ21cmである。

重　複　本遺跡中最大のＨ－４号住居址と重複関係をもっており、本住居址は同住居址の南壁の一部を切って構築されていた。また、掘り方を調査中、住居内の北側部分にＪＤ－１号土坑址が検出された。

遺　物　出土総数は156点で、全体的に分布するが土師器や須恵器の小破片が殆どで復元・実測には至らなかった。

備　考　柱穴、貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。

Ｈ－３号住居址

位　置　Ｂ－４・５、Ｃ－４・５　　標　高　143.55ｍ　　挿　図　Fig. 8、9、20、25

写　真　ＰＬ．２　　面　積　13.08㎡　　方　位　Ｎ－90°－Ｅ

形　状　平面形は東西方向3.14ｍ、南北方向4.28ｍを測り、南北に長い長方形を呈する。東壁には竈を有する。北壁と西壁はローム壁が比較的明瞭に検出できたが、東壁と南壁の一部分はＨ－４号住居址と切り合っているためＨ－４号住居址の覆土である黒褐色土層の壁

が検出された。確認面からの壁高は平均30㎝で、87°の角度をもってシャープに立ち上がっている。

床　面　床面はローム層を切り込んで削平した後、全体的に2～3㎝の厚さで貼り床が施され、ほぼ平坦に形成されている。良く踏み固められている床の堅緻面は住居中央部付近と竈炊口付近から貯蔵穴周辺にまで広がっている。

覆　土　全体で5層に分けられ、一部耕作による攪乱を受けているが、A_s－C等を含む黒褐色土が自然堆積したと考えられる土層である。

竈　址　東壁の中央部より南寄りに位置し、壁面より外側にある。全長118㎝、幅94㎝、炊口部長22㎝、燃焼部長66㎝、煙道部長30㎝、炊口部幅68㎝、燃焼部幅74㎝、煙道部幅38㎝、煙道部の立ち上がり角度は55°で緩やかに立ち上がる。全体的に残存状態は良好で竈内壁の断面は「U」字形を呈し良く焼けていた。また両袖石と天井部、及び支柱には安山岩質の礫が使用されており、炊口部は鳥居状に組まれていた。竈構築にあたってある程度の設計がなされていたと考えられる。

掘り方　小さな凹凸の他に、楕円形をした3個の土坑を検出した。規模はD_1：長径148㎝×短径68㎝、深さ15㎝、D_2：長径146㎝×短径122㎝、深さ18㎝、D_3：長径42㎝×短径24㎝、深さ21㎝である。

重　複　本調査で最大規模のH－4号住居址の北西コーナーを切り込んで構築されている。竈址、及び東壁と南壁の一部分が重複しており、面積的には半分程度切り合っている。

遺　物　総点数は877点で、全体的に偏在なく分布している。図示したものは、縄文深鉢（2）と高台皿（3）、石器3点、刀子1点がある。（2）と石器は、本住居址の遺物とは考えられず、流れ込みによると思われる。また、（3）は、内面、外面共に「後」と思われる文字が墨書されている。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

H－4号住居址

位　置　A－6、B－4・5・6、C－4・5・6、D－5・6　　標　高　143.57m

挿　図　Fig. 10、11、12、21、22、25、26、27、28　　写　真　PL. 3

面　積　56.35㎡　　方　位　W－65°－S

形　状　確認面からの壁高は平均35㎝を測り、ローム壁は平均85°の角度で立ち上がっており明瞭に検出できた。平面形は本調査で最大規模の東西7.7m、南北7.7mで面積は56.35㎡を測り、整った正方形を呈する。主軸方位はW－65°－Sで西壁やや南寄りに竈を設置している。すでに試掘調査でトレンチを設定し掘り下げた段階で検出されており、本調査に入り表土掘削後のプラン確認においても、覆土と住居の切り込まれているローム層が鮮明に分れており確認は容易であった。

床　面　床面は全体的にほぼ平坦で貼り床はされておらず、床面のレベル差は10cm以内におさまり、東が高く、西が低いという傾向がみられる。また５ケ所程、炭化物を多く含む焼土範囲が確認されているが、自然のものとは思われず、住居に関する遺構であると思われる。さらに住居の南壁中央部に広がる堅緻面は使用頻度の高さを示唆するものであり、おそらく入口状施設に関係するものであろうと判断できる。

覆　土　ほぼレンズ状に自然堆積しており、全体で７層に分けられる。１～３層はセカンダリーのAs－CやHr－FPF１を含む黒褐色土で、５～７層は細砂の黄褐色土でロームの流れ込みがみられた。

竈　址　西壁の中央よりやや南寄りに位置し、主軸方位はW－65°－Sを指す。残存状況は比較的良好で、全長152cm、最大幅142cm、炊き口部幅60cmを測り、住居内108cm、住居外45cmの規模である。煙道部の立ち上がり角度は33°で、緩やかに立ち上がる。構築は、住居壁を長さ62cm、幅43cmで掘り込み、燃焼部も10cm前後掘り方を設けて黒色土を敷き、その上にロームで本体を築いている。袖部は上部が粘土を固めて構築されており、基底部はロームブロックを含む褐色土が敷かれている。その間に軽石を含む黒褐色土が充填され、間層をなしていた。また使用面の確認の際、焼土が予想した程多くなく、どこまでが天井部の崩落でどこからが使用面なのか確認に手間取ったが、長さ30cm、幅20cm程の支脚の掘り方部分が明確になったため、そこから使用面を判断した。

柱　穴　床面上には６ケ所のピットを確認している。支柱穴はP_1～P_4の４個で対角線上に配され、各支柱穴の中心点を結んだ相互の間隔は、P_1－P_2が4.2m、P_2－P_3が4.3m、P_3－P_4が4.2m、P_4－P_1が4.4mで、P_1－P_3、P_2－P_4を結ぶ対角線の長さは、それぞれ5.6m、5.8mを計測する。P_5は竈のすぐ南側、住居址の南西コーナーに位置し、東西方向1.1m、南北方向1.1mをした正方形の貯蔵穴で、底部に行くにしたがって摺鉢状になり、1.3mも掘り込まれていた。P_6は竈の北側に位置する円形の貯蔵穴である。

周　溝　周溝は竈部分を除いて全周しており、床面との比高差は平均５cm、幅12cmでめぐっていた。

重　複　住居西壁の一部分がH－３号住居址の東壁と竈掘り方によって破壊されており、南壁一部をH－２号住居址によって切られていた。

遺　物　本住居址からの出土遺物は総点数3,349点で、検出された遺構の中で最も多く、図示したものは、甕９点、(13)、(14)、(15)、(16)、(17)、(21)、(23)、(25)、(32)、壺２点（10）、(31)、甑１点（22）、高坏３点（11）、(24)、(29)、坏14点（４）、（５）、（６）、（７）、（８）、（９）、(12)、(18)、(19)、(20)、(26)、(29)、(30)、(33)、器台１点（26）、石器７点、土器片１点の合計38点である。遺物の平面分布をみると、全体的に竈の右袖部分と貯蔵穴からP_2の間に遺物が集中している。

(23)、(25)の甕は、竈及びP_2周辺を中心にして、床面直上で重なり合って出土して

いる。(4)、(9)の坏は、1m以内での接合で、ほぼ完形に近い状態になった。(7)の坏は床面直上の2片とP_5の中の1片が接合している。また、(24)の高坏はレベル差が35cm程で、最大5m先にちらばった8片が接合となった。この高坏は明確な稜を有し脚部に三角形の透かし穴がみられる。その他、比較的レベル差は少ないが、広範囲にわたり接合関係をもつ傾向がみられる。

H－5号住居址

位　置　A－2、B－2　　標　高　143.57m　　挿　図　Fig. 13

写　真　PL. 4、5　　調査面積　(5.27)㎡　　方　位　E－10°－S

形　状　北側半分が発掘区域外になるため全体の形状は確認できず、調査は南側半分と竈を有する東壁の一部のみ行うことになった。そのため確認規模は東西方向2.50m、南北方向1.80mで調査面積は5.27㎡である。平面形は南壁及び東壁と西壁の一部が明らかになったにすぎないため推測になるが、調査区北側に続く方形のプランを呈していたと想定できる。また、確認面からの壁高は平均26cmで、削平のため西壁の大部分が破壊されていた。検出できた壁はAs－C混じりの黒褐色土で、それほど堅くなく平均70°～80°の角度をもって立ち上がり、やや検出に戸惑った。

床　面　床面は竈の前が若干堅緻であったっが、その他はそれほど堅くなく、北側がやや低くなっている程度で、ほぼ平坦に構築されており、貼り床は認められず、掘り方は不明瞭で地床と判断した。

覆　土　自然堆積で埋没したと考えられる土層断面で、全体で5層に分けられる。1～3層はAs－C等を含む黒褐色をした細砂層で、床面付近の4層と5層は炭化物と灰が多く認められ、部分的に竈から流出したと思われる焼土も多量に検出された。

竈　址　東壁中央部よりやや南寄りに位置する。全長112cm、幅74cm、炊口部長56cm、燃焼部長28cm、煙道部長28cm、炊口部幅22cm、燃焼部幅36cm、煙道部幅32cm、煙道部のり立ち上がり角度は42°を呈する。

貯蔵穴　竈の左袖下30cm程の所に長軸方向70cm、短軸方向64cm、深さ34cmのほぼ円形をした貯蔵穴が1基検出された。

重　複　ハードローム層を掘り込んで構築されているH－9号住居址の東壁を切って、本住居址が作られているが、レベル差が30cm程あるため直接影響を及ぼしていない。

遺　物　総点数は258点程で、竈とその周辺に集中しているが、土師器の小破片がほとんどで、復元・実測には至らなかった。

H－6号住居址

位　置　C－1・2　　標　高　143.41m　　挿　図　Fig. 14、15、23、28、29

写　真　PL. 4　　面　積　10.46㎡　　方　位　E－12°－S

形　状　平面プランは、東西方向3.10m、南北方向3.48mを測り、東壁に竈を有し、やや南北に長い方形を呈する。確認面からの壁高は平均36cmである。検出した壁はローム壁ではなく、As－C混じりの黒褐色土で、それほど堅くなく平均70°～80°の角度をもって立ち上がる。

床　面　床面はほぼ平坦で、全体的に良く踏み固められている。堅緻部分は、中央から竈にかけての部分が特に堅く締まっている。貼り床は、全面にわたり5～15cmの厚さで施工されており明確に検出できた。

覆　土　自然で埋没したと考えられレンズ状に堆積した土層断面で、全体で5層に分けられる。1～3層はAs－C等を含む黒褐色をした細砂層で、床面付近の4層は炭化物と灰が多く認められ、5層は部分的に竈から流出したと思われる焼土も多量に検出された。

竈　址　東壁中央部よりやや南寄りに位置する。全長108cm、幅60cm、炊口部長32cm、燃焼部長18cm、煙道部長10cm、炊口部幅28cm、燃焼部幅34cm、煙道部幅36cm、煙道部の立ち上がり角度は48°を呈する。

掘り方　多くの凹凸が認められたが、不定形をした4個の土坑を確認した。規模はD_1：長径64cm、短径48cm、深さ12cm、D_2：長径74cm、短径68cm、深さ21cm、D_3：長径90cm、短径62cm、深さ24cm、D_4：長径84cm、短径68cm、深さ34cmである。

遺　物　総点数は599点程で、竈周辺と住居南側に集中している。図示したものは、羽釜6点（34）、（36）、（39）、（40）、（41）、（42）、高台椀1点（43）、坏1点（35）、（37）、紡錘車1点、石器2点である。平面分布においては各遺物共、平均1m程度の範囲で接合関係をもっている。また、垂直分布をみると、ほぼ同レベルから出土した遺物片の接合がほとんどであるが、（37）の羽釜は、30cmのレベル差で2片が接合された。（35）の坏は、他の遺物との共伴関係からして、本住居址に流れ込んだと考えられる。

備　考　周溝、貯蔵穴等は検出されなかった。

H－7号住居址

位　置　B－1　　標　高　143.64m　　挿　図　Fig. 15、24、29

写　真　PL. 4　　調査面積　(1.52)㎡　　方　位　N－89°－E

形　状　調査区域の西端で検出されたため、調査は竈部分のみで全体の形状は確認できなかった。明らかになったのは、東壁に有すると思われる竈部分で、住居の本体は調査区域外の西側に続いて存在するものと考えられる。

竈　址　東壁中央部よりやや南寄りに位置すると思われる。すでに天井部が削平されており、確認できた範囲で、全長82cm、幅72cm、炊口部長12cm、燃焼部長31cm、煙道部長39cm、炊口部幅36cm、燃焼部幅40cm、煙道部幅38cm、煙道部のり立ち上がり角度は76°を呈する。

竈覆土　全体で5層に分けられ、下部に焼土が多く見られた。

遺　物　総点数は11点程で、図示したものは高台椀2点（44）、（46）、坏1点（45）である。（44）は、竈の炊き口部より出土している。（45）、（46）は、竈内部、火床面より出土した。

備　考　周溝、貯蔵穴等は検出されなかった。

H－8号住居址

位　置　B－1　　標　高　143.71m　　挿　図　Fig. 15

写　真　PL. 4　　調査面積　(0.89)㎡　　方　位　N－87°－E

形　状　H－7号住居址と同様に調査区域の西端で検出されたため、調査は竈部分のみで全体の形状は確認できなかった。明らかになったのは、東壁に有すると思われる竈の煙道部分で、住居の本体は調査区域外の西側に続いて存在するものと考えられる。

竈　址　東壁中央部よりやや南寄りに位置すると思われる。H－7号住居址と同様に、すでに天井部は削平を受けており、燃焼部の一部と煙道部分が検出された。確認できたのは、全長63㎝、幅43㎝、煙道部長42㎝、煙道部幅21㎝、煙道部の立ち上がり角度は22°で緩やかに立ち上がる。

竈覆土　全体で5層に分けられ、下部に焼土が多く見られた。

遺　物　出土した遺物はわずか3点程で、接合・復元には至らなかった。

備　考　周溝、貯蔵穴等は検出されなかった。

H－9号住居址

位　置　A－1・2、B－1・2　　標　高　142.97m　　挿　図　Fig. 16、17、23、30、31

写　真　PL. 5　　調査面積　(12.16)㎡　　方　位　N－75°－E

形　状　本住居址の上部に構築されていたH－5号住居址の掘り方を調査中、確認された住居址で、確認面からの壁高は平均85㎝を測り、本調査中最も深く、上部の壁はAs－C混じりの黒褐色土であるが、その下30㎝程でローム壁になる。壁は平均85°の角度でシャープに立ち上がっており明瞭に検出できた。平面形は、住居址の北東コーナーと竈の一部分が調査区域外のため、全体の形状は確認できなかったが、東西方向3.90m、南北方向3.55mで調査面積は12.16㎡を測り、ほぼ正方形を呈する。また、本住居址はH－4号住居址と同様に覆土と住居の切り込まれているローム層が鮮明に分れており規模の確認は比較的容易であったが、東壁の中央部に1基と、そのやや南寄りに作り替えたと思われるもう1基の竈を設置していたため、確認に手間取った。

床　面　床面は全体的にほぼ平坦で、床面のレベル差は10㎝以内におさまる。竈周辺を中心に堅緻面が広がっているが、全面に亘っての貼り床は施されていない。東が高く、西が低い

という傾向がみられる。さらに住居の南壁中央部に広がる堅緻面は使用頻度の高さを示唆するものであり、H－4号住居址と同様、おそらく入口状施設に関係するものであろうと判断できる。

覆　土　耕作による攪乱が一部みられるものの、その他はほぼレンズ状に自然堆積しており、全体で8層に分けられる。1～3層はセカンダリーのAs－Cを含む褐色土で、5～8層は細砂の黄褐色土でロームブロックの流れ込みがみられた。

竈　址　東壁のほぼ中央部に1基（竈A）と、そのやや南寄りに位置し、作り替えにより新たに構築されたと思われるもう1基の竈（竈B）が、ふたつ隣り合う形で検出された。各竈の主軸方位は竈AがN－76°－E、竈BがN－79°－Eを指す。本住居址の確認面が高かったため、残存状況は両者とも比較的良好で、規模は竈Aが全長112㎝、最大幅140㎝、炊き口部幅58㎝を測り、住居内50㎝、住居外66㎝、竈Bが全長88㎝、最大幅68㎝、炊き口部幅20㎝を測り、住居内34㎝、住居外53㎝の規模である。竈Aは、比較的煙道部は緩やかな傾斜をもち、先端部にきて急角度に立ち上がる。火床面は床面よりやや上がりぎみで煙道部に至る。また、火床部の下にはローム主体の黄褐色土が敷かれていた。袖部は竈Bの構築の際、取り壊されており確認できなかったが、構築材は軟質の白色粘土を中心にしており一部焼土もみられた。一方、竈Bの煙道部の立ち上がり角度は84°で、ほぼ直角に立ち上がる。天井部の崩落で焼土が多量に検出されため、使用面の確認にてこずったが、結局、燃焼部が予想以上に深く、そこから一気に急角度で煙道が立ち上がることが判明した。袖部は上部が粘土を固めて構築されており、基底部はロームブロックを含む褐色土が敷かれ、その間に軽石を含む黒褐色土が充填されていて、H－4号住居址の構築方法と類似している。

掘り方　小さな凹凸が見られ、部分的に炭化物が集中している面もあったが、床下土坑等とりわけて遺構に関係するものは、検出されなかった。

周　溝　周溝は全周しておらず、竈部分を除き南東コーナーから南壁を通り南西コーナーまでめぐっていた。また、調査区域内の北壁に一部が確認できた。床面との比高差は平均10㎝、幅16㎝で、推測になるが、西壁を除きめぐっているものと思われる。

重　複　住居址の東壁と竈部分がH－5号住居址の南壁と西壁の一部によって切られているが、H－5号住居址の構築時には、すでに多量の土が堆積していて、大きなレベル差があるため、重複してはいるものの、直接的な影響はみられない。

遺　物　本住居址からの出土遺物は総点数973点で、図示したものは、甕2点（56）、（57）、壺1点（47）、坏9点（48）、（49）、（50）、（51）、（52）、（53）、（54）、（55）、（58）と石器2点である。平面分布で遺物の出土状況をみると、全体的に住居南壁側を中心に散在して出土している。（56）の甑は、竈Aの火床面より、完形の状態で出土した。垂直分布では、床面直上あるいはほぼ同レベルでの接合関係が多いが、（47）の壺は、レ

ベル差60cmで3片が接合している。

H－10号住居址

位　置　D－2、E－2　　標　高　143.05m　　挿　図　Fig. 18、24、31

写　真　PL. 6　　調査面積　(7.08)㎡　　方　位　N－75°－E

形　状　本住居址は、調査区南西隅に数箇所にわたり2m四方の試掘トレンチを入れていた際に確認された住居址で、調査終了間際まで精査が続いた。住居址の南側が発掘区域外になるため全体の形状は確認できなかったが、調査はトレンチを拡張して、竈を有する東壁側半分と北壁及び西壁の一部を行った。確認規模は、東西方向3.60m、南北方向(2.70)mで調査面積は7.08㎡を測る。よって平面形は、南壁と東壁の一部があきらかになったにすぎないため推測になるが方形を呈していたと思われる。確認面からの壁高は平均35cmを測り、H－9号住居址と同様に、上部の壁はAs－C混じりの黒褐色土であるが、その下10cm程でローム壁になる。壁は平均83°の角度でシャープに立ち上がっており、竈の右袖部分が一部攪乱を受けていたため不明瞭であったが、その他は比較的明瞭に検出できた。

床　面　床面は、全体的にほぼ平坦で、床面のレベル差も10cm以内に仕上げられていた。貼床は、厚さ5～15cmほどに施工され、堅緻面は竈部分から住居中央部にかけて広がっている。特に、竈周辺は使用頻度を物語るかのように良く踏み固められていた。また、調査した範囲内には貯蔵穴等は検出されなかった。

覆　土　部分的に、耕作による攪乱がみられるものの、ほぼレンズ状に自然堆積しており、全体で5層に分けられる。1～3層はセカンダリーのAs－Cを含む黒褐色土で、4層、5層は細砂の黄褐色土でロームブロックの流れ込みがみられた。

竈　址　東壁のほぼ中央部に位置し、主軸方位はN－78°－Eを指す。H－9号住居址と同様に確認面が高かったため、残存状況は比較的良好で、規模は全長143cm、最大幅93cm、炊き口部幅46cmを測り、住居内108cm、住居外35cmの規模である。構築材は主に灰白色粘土で作られロームも使用されていた。両袖の端部には、若干ずれてはいたものの自然石が直立させてあり、その上に同じく自然石が乗せられ、鳥居状に設置されていた。火床面はほぼ平らで、煙道部は緩やかな傾斜をもちながら立ち上がる。

掘り方　貼床を除去すると、比較的小さな凹凸が見られローム地山が露出した。

遺　物　本住居址からの出土遺物は総点数842点で、図示したものは、坏1点（59）と甕2点（61）、（64）と石器5点がある。（59）の坏は、竈内より出土した3片が接合した。（61）の甕は、竈の前面、床面直上より出土した2片が接合した。（64）の甕は、ほぼ同レベルで、1.5m近く離れて2片が接合している。

備　考　周溝、支柱穴等は検出されなかった。

2．土　　坑

ＪＤ－１号土坑

位　置　Ｄ－６　　標　高　143.18ｍ　　挿　図　Fig. 19

写　真　ＰＬ．１　　面　積　1.72㎡

形状等　長軸方向1.30ｍ、短軸方向1.10ｍ、隅丸方形を呈し、確認面よりの深さは0.62ｍを測る。平坦なハードローム層の床が検出され、床の中央部に直径９㎝、深さ15㎝程の円形をした穴が確認された。また、東壁の中央部にも、直径14㎝、深さ24㎝程の穴がみられた。

覆　土　全体で４層からなり、１～３層は黄褐色をしたソフトローム層を主体とした土で、４層はよく締まっており明黄褐色をしたハードローム層を主体とした土である。

遺　物　総点数112点程で、ほとんどが縄文土器の破片である。出土した土器は小破片がほとんどで 接合・復元には至らなかったが、石器１点を図示した。

Ｄ－２号土坑

位　置　Ｃ－４、Ｄ－４　　標　高　143.52ｍ　　挿　図　Fig. 19、24、31

写　真　ＰＬ．６　　面　積　1.14㎡

形状等　長軸方向1.12ｍ、短軸方向0.98ｍの楕方形を呈し、確認面よりの深さは0.68ｍを測る。床面は、ほぼ平坦でハードローム層の床が検出された。

覆　土　５層に分けられる。１～２層は、Ａｓ－Ｃを若干含む細砂層である。また、３～５層は、ソフトロームを主体にハードロームブロックが混入している。

遺　物　総点数58点で図示したものは、坏１点（59）と石器１点である。この坏は、土坑中央、西壁より10㎝程離れた地点から出土しており、確認面より10㎝程のレベルで２層より検出された。

Ｄ－３号土坑

位　置　Ｂ－３、Ｃ－３　　標　高　143.65ｍ　　挿　図　Fig. 19

写　真　ＰＬ．６　　面　積　0.84㎡

形状等　長軸方向1.11ｍ、短軸方向0.92ｍの楕方形を呈し、確認面よりの深さは0.24ｍを測る。床面は、凹凸がみられ、ハードローム層の床である。

遺　物　わずか、18点程で、縄文土器の混入もみられたが、ほとんどが小破片で接合・復元には至らなかった。

Ⅵ　ま　と　め

赤城山南麓斜面においては、すでに数多くの遺跡が確認され調査が行われており、その結果しだいに周辺の歴史が解明されつつある。その中で、本遺跡はごく限られた狭い範囲の調査ではあったが、この地で生活を営んだ先人の足跡を知るうえで貴重な資料が得られた。以下、若干の所見を述べて本報告書のまとめとしたい。

本遺跡からは、合計で10軒の住居址が検出された。時代別にみると古墳時代の住居址が４軒、平安時代の住居址が６軒である。まず、古墳時代の４軒の住居址はいずれも基本層序Ⅲｂ層で確認された。床面はＨ－１、４、10号住居址はⅥｂ層まで達しており、Ｈ－９号住居址にいたってはⅦａ層まで掘り込まれている。住居址の平面的な広がりは東側に２軒、西側に２軒であるが、小規模な調査区であることを考慮し、各住居址の位置や距離から４軒の住居址が同一時代のものであるかどうかを想定することは困難である。しかし、住居址の形態的特徴をみると大きく３つに分類が可能である。第１は、１辺が４～５ｍ程の標準的な規模の住居址で東壁に竈を有し、支柱穴をほぼ対角線上に配す。完掘はできなかったっがＨ－１号住居址がこれにあたると思われる。第２は、比較的小形の住居址で東壁に竈を有するが住居壁内には支柱穴をもたないという特徴をもつ。Ｈ－９・10号住居址である。第３は、面積が50㎡を越える大形住居址で西壁に竈を付設している。Ｈ－４号住居址がこれにあたる。１辺が８ｍに近い正方形プランで、住居壁内にほぼ対角線上に配された４個の支柱穴をもつ。次に４軒から出土した遺物はほぼ同時期のもので、坏はほとんどが外稜を有する模倣坏で、直立する口縁はみられるが内傾するものはみられず、外反あるいは外傾する口縁が主流で体部は浅いものである。甕は胴部中央に最大径を有し長胴化が顕著で、このほか丸胴甕や小形甕もみられ、甑は胴部が直線的にすぼまる傾向がみられた。こうしたことから出土遺物は型式編年において、６世紀後半いわゆる鬼高Ⅱ～Ⅲ式に位置付けられるものである。さらに各住居址共に覆土中にＦＡが純層でみられないことから、今回調査した４軒の古墳時代住居址は、厳密な時代は断定できないが、いずれもＦＡ降下後に構築された古墳時代後期の住居址であると想定できる。

その後、時代を経て構築された６軒の平安時代住居址は、基本層序Ⅱｂ層で確認され床面は古墳時代遺構構築面を掘り込んでⅣａ層まで達しており、東側に位置するＨ－２・３号住居址はＨ－４号住居址と重複し、西側に位置するＨ－５号住居址もＨ－９号住居址と重複関係をもっている。住居址の形態はいずれも東壁に竈を有し、方形プランを呈する。また、住居址のちらばり具合からこの時代の住居址はさらに西側に続いていくものと思われる。

小規模な範囲の調査ではあったが、「遺跡の宝庫」と呼ばれるこの地域は、比較的遺構の保存状態も良好で、特にローム層を切り込んだ古墳時代の住居址は時代を超越し人の息遣いが聞こえてくるようである。今後、新たに実施される調査結果を踏まえ研究していくことにより、本遺跡と周辺遺跡との関連もより一層明確になり、この地域の歴史が解明されていくことであろう。

芳賀北原遺跡周辺の地形と地質

古環境研究所

Ⅰ．は　じ　め　に

赤城火山の地形は、広い裾野を持つことで特徴づけられる。この裾野は、岩屑なだれや火砕流の堆積面、さらに形成時期の異なる多くの扇状地などから構成されている。芳賀北原遺跡は、赤城火山南麓の裾野に位置している。ここでは、芳賀北原遺跡の周辺の地形と地質について述べることにする。

Ⅱ．芳賀北原遺跡周辺の地形

芳賀北原遺跡周辺地域の地形分類図を、図１に示す。遺跡周辺の地形は、赤城山や榛名山などの「火山体」、それらの間に広がる「広瀬川低地帯」、そして「利根川現河床および氾濫原」に大きく３区分される。広瀬川低地帯は、さらに高位のⅠ面と、低位のⅡ面に区分することができる。以下、各地形区の地形について記載する。

１．火　山　体

ａ）岩屑なだれ堆積面

中期更新世に赤城山で発生した、山体崩壊に伴う岩屑なだれの堆積面である。この岩屑なだれは、赤城山東南麓に広がる梨木泥流（新井, 1962）に対比される可能性がある。

ｂ）流れ山

岩屑なだれの堆積に伴って形成された流れ山である。流れ山の中には、扇状地Ⅰ面や扇状地Ⅱ面上に突出して認められるものもある。

ｃ）大胡火砕流堆積面

赤城火山の噴火で発生した火砕流の堆積面である。この火砕流は、大胡火砕流（大胡軽石流：新井, 1962）と呼ばれている。噴出年代は、約4.5－4.7万年前に中国地方の大山火山から噴出した大山倉吉軽石（DKP, 町田・新井, 1979）との層位関係などから、おおよそ５万年前と推定されている（早田, 1990）。

ｄ）扇状地Ⅰ面

約５～４万年前に形成された扇状地である。その形成には、大胡火砕流やガラン石質火砕流（約4.5万年前）など、赤城火山の火砕流噴火に伴う山体斜面の荒廃が大きく関与しているものと推定される。

ｅ）扇状地Ⅱ面

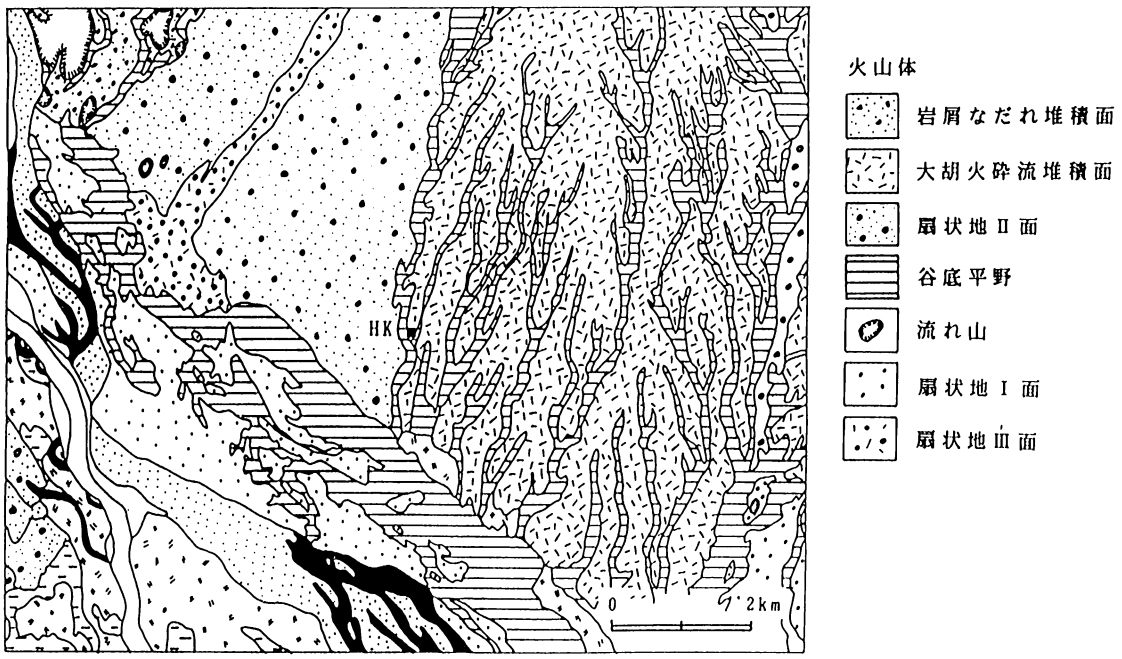
約３～1.3万年前に形成された扇状地である。扇状地面上には、旧河道や中州などの微地形が残されている。

ｆ）扇状地Ⅲ面

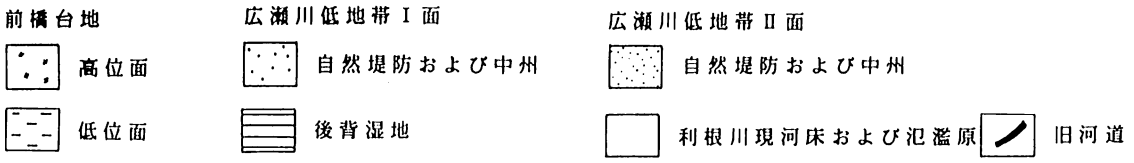
完新世に形成された比較的小規模な扇状地である。赤城白川沿いに形成された扇状地は、広瀬川低地帯の東を限る侵食崖の前面（広瀬川低地帯内部）にまで広がっている。

ｇ）谷底平野

赤城山山体を刻む谷の中に形成された、幅の狭い平野である。



Tab. 1　芳賀北原遺跡周辺の地形分類図　　HK：芳賀北原遺跡



2．前橋台地

a）高位面

前橋台地は、約2万年前に発生した浅間山の山体崩壊に伴う前橋泥流堆積物で構成されている。その層厚は、約20m弱にも達する（早田, 1990）。前橋台地は、高位面と低位面に2区分される。高位面は、おそらく前橋泥流の堆積面と考えられる。

b）低位面

本地形は、前橋泥流堆積面が利根川支流によって侵食された結果形成された侵食面と考えられる。

3．広瀬川低地帯Ⅰ面

a）自然堤防および中州、　b）後背湿地

広瀬川低地帯Ⅱ面は、広瀬川低地帯の主体を成す地形面である。本地域では、広瀬川低地帯Ⅱ面より高位にあるが、下流域では高低が逆転する。すなわち、「地形の交差現象」が認められるのである。広瀬川低地帯Ⅰ面には、自然堤防および中州、さらに後背湿地などの微地形が認められる。自然堤防および中州の堆積物の上位には、1108年（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As－B, 新井, 1979）の堆積が認められる。このことから、その形成終了年代は1108年（天仁元）年以前と考えられる。

4．広瀬川低地帯Ⅱ面

a）中　州

広瀬川低地帯Ⅱ面上には、中州と旧河道が発達している。このことで、広瀬川低地帯Ⅰ面とは地形上の特徴を異にする。これは、広瀬川低地帯Ⅰ面が堆積性の低地であるのに対し、広瀬川低地帯Ⅱ面が侵食性の低地であることに由来するものと考えられる。広瀬川低地帯Ⅱ面の中州の上には、As－Bの堆積は認められない。すなわち、その形成終了年代は、1108年（天仁元）年より新しいのである。

5．利根川現河床および氾濫原

現利根川の河床、および現利根川によって形成された氾濫原を指す。

6．旧　河　道

前橋台地や広瀬川低地帯上に認められる、旧河道である。

Ⅲ．芳賀北原遺跡の地形と地質

芳賀北原遺跡は、上述の地形単位のうち、大胡火砕流堆積面上にある。その位置は、大胡火砕流堆積面の西端にあり、遺跡の西には谷底平野をはさんで扇状地Ⅱ面が広がっている。大胡火砕流堆積面を構成する地層は、軽石を多く含み、全体として桃色を呈する大胡火砕流堆積物である。

この火砕流堆積物の上位には、いわゆるローム層の堆積が認められる。ローム層の中には、約4.0－4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名－八崎軽石（Hr－HP，新井，1962）以上の指標テフラ層がはさまれている。

◎文　　献

新井房夫　（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年，群馬大学紀要自然科学編，10，P．1－79.

新井房夫　（1979）関東平野北西部の縄文時代以降の指標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，P.41－52.

町田　洋・新井房夫　（1979）大山倉吉軽石層－分布の広域性と第四紀編年上の意義．地学雑誌，88，P.313－330.

早田　努（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，P．35－129.

観察表　註）表の記載は以下の基準で行った。

① 胎土は細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。

② 焼成は極良・良好・不良の三段階評価

③ 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）によった。

④ 大きさ、重さの単位はそれぞれcm・g であり、現存値を［ ］、復元値を（ ）で示した。

Tab. 2　古　墳　・　平安時代遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図 (Fig)
1	H－1	土師甕	(10.0)	(11.6)	①細粒②良好③にぶい黄褐④1/5	『く』の字状。篦削り。	欠損。		25
2	H－3	深鉢	(11.4)	5.0	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	直線的に立ち上がる。	平底。		25
3	H－3	高台皿	－	［2.4］	①細粒②良好③灰 ④1/2	欠損。幾種。	右回転糸切り後調整	表裏に文字有り。	25
4	H－4	土師坏	12.8	4.6	①細粒②良好③橙 ④ほぼ完形	横撫で。篦削り。	篦削り。丸底。	内面に暗紋状磨き。	25
5	H－4	土師坏	(11.4)	4.5	①細粒②良好③にぶい橙④1/3	横撫で。篦削り、稜有す。	篦削り。丸底。	黒雲母を含む。	25
6	H－4	土師坏	(12.2)	4.2	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	横撫で。篦削り。	篦削り。丸底。	わずかに稜を有す。	25
7	H－4	土師坏	11.6	4.8	①細粒②極良③赤橙④ほぼ完形	やや外反。篦削り。	篦削り。丸底。	稜有す。	25
8	H－4	土師坏	(12.2)	4.7	①細粒②良好③にぶい赤褐④1/2	横撫で。稜有す。	篦削り。丸底。		25
9	H－4	土師坏	12.3	4.5	①細粒②極良③橙 ④3/4	横撫で。稜有す。	篦削り。丸底。	端部わずかに外反。	25
10	H－4	土師甑	(22.8)	［5.9］	①中粒②良好③にぶい黄橙④1/5	ゆるやかに外反。篦削り。	欠損。		25
11	H－4	高坏	－	［5.8］	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	欠損。欠損。	横撫で。	柱状部縦方向篦削り。	25
12	H－4	土師坏	－	（3.4）	①細粒②良好③褐灰④1/8	横撫で。篦削り。	欠損。	胴部に1本の沈線。	26
13	H－4	土師甕	(10.0)	－	①細粒②良好③灰褐④1/5	『く』の字状口縁。篦削り。	欠損。		26
14	H－4	土師甕	14.0	－	①細粒②良好③明赤褐④1/2	『く』の字状口縁。輪積痕。	欠損。	胴部表面磨き状撫で。	26
15	H－4	土師甕	(17.2)	－	①細粒②良好③橙 ④1/10	『く』の字状口縁。篦削り。	欠損。		26
16	H－4	土師甕	(19.4)	35.1	①中粒②良好③にぶい橙④4/5	『く』の字状口縁。篦削り。	篦削り。		26
17	H－4	土師甕	(27.6)	－	①中粒②良好③明黄褐④1/10	『く』の字状口縁。篦削り。	欠損。		26
18	H－4	土師坏	(12.8)	［3.7］	①細粒②良好③にぶい橙④1/5	横撫で。稜有す。篦削り。	欠損。		27
19	H－4	土師坏	(13.8)	［3.8］	①細粒②良好③赤橙④1/5	横撫で。稜有す。篦削り。	篦削り。丸底。		27
20	H－4	土師坏	(10.6)	［5.1］	①細粒②良好③明赤褐④1/3	横撫で。稜有す。篦削り。	篦削り。丸底。		27
21	H－4	土師鉢	(18.0)	12.7	①中粒②良好③にぶい橙④1/2	『く』の字状口縁。篦削り。	篦削り。	口唇部指押え。	27
22	H－4	土師甑	(16.2)	13.6	①中粒②良好③橙 ④1/2	横撫で。篦削り。	欠損。		27
23	H－4	台付甕	(10.6)	[13.0]	①細粒②良好③明赤褐④1/2	『く』の字状口縁。篦削り。	欠損。		27
24	H－4	高坏	14.6	5.5	①細粒②極良③橙 ④2/3	やや外反。篦削り。	横撫で。		27
25	H－4	土師甕	22.1	30.3	①粗粒②良好③にぶい黄橙④9/10	『く』の字状口縁。篦削り。	篦削り。		27
26	H－4	土師坏	(12.4)	［2.4］	①細粒②良好③淡赤橙④1/5	横撫で。篦削り。	篦削り。平底。	形が歪んでいる。	27
27	H－4	土師坩	(9.6)	［2.5］	①細粒②良好③にぶい橙④口縁部のみ1/3	やや外反。欠損。	欠損。		27
28	H－4	高杯	(9.8)	［2.6］	①細粒②良好③にぶい褐④裾部のみ1/5	欠損。欠損。	横撫で。篦削り。		28
29	H－4	土師坏	(16.6)	［5.8］	①細粒②良好③橙 ④1/6	口唇部やや内湾。横撫で。	欠損。	体部に稜を有す。	28
30	H－4	土師坏	(15.2)	［6.0］	①細粒②良好③橙 ④1/6	口唇部やや内湾。篦削り。	欠損。	体部に稜を有す。	28
31	H－4	土師壺	(17.2)	［4.3］	①細粒②良好③明黄褐④口唇部1/4	横撫で。欠損。	欠損。	口縁部直線的に外傾。	28
32	H－4	土師甕	(15.8)	［6.2］	①細粒②良好③明赤褐④口唇部1/4	『く』の字状口縁。欠損。	欠損。	胴部篦削り。	28
33	H－4	土師坏	(12.8)	4.9	①細粒②良好③橙 ④1/3	横撫で。稜有す。	篦削り。内面撫で。	底部丸底。	28
34	H－6	羽釜	(22.0)	［3.3］	①中粒②良好③にぶい橙④口唇部1/6	横撫で。欠損。	欠損。		28
35	H－6	高杯	(15.6)	［4.8］	①細粒②良好③にぶい赤褐④1/8	横撫で。内面暗紋状磨き。	欠損。	内面黒色処理。	28
36	H－6	羽釜	(18.0)	［8.5］	①中粒②良好③橙 ④口縁部少量	横撫で。横撫で。	欠損。		28
37	H－6	椀	(14.4)	［4.1］	①細粒②良好③灰赤④1/6	ゆるやかに外反。横撫で。	欠損。		28
38	H－6	羽釜	(22.8)	［5.5］	①粗粒②不良③橙 ④一部	横撫で。欠損。	欠損。		28
39	H－6	羽釜	(18.6)	[11.5]	①中粒②良好③橙 ④1/20	直立ぎみに外反。篦削り。	欠損。		29
40	H－6	羽釜	(17.6)	[10.0]	①中粒②良好③にぶい黄褐④1/40	直立ぎみに外反。篦削り。	欠損。		29
41	H－6	羽釜	(21.4)	[11.1]	①中粒②良好③赤 ④1/15	直立ぎみに外反。横撫で。	欠損。		29
42	H－6	羽釜	(22.0)	[11.0]	①中粒②良好③明赤褐④1/10	直立ぎみに外反。篦削り。	欠損。		29
43	H－6	高台椀	(12.2)	5.7	①細粒②良好③にぶい橙④1/4	内湾。幾種。	幾種。		29
44	H－7	高台椀	－	［2.3］	①中粒②不良③浅黄橙④1/3	欠損。幾種。	幾種。		29
45	H－7	杯	(12.0)	3.5	①細粒②良好③浅黄橙④1/2	幾種。	右回転糸切痕。		29
46	H－7	高台椀	(13.0)	4.3	①中粒②良好③灰白④1/3	やや外反。幾種。	回転糸切痕。		29
47	H－9	土師壺	(10.6)	［9.9］	①中粒②良好③明褐灰④1/10	弱い『こ』の字状口縁。	欠損。	胴部篦削り。	30
48	H－9	土師坏	(11.2)	［4.8］	①細粒②良好③橙 ④1/6	やや外反。稜有す。	欠損。		30
49	H－9	土師坏	10.6	3.2	①細粒②良好③橙 ④2/3	直線的に外反。篦削り。	丸底、篦削り。	底部内面撫で。	30
50	H－9	土師坏	(10.8)	［3.3］	①細粒②良好③橙 ④1/7	直線的に外反。	欠損。	稜有す。	30

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図(Fig)
51	H－9	土師杯	(10.5)	4.1	①細粒②良好③明褐④4/5	直線的に外反。篦削り。	丸底。篦削り。	底部内面撫で。	30
52	H－9	土師坏	11.2	3.8	①細粒②良好③にぶい橙④4/5	直線的に外反。篦削り。	丸底。篦削り。		30
53	H－9	土師坏	(13.2)	－	①細粒②良好③橙 ④1/6	短く外反。篦削り。	欠損。		30
54	H－9	土師坏	11.4	4.2	①細粒②良好③黄橙④ほぼ完形	直線的に外反。篦削り。	丸底。篦削り。	形が歪んでいる。	30
55	H－9	土師杯	(13.2)	[4.0]	①細粒②良好③明赤褐④1/8	やや内湾。篦削り。	欠損。	体部、暗紋状磨き。	30
56	H－9	土師甑	(21.6)	29.7	①中粒②良好③明黄褐④ほぼ完形	『く』の字状口縁。篦削り。			30
57	H－9	土師甕	(21.8)	[6.0]	①細粒②良好③灰黄褐④口縁部1/3	大きく外反。欠損。	欠損。		30
58	H－9	土師坏	(10.6)	[2.6]	①細粒②良好③橙 ④1/4	横撫で。篦削り。	丸底。篦削り。		31
59	H－10	土師坏	(13.8)	[4.9]	①細粒②良好③橙 ④1/3	口縁部短く外反。篦削り。	欠損。		31
60	表採	杯	－	－	①中粒②良好③にぶい褐④底部のみ	欠損。欠損。	平底。	底部に文様有り。	31
61	H－10	土師甕	(13.2)	－	①細粒②良好③明赤褐④1/2	『く』の字状口縁。篦削り。	欠損。		31
62	表採	椀	(12.8)	[3.6]	①細粒②良好③にぶい橙④1/5	直線的に外反。稜懐。	欠損。		31
63	D－2	土師杯	14.2	5.3	①細粒②極良③にぶい褐色④4/5	垂直に立ち上がる。	篦削り。内面撫で。	底部丸底。	31
64	H－10	土師甕	－	[27.2]	①中粒②良好③明黄褐④1/2	欠損。篦削り。	欠損。		31

Tab. 3 石器・特殊遺物観察表

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	形状・調整加工の特徴	Fig
1	H－1	削器	13.4	3.1	1.6	80.7	黒色頁岩	横長剥片を利用。偏刃状の刃部を持ち、両側縁に調整を加える。	32
2	H－3	剥片	7.5	5.5	1.2	58.2	黒色頁岩	打面調整剥片。裏面側縁に調整が見られる。	32
3	H－3	刀子	(10.1)	1.0	0.3	(10.8)	－		32
4	H－3	打製石斧	(5.0)	(3.2)	(1.4)	(36.1)	黒色頁岩	下部、特に胴部から刃部にかけての欠損。基部に自然面を残す。	32
5	H－3	削器	7.0	3.5	1.9	59.9	黒色頁岩	大型の横長剥片を利用。裏面右側縁に集中して調整、剥離。	32
6	H－3	軽石製品	3.9	3.5	1.8	12.8	軽石	中央部に凹み。	32
7	H－4	石鏃	2.1	(1.8)	0.4	(0.7)	チャート	基部の欠損。比較的えぐりが深い凹基無茎鏃。	32
8	H－4	瓦器	2.8	2.2	0.8	3.9	－	焼成後、穿孔。	32
9	H－4	敲石	8.2	3.6	1.6	78.4	黒色頁岩	偏平礫を使用。基部形成のため、器体上部に剥離を加える。	32
10	H－4	打製石斧	(5.3)	(3.6)	(1.8)	(37.2)	黒色頁岩	下部の欠損。上端部と側面に自然面を残す。	32
11	H－4	削器	4.4	3.4	0.9	12.9	頁岩	右側縁に微細な調整を施す。	32
12	H－4	削器	(6.6)	(4.2)	(0.7)	(25.1)	黒色頁岩	内湾部に調整を施して凹刃を作っている。	32
13	H－4	凹石	(9.9)	8.0	2.4	(277.4)	粗粒安山岩	偏平礫を利用。側面の所々に敲打痕。	32
14	H－4	削器	8.8	4.4	1.1	49.4	黒色頁岩	右側縁に鋭い刃部を形成している。器体側面に自然面を残す。	32
15	H－6	打製石斧	(6.6)	(5.6)	(1.3)	(64.1)	珪質頁岩	大型の横長剥片を使用。右側縁を中心に調整剥離。	32
16	H－6	石製品	1.7	1.7	0.8	3.0	蛇紋岩		33
17	H－6	紡錘車	(5.7)	(5.7)	1.7	(59.7)	－		33
18	H－9	剣形品	5.5	2.6	0.4	7.5	滑石		33
19	H－9	暗文式土器	(3.6)	(4.0)	5.5	(14.2)	－		33
20	H－9	削器	8.1	4.1	1.3	50.7	珪質頁岩	表面に自然面を残す。右側縁に刃部を形成。	33
21	H－10	打製石斧	7.7	4.1	1.1	56.1	変玄武岩	表面に自然面を残す。短冊形打製石斧。	33
22	H－10フク土	磨製石斧	3.9	1.9	0.7	7.0	蛇紋岩	小型定角式磨製石斧。刃部両端欠損。	33
23	H－10フク土	削器	10.1	10.8	1.0	48.2	黒色頁岩	右側縁に自然面を残す。	33
24	H－10	削器	8.4	6.1	1.3	75.4	黒色頁岩	上端部に自然面を残す。	33
25	H－10	削器	7.2	4.6	1.2	41.3	黒色頁岩	調整剥離で下端部に内湾した凹刃を作る。	33
26	H－10フク土	削器	3.7	3.9	0.8	20.0	黒色頁岩	周囲に微細な調整剥離を施す。	33
27	JD－1	削器	8.0	4.3	1.6	50.0	黒色頁岩	全体に粗い剥離を加える。	33
28	D－2	片刃形石器	6.4	3.2	0.6	27.8	黒色頁岩	横長剥片を使用。	33
29	D－1	打製石斧	10.4	4.2	1.6	112.7	黒色頁岩	偏平礫を利用し、表面に自然面を残す短冊形打製石斧。	33
30	フク土	削器	7.6	7.2	1.8	144.3	流紋岩質凝灰岩	器体の側縁と下部に調整剥片を加える。	34
31	フク土	削器	6.6	5.2	1.6	52.5	黒色頁岩	表面に自然面を残す。	34
32	フク土	打製石斧	7.8	4.1	1.1	61.6	頁岩	横長剥片を使用。周囲全体に調整を加える。	34
33	フフ土	削器	5.7	8.4	1.2	88.1	黒色頁岩	自然面側に刃部を形成。	34
34	フク土	敲石	9.9	6.5	3.2	310.2	ホルンフェルス	偏平礫の右側縁に敲打痕が見られる。	34
35	フク土	磨石	(8.6)	8.6	3.6	(380.0)	粗粒安山岩	表面が浅く凹み、周囲に敲打痕がある。	34
36	フク土	敲石	14.8	3.4	2.2	165.2	粗粒安山岩	棒状礫の両端と側面を敲打面としている。	34
37	フク土	凹石	10.8	8.6	4.1	458.0	粗粒安山岩	偏平礫を利用。表裏両面が凹み全体に磨かれ、敲打痕が見られる。	34
38	フク土	礫石	9.6	5.4	3.2	254.9	黒色頁岩	粗い剥離によって器体を形成。表裏面に自然面を残す。	34
39	フク土	削器	3.3	3.8	0.6	11.3	黒色頁岩	両側縁に調整剥離を加える。	34

Tab. 4 縄文式土器観察表

番号	出土位置	①胎 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備 考	Fig
1	H－3	①細粒②良好③橙 ④口縁部	半截竹管による平行沈線 コンパス文	黒 浜	35
2	H－3	①細粒②良好③明黄褐④胴部	縄文RL	諸 磯	35
3	H－3	①細粒②不良③明褐④胴部	弱い撚り 1段 縄文R	前期前半	35
4	H－4	①細粒②不良③にぶい黄橙④胴部	3本1組の絡条体圧痕R 2本1組の絡条体圧痕L	花積下層	35
5	H－4	①細粒②不良③明黄褐④胴部	格子目沈線	黒 浜	35
6	H－4	①細粒②不良③橙 ④胴部	半截竹管による平行沈線 連続紋爪形文	黒 浜	35
7	H－4	①細粒②不良③にぶい黄橙④胴部	半截竹管による平行沈線 連続紋爪形文	黒 浜	35
8	H－4	①細粒（白色鉱物）②良好③にぶい橙④胴部	縄文LR	諸 磯	35
9	H－4	①中粒（金雲母）②良好③橙 ④胴部	微隆起 波状沈線	阿 玉 台	35
10	H－4	①細粒②不良③にぶい赤褐④口縁部	半截竹管による平行沈線	有 尾	35
11	H－4	①細粒②良好③にぶい黄褐④胴部	半截竹管による平行沈線	有 尾	35
12	H－4	①細粒②良好③橙 ④胴部	半截竹管による平行沈線 連続紋爪形文	有 尾	35
13	H－4	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部	同心円状沈線 1段縄文L	堀之内Ⅰ	35
14	H－6	①中粒（白色鉱物）②不良③にぶい黄橙④胴部	半截竹管による平行沈線 地文に縄文LR	加曽利E4	35
15	H－6	①細粒②極良③明赤褐④口縁部	縄文RL	諸 磯 a	35
16	H－6	①細粒②良好③にぶい橙④胴部	半截竹管による平行沈線 円形刺突 地文に縄文RL	諸 磯 a	35
17	H－6	①細粒②良好③にぶい褐④胴部	縄文RL 円形刺突	諸 磯	35
18	H－9	①細粒②不良③にぶい橙④口縁部	縄文LR	黒 浜	35
19	H－9	①細粒②良好③橙 ④口縁部	羽状縄文左RL 右LR	有 尾	35
20	H－9	①細粒②不良③にぶい黄橙④胴部	縄文RL	黒 浜	35
21	H－10	①細粒②不良③橙 ④口縁部	縄文LR	黒 浜	35
22	H－10	①細粒②不良③橙 ④底部	弱い撚り縄文RL 円形刺突	黒 浜	35
23	H－10	①細粒②良好③明黄褐④胴部	半截竹管による平行沈線 縄文RL	黒 浜	35
24	H－10	①細粒②良好③明褐④胴部	半截竹管による平行沈線 地文に縄文LR	有 尾	35
25	H－10	①細粒（白色鉱物）②良好③褐 ④胴部	半截竹管による平行沈線 連続爪形文 羽状縄文	有 尾	35
26	H－10	①細粒②良好③褐 ④胴部	半截竹管による平行沈線 連続爪形文	有 尾	36
27	JD－1	①細粒②良好③褐 ④胴部	半截竹管による平行沈線 連続爪形文	有 尾	36
28	JD－1	①細粒②良好③にぶい橙④胴部	沈線 縄文RL	有 尾	36
29	JD－1	①細粒②良好③明褐④胴部	1段 縄文L	黒 浜	36
30	JD－1	①細粒②良好③黒褐④胴部	縄文LR	前期前半	36
31	JD－2	①細粒②良好③にぶい赤褐④胴部	半截竹管による平行沈線 連続爪形文 地文に縄文RL	黒 浜	36
32	JD－2	①中粒（白色鉱物）②良好③黄褐④胴部	縄文RL	前期前半	36
33	JD－2	①細粒②良好③にぶい橙④胴部	弱い撚り 絡条体圧痕	花積下層	36
34	D－5G	①細粒②極良③橙 ④胴部	波状沈線	花積下層	36
35	フク土	①細粒②良好③明赤褐④胴部	半截竹管による平行沈線 波状平行沈線 円形刺突	黒 浜	36
36	フク土	①細粒②良好③明赤褐④底部	縄文RL	諸 磯	36
37	フク土	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	微隆起上とその周辺に円形刺突	称名寺Ⅰ	36
38	フク土	①細粒②良好③にぶい橙④口縁部	半截竹管による平行沈線	有 尾	36
39	フク土	①細粒②良好③橙 ④胴部	弱い撚り 絡条体圧痕	花積下層	36
40	フク土	①中粒（白色鉱物）②良好③明赤褐④口縁部	縄文LR	諸 磯	36
41	フク土	①細粒②良好③明赤褐④胴部	半截竹管による波状沈線	花積下層	36
42	フク土	①細粒②不良③褐 ④胴部	羽状縄文 上LR 下RL	黒 浜	36
43	フク土	①中粒（白色鉱物）②良好③赤褐④口縁部	縄文RL 円形刺突	諸 磯	36
44	フク土	①中粒②良好③橙 ④胴部	半截竹管による平行沈線 連続爪形文	有 尾	36
45	フク土	①細粒②良好③橙 ④胴部	半截竹管による波状沈線	黒 浜	36
46	フク土	①細粒②良好③橙 ④口縁部	縄文RL	黒 浜	36
47	フク土	①細粒②不良③にぶい橙④胴部	縄文LR	前期前半	36
48	フク土	①粗粒（鉱物含む）②良好③にぶい橙④胴部	羽状縄文 上LR 下RL	前期前半	36

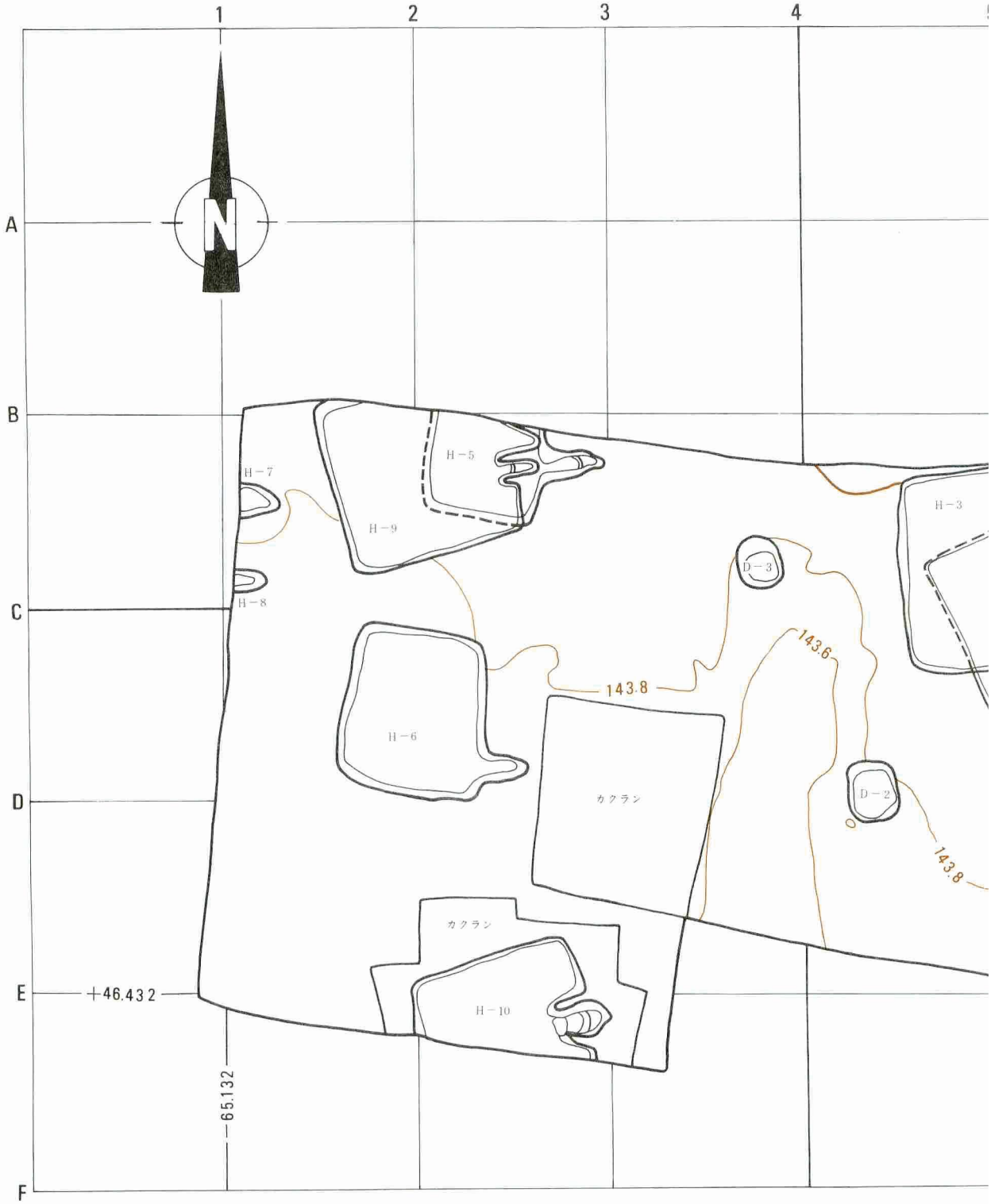
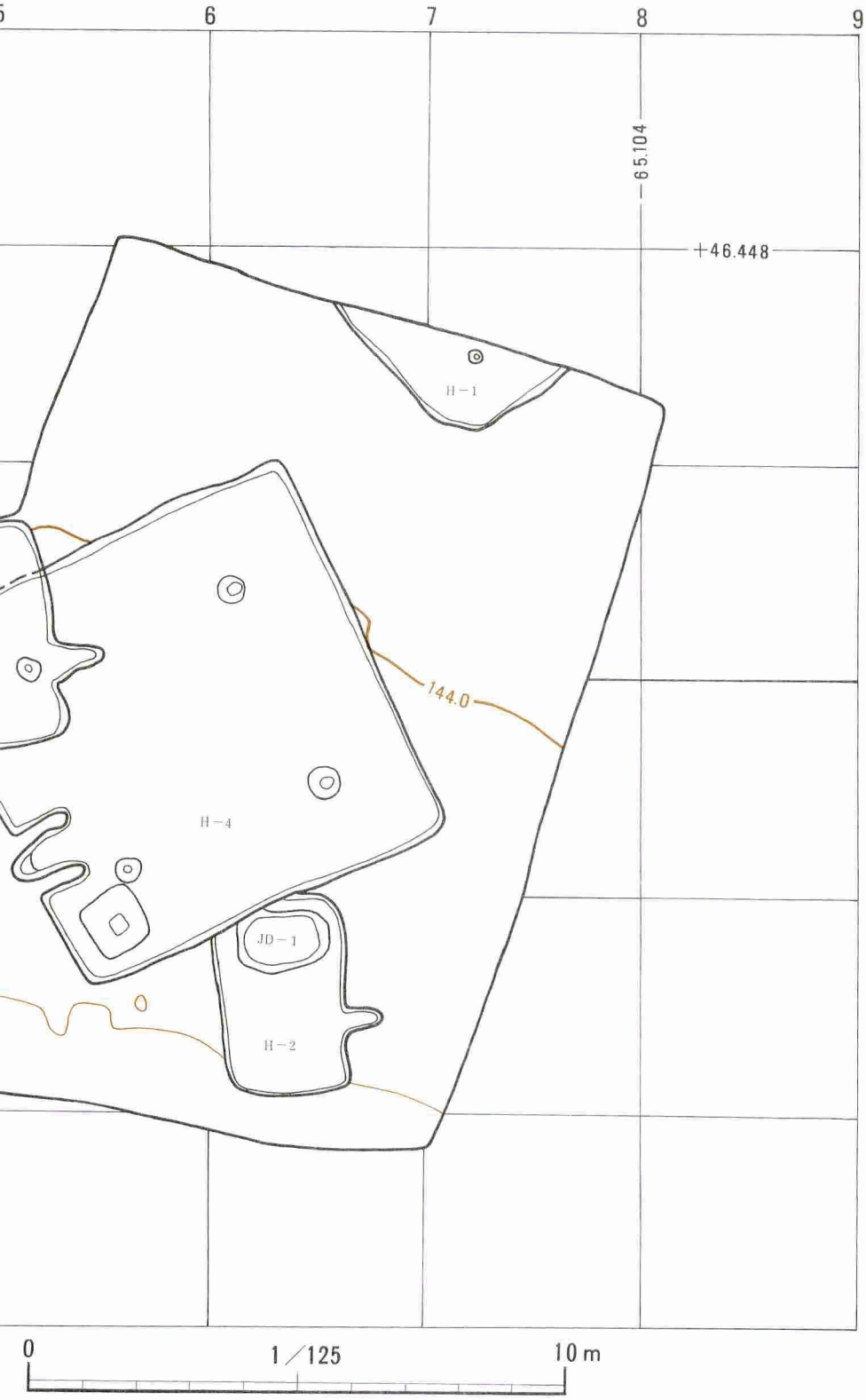
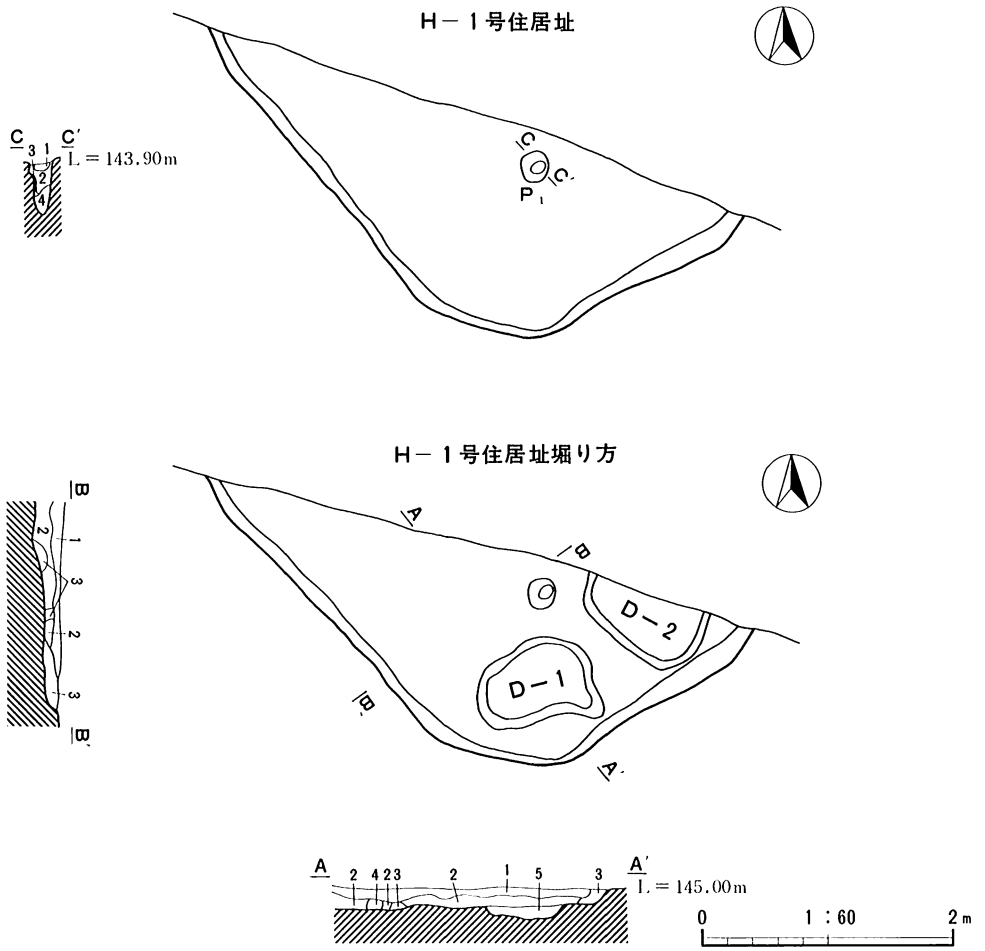


Fig. 5　芳賀北原遺跡全体



図



H－1号住居址

1層：暗褐色土層
　　径2～5㎜程のロームブロック10%含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

2層：褐色土層
　　極大のロームブロックを若干含む細砂層。しまり有り、粘性やや有り。

3層：明褐色土層
　　ロームブロックを多量に含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

4層：鈍い褐色土層
　　ソフトロームブロック主体の微砂層。しまり、粘性共にやや有り。

5層：暗褐色細砂層
　　ロームブロックを少量含む細砂層。しまり有り、粘性やや有り。

H－1号住居址　P－1

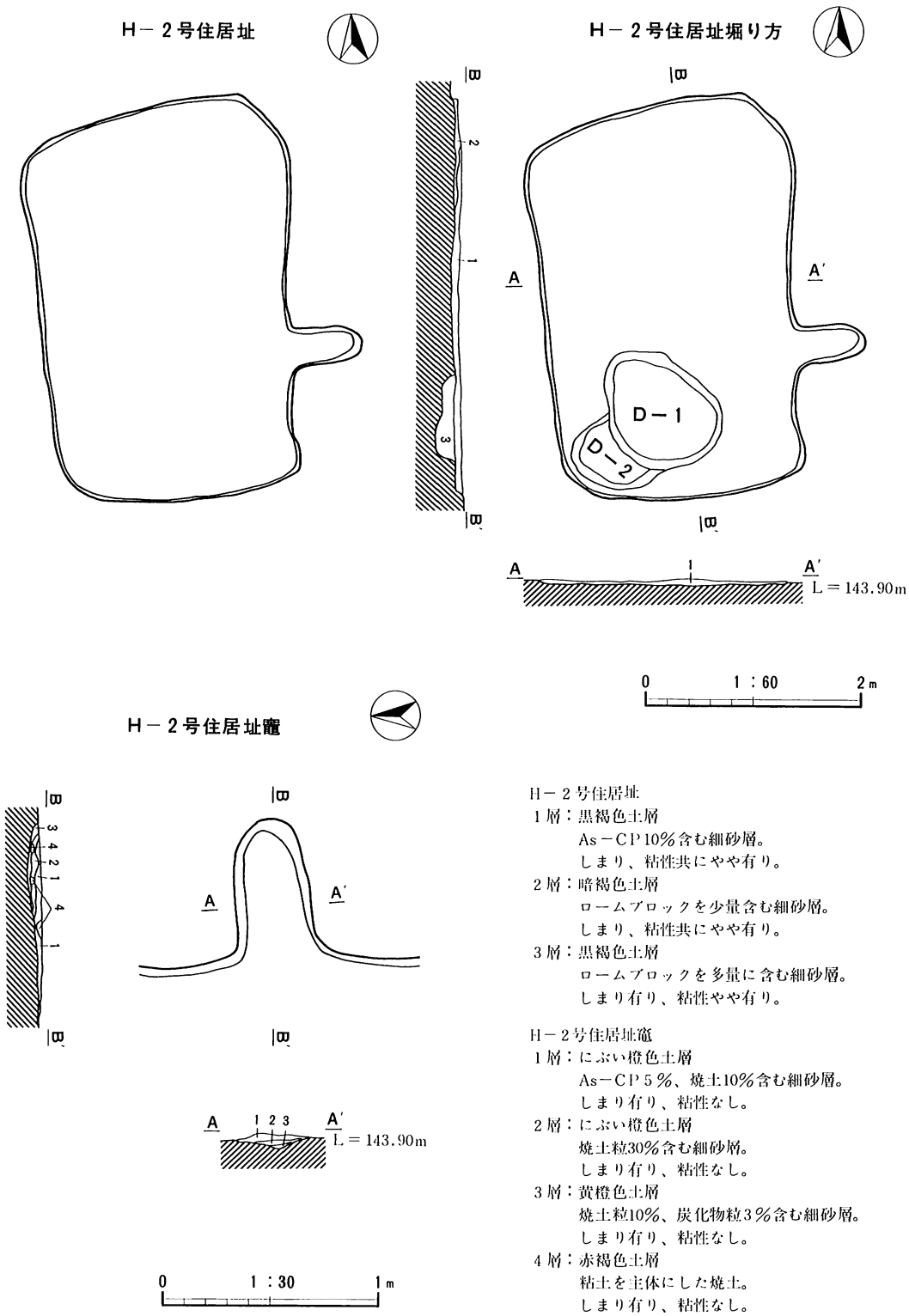
1層：黒褐色土層
　　径1～2㎜程のCP1%含む細砂層。しまり、粘性なし。

2層：にぶい黄褐色土層
　　ロームブロックを若干含む細砂層。しまり有り、粘性やや有り。

3層：褐色土層
　　ロームブロックを少量含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

4層：黄褐色土層
　　多量のロームブロックを含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

Fig. 6　芳賀北原遺跡遺構図（1）



H－2号住居址

1層：黒褐色土層
　　As－CP10％含む細砂層。
　　しまり、粘性共にやや有り。

2層：暗褐色土層
　　ロームブロックを少量含む細砂層。
　　しまり、粘性共にやや有り。

3層：黒褐色土層
　　ロームブロックを多量に含む細砂層。
　　しまり有り、粘性やや有り。

H－2号住居址竈

1層：にぶい橙色土層
　　As－CP5％、焼土10％含む細砂層。
　　しまり有り、粘性なし。

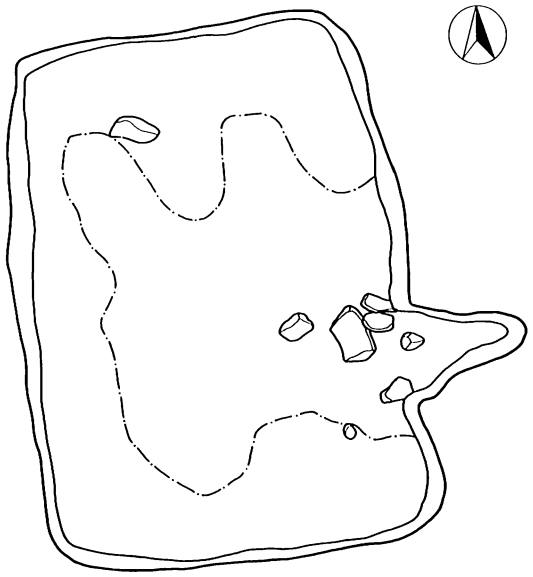
2層：にぶい橙色土層
　　焼土粒30％含む細砂層。
　　しまり有り、粘性なし。

3層：黄橙色土層
　　焼土粒10％、炭化物粒3％含む細砂層。
　　しまり有り、粘性なし。

4層：赤褐色土層
　　粘土を主体にした焼土。
　　しまり有り、粘性なし。

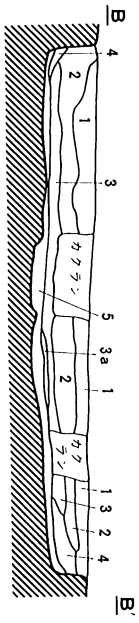
Fig. 7　芳賀北原遺跡遺構図（2）

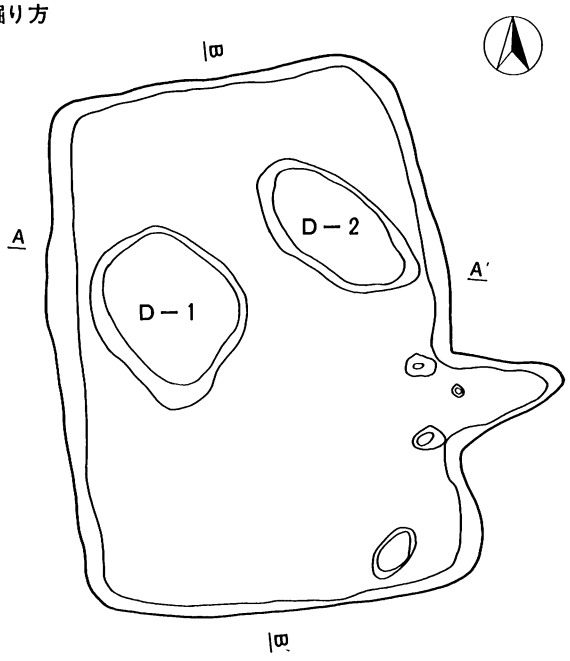
H－3号住居址

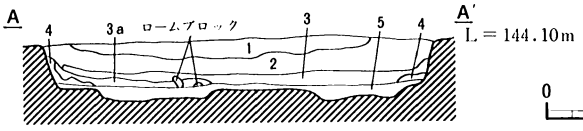


H－3号住居址
1層：暗褐色土層　細砂。
As－CP20％含む。
しまりやや有り。
粘性もややみられる。
2層：黒褐色土層　細砂。
As－CP20％含む。
しまりやや有り。
粘性有り。
3層：暗褐色土層　細砂。
As－CP5％含む。
しまり有り。
粘性もやや有り。
3a層：暗褐色土層　細砂。
As－CP1％含む。
しまりやや有り。
粘性有り。
4層：にぶい黄褐色土層
ロームを少量含む。
しまり有り。
粘性やや有り。
5層：黒褐色土層　細砂。
ロームを多量に含む。
しまり有り。
粘性有り。貼り床。

H－3号住居址掘り方

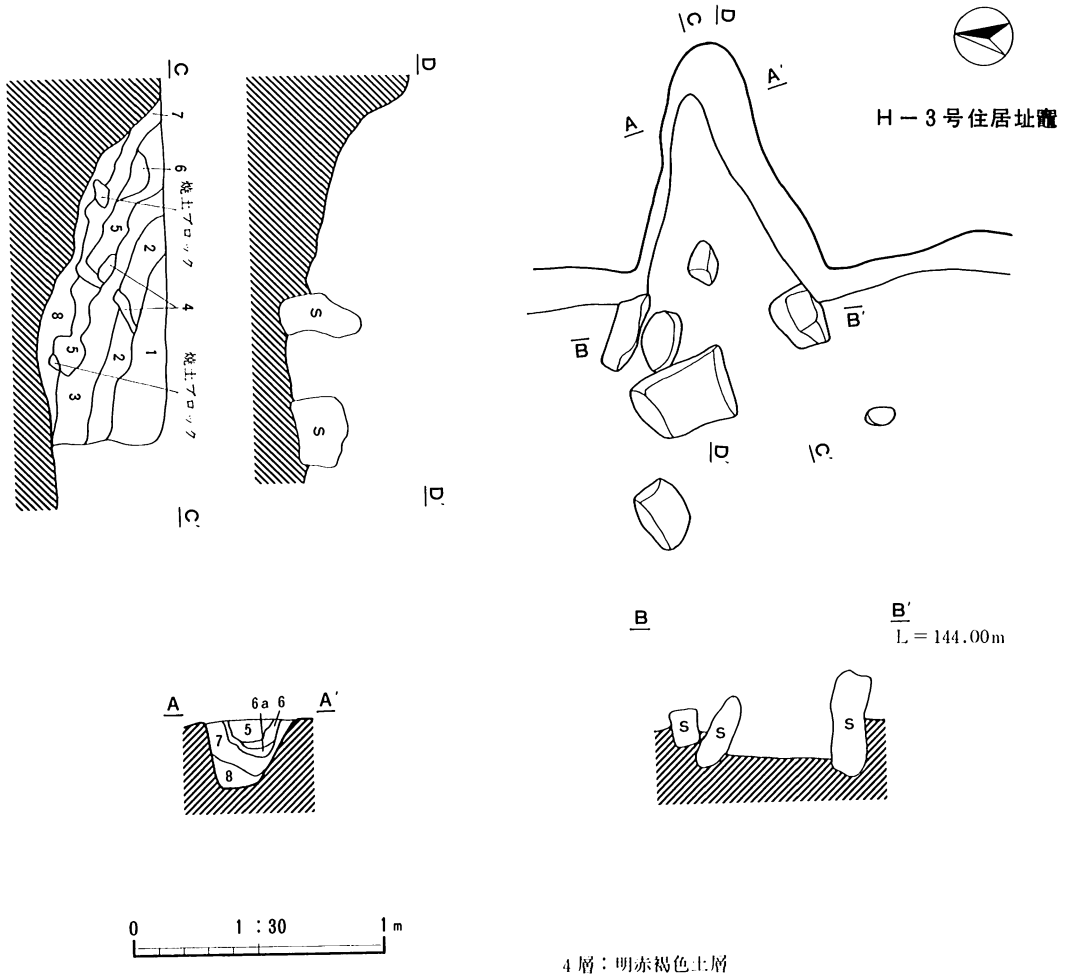






0　1：60　2m

Fig. 8　芳賀北原遺跡遺構図（3）



H－3号住居址竈

1層：暗褐色土層
　径1～2㎜のAs－CPを10％含む細砂層。
　焼土粒、ロームブロックを若干含む。
　しまり、粘性共にやや有り。

2層：褐色土層
　As－CPを3％程含む細砂層。
　炭化物粒、ソフトロームブロックを若干含む。
　しまり有り、粘性やや有り。

3層：にぶい褐色土層
　As－CPを3％含む細砂層。
　ソフトロームブロックを若干含む。
　しまり有り、粘性やや有り。

4層：明赤褐色土層
　焼土粒を主体にロームブロックを若干含む細砂層。
　しまり有り、粘性なし。

5層：明黄褐色土層
　灰を主体にした微砂層。
　しまりやや有り、粘性なし。

6層：黒色土層
　炭化物を主体に焼土粒5％、灰10％を含む細砂層。
　しまりやや有り、粘性有り。

6a層：黒褐色土層
　焼土粒5％、灰20％を含む細砂層。
　しまりやや有り、粘性有り。

7層：黄褐色土層
　灰を主体に焼土粒、ロームブロックを含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

8層：にぶい赤褐色土層
　焼土を主体にした細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

Fig. 9　芳賀北原遺跡遺構図（4）

H－4号住居址

H－4号住居址

1層：褐色土層
セカンダリーのAs－CP20%、
FP3%、焼土粒5%含む細砂層。
しまり、粘性共に有り。

2層：黒褐色土層
セカンダリーのAs－CP10%、
炭化物粒を少量含む細砂層。
しまり、粘性共にやや有り。

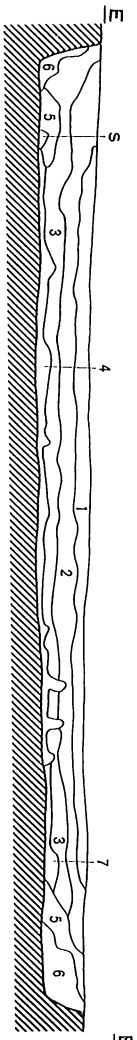
3層：黒褐色土層
セカンダリーのAs－CP10%、
ローム粒5%含む細砂層。
しまり、粘性共にやや有り。

4層：にぶい黄褐色土層
焼土粒5%、炭化物粒を3%含
む細砂層。
しまり、粘性共に有り。

5層：にぶい黄褐色土層
ローム粒20%、セカンダリーの
As－CP3%含む細砂層。
しまり、粘性共に有り。

6層：黄褐色土層
ロームブロックを主体に炭化物、
焼土粒を若干含む細砂層。
しまり有り、粘性やや有り。

7層：にぶい黄褐色土層
セカンダリーのAs－CP5%、
焼土粒10%を含む細砂層。
しまり、粘性共にやや有り。



0　1：60　2m

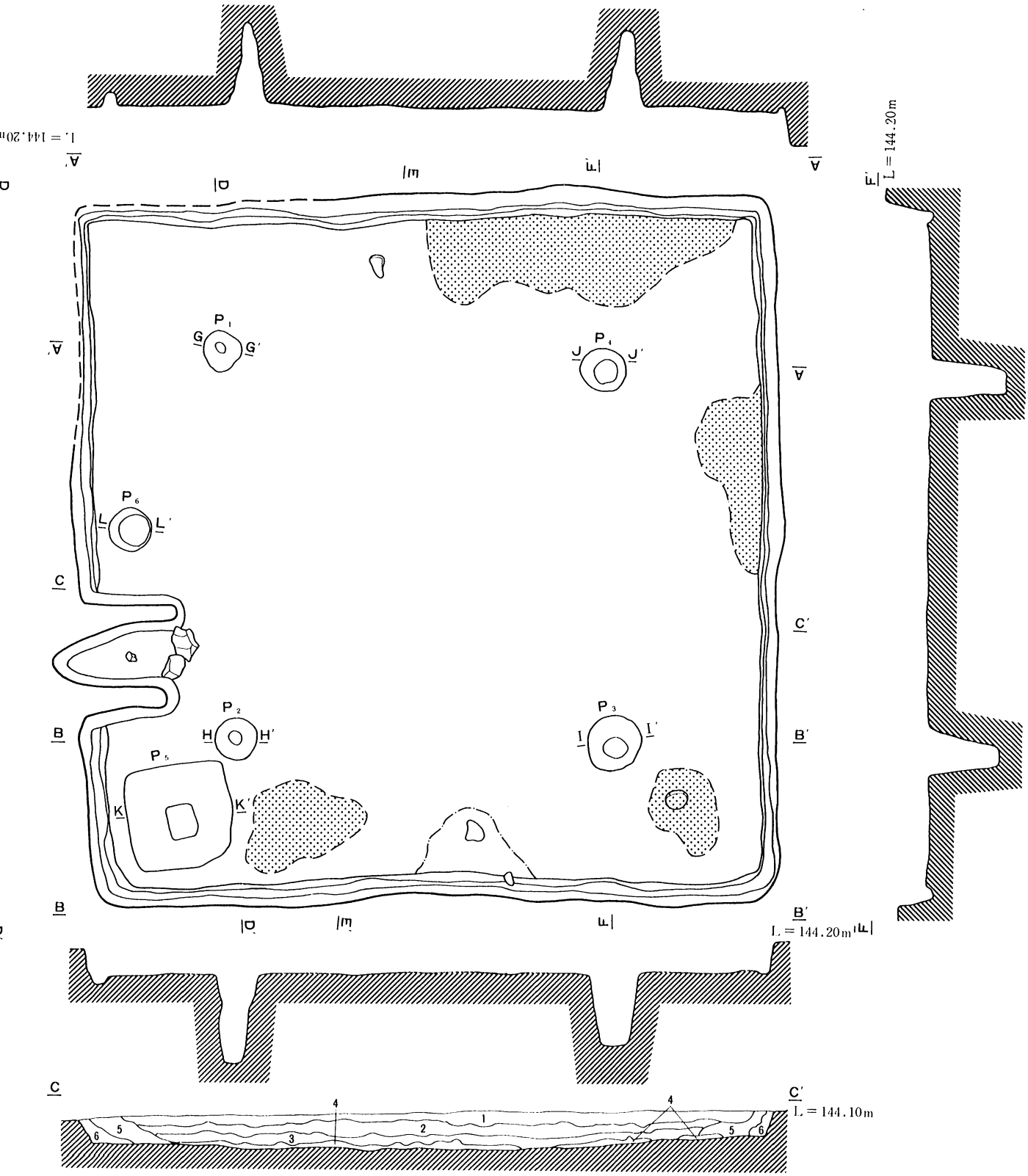
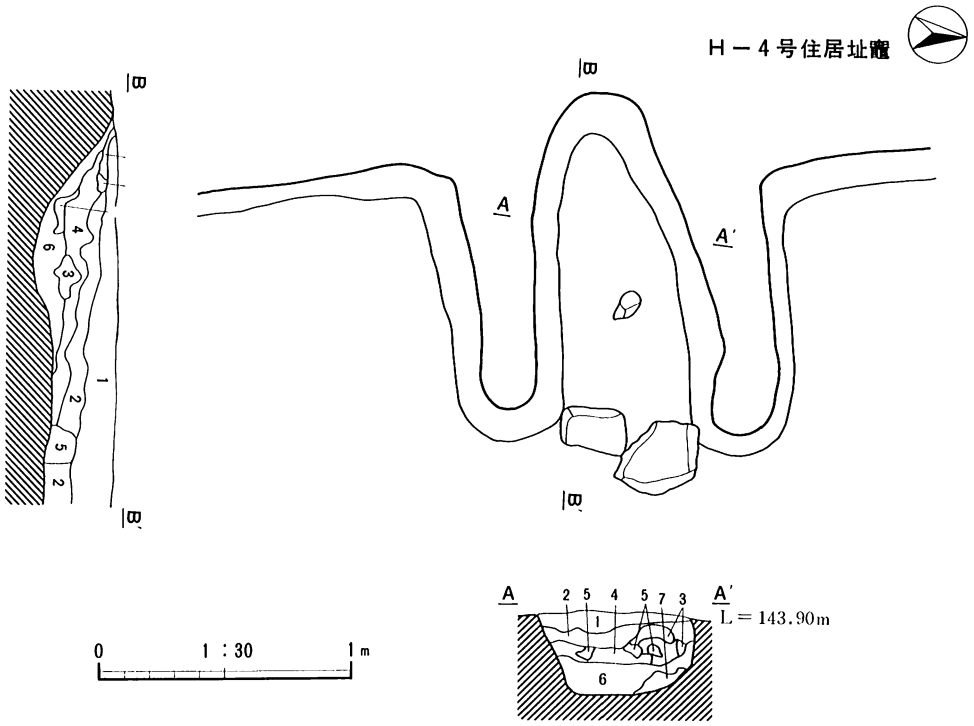


Fig. 10　芳賀北原遺跡遺構図（5）



H－4号住居址竈

1層：褐色土層
径1～2mmのセカンダリーのAs－CP20%、径3～5mmの焼土粒子3%を含む細砂層。ローム粒も若干みられる。
堅く良くしまり、やや粘性を有す。

2層：にぶい褐色土層
径2～3mmのセカンダリーのAs－CPを10%、径3～5mmの焼土粒子20%、径10mm程のロームブロックを少量含む細砂層。
堅くしまり、粘性を有す。

3層：黄褐色土層
径2～10mmのロームブロックを3%、径3～5mmの焼土粒子10%、径5mm程の粘土ブロックを若干含む細砂層。
しまり、粘性共に有り。

4層：明褐色土層
径1～2mmのセカンダリーのAs－CPを1%、径3～7mmの焼土粒10%、径2～3mmの炭化物粒1%を含む細砂層。
しまりがあり、粘性もややみられる。

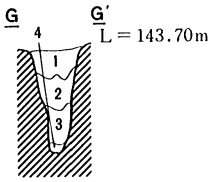
5層：橙色土層
焼土ブロック。若干の炭化物粒の混入がみられる細砂層。
良く焼けていて堅く、しまっている。また、粘性はみられない。

6層：灰褐色土層
灰を主体としている層で、径2～3mmの炭化物粒子、径5～10mmの焼土ブロックの混入がみられる微砂層。
しまりはやや有るが、粘性はみられない。

7層：灰褐色土層
灰を主体に径2～5mmの焼土粒子を少量、径1～2mmの炭化物粒子を若干含む微砂層。
粘性はみられるが、しまりはなし。

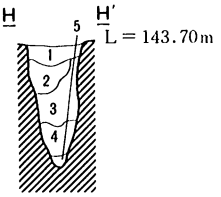
Fig. 11　芳賀北原遺跡遺構図（6）

P－1



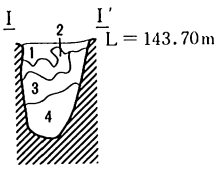
H－4号住居址　P－1
1層：黒褐色土層
　CPを少量含む細砂層。
　しまり有り、粘性やや有り。
2層：褐色土層
　ローム粒を若干含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
3層：暗褐色土層
　炭化物を少量含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
4層：褐色土層
　ローム粒を多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共に有り。

P－2



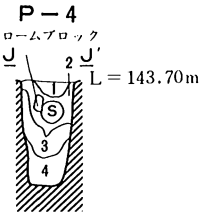
H－4号住居址　P－2
1層：黒褐色土層
　ローム粒を少量含む細砂層。
　しまり、粘性有り。
2層：にぶい褐色土層
　ローム粒を若干含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
3層：にぶい褐色土層
　炭化物を少量含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
4層：褐色土層
　ローム粒を少量含む微砂層。
　しまりやや有り、粘性有り。
5層：暗褐色土層
　ローム粒を多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

P－3



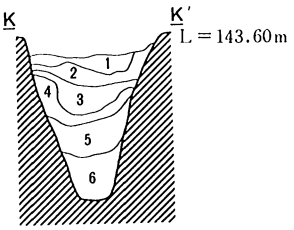
H－4号住居址　P－3
1層：にぶい黄褐色土層
　ソフトローム粒を若干含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
2層：にぶい黄褐色土層
　炭化物、CP若干含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
3層：黄褐色土層
　ローム粒を多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
4層：明黄褐色土層
　ローム粒を多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

P－4



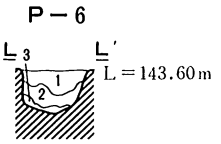
H－4号住居址　P－4
1層：にぶい黄褐色土層
　CP3％、ローム粒5％含む細砂層。
　しまり有り、粘性やや有り。
2層：褐色土層
　CP5％、ローム粒10％含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
3層：黒褐色土層
　ローム粒を含む流れ込み。細砂層。
　しまりなし、粘性やや有り。
4層：黄褐色土層
　ローム粒多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

P－5



H－4号住居址　P－5
1層：にぶい黄褐色土層
　CP3％含む細砂層。
　しまり、粘性共になし。
2層：黒褐色土層
　CP30％含む粗砂層。
　しまり、粘性共になし。
3層：暗褐色土層
　CP1％、炭化物粒多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
4層：褐色土層
　炭化物粒多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
5層：明黄褐色土層
　炭化物、ローム粒を多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
6層：にぶい黄褐色土層
　ローム粒を多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共に有り。

P－6



H－4号住居址 P－6
1層：黒褐色土層
　CPを少量含む細砂層。
　しまり有り、粘性やや有り。
2層：暗褐色土層
　ローム粒を少量含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。
3層：にぶい黄褐色土層
　ローム粒を多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

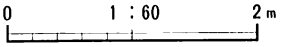
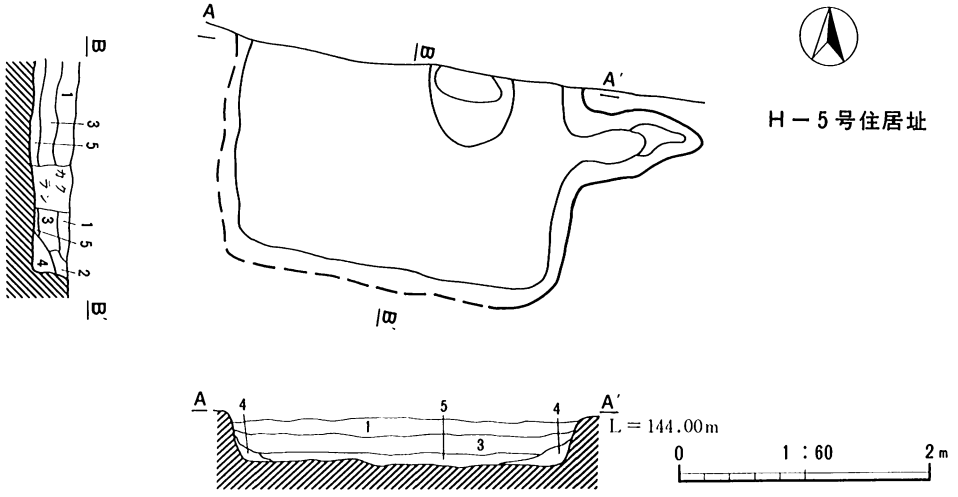


Fig. 12　芳賀北原遺跡遺構図（7）



H－5号住居址

1層：黒褐色土層
　径1～2㎜のAs－CPを20%、径10㎜のFP5%含む細砂層。しまりはやや有るが、粘性はみられない。

2層：灰黄褐色土層
　径2～3㎜のAs－CP20%、FP5%含む細砂層。
　1層と同じく、しまりは有るが、粘性はみられない。

3層：暗褐色土層
　径1～2㎜のAs－CP15%、径5㎜程のFPを若干含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

4層：暗褐色土層
　径1～2㎜のCP10%含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

5層：褐色土層
　ソフトローム5%、焼土粒5%含む細砂層。
　しまり有り。粘性やや有り。

H－5号住居址竈

1層：褐色土層
　As－CP3%、焼土粒5%含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

2層：にぶい褐色土層
　As－CP5%、焼土粒3%含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

3層：明赤褐色土層
　焼土粒を主体に炭化物を若干含む細砂層。
　しまり、粘性共に有り。

4層：にぶい赤褐色土層
　焼土粒を主体に炭化物若干含む細砂層。
　しまり、粘性共に有り。

5層：灰褐色土層
　灰を主体に焼土粒を若干含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

6層：黄褐色土層
　ロームブロックを多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共に有り。

7層：褐灰色土層
　灰を主体に炭化物を多量に含む細砂層。
　しまりやや有り、粘性有り。

8層：橙色土層
　焼土粒を若干含む細砂層。
　しまり、粘性共に有り。

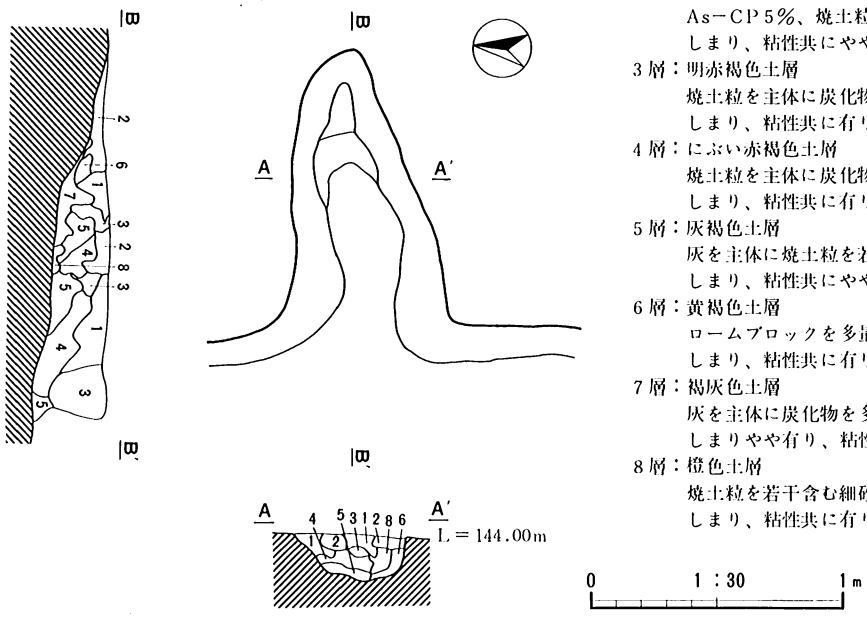
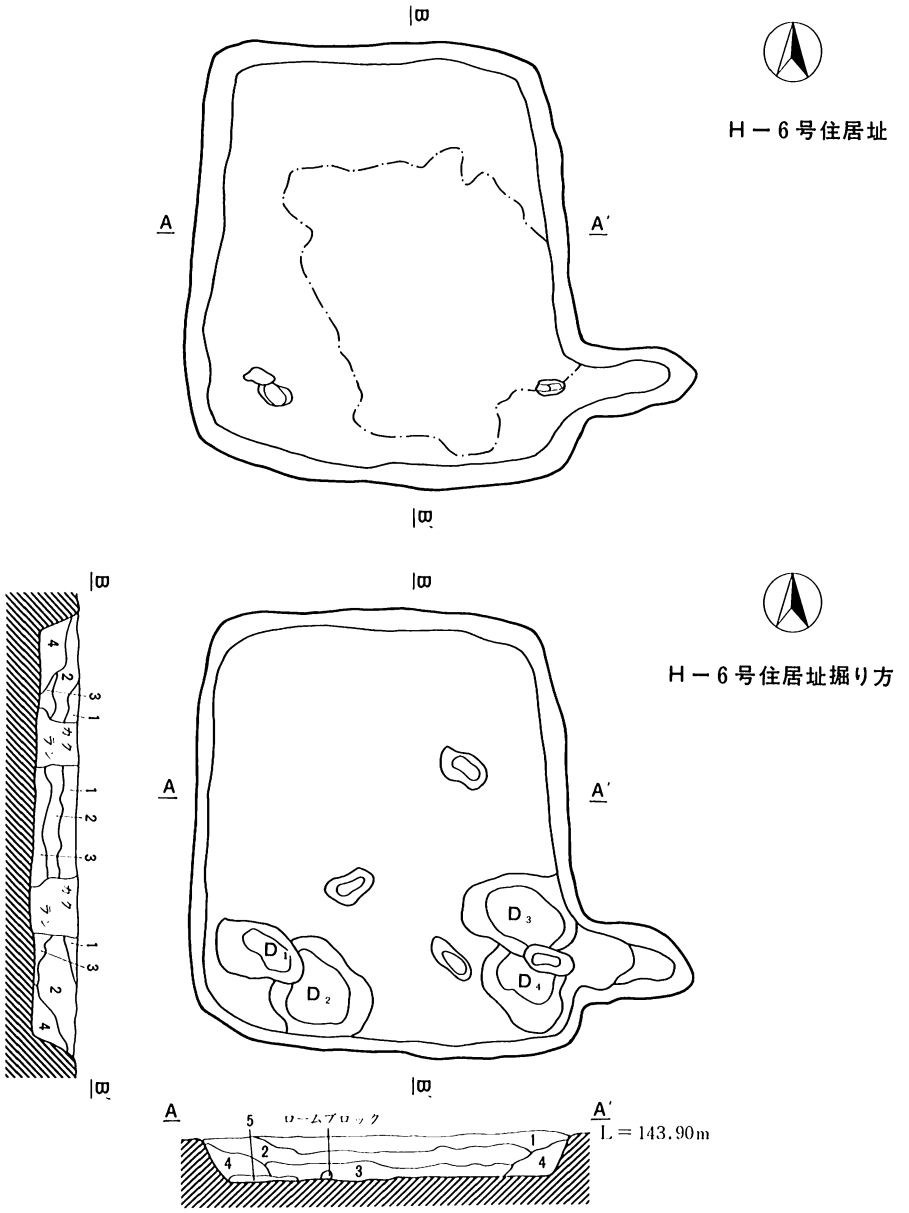


Fig. 13　芳賀北原遺跡遺構図（8）



H－6号住居址

1層：暗褐色土層
　CP10%、ローム粒1%含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

2層：褐色土層
　CP10%、炭化物粒を若干含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

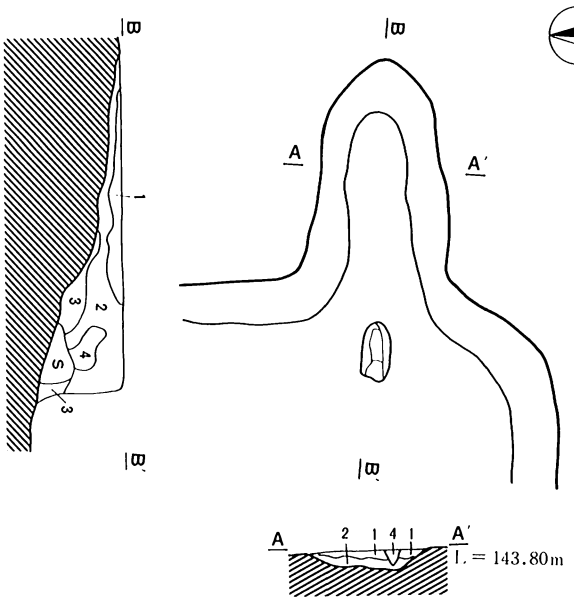
3層：にぶい黄褐色土層
　CP 5%、焼土粒1%含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

4層：にぶい褐色土層
　CP 5%、ローム粒5%含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

5層：明褐色土層
　ロームブロック多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

0　1：60　2m

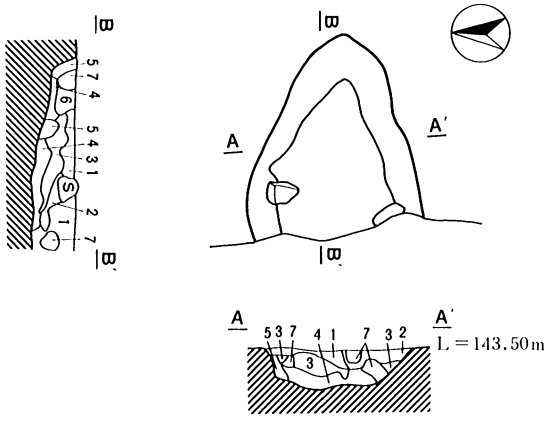
Fig. 14　芳賀北原遺跡遺構図（9）



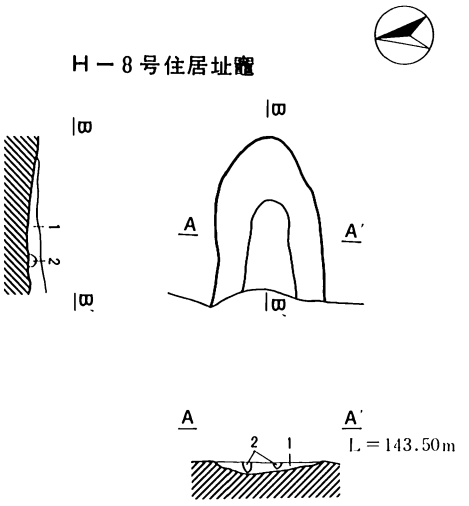
H－6号住居址竈

H－6号住居址竈
1層：明褐色土層
焼土ブロック20%、CP 5%を含む細砂層。
しまり有り、粘性やや有り。
2層：にぶい橙色土層
CP10%、焼土ブロック10%、炭化物粒3%含む細砂層。
しまり、粘性共にやや有り。
3層：黒褐色土層
灰を主体に焼土ブロック5%、炭化物粒10%含む細砂層。
しまりなし、粘性やや有り。
4層：明赤褐色土層　細砂。焼土ブロック。

H－7号住居址竈



H－8号住居址竈

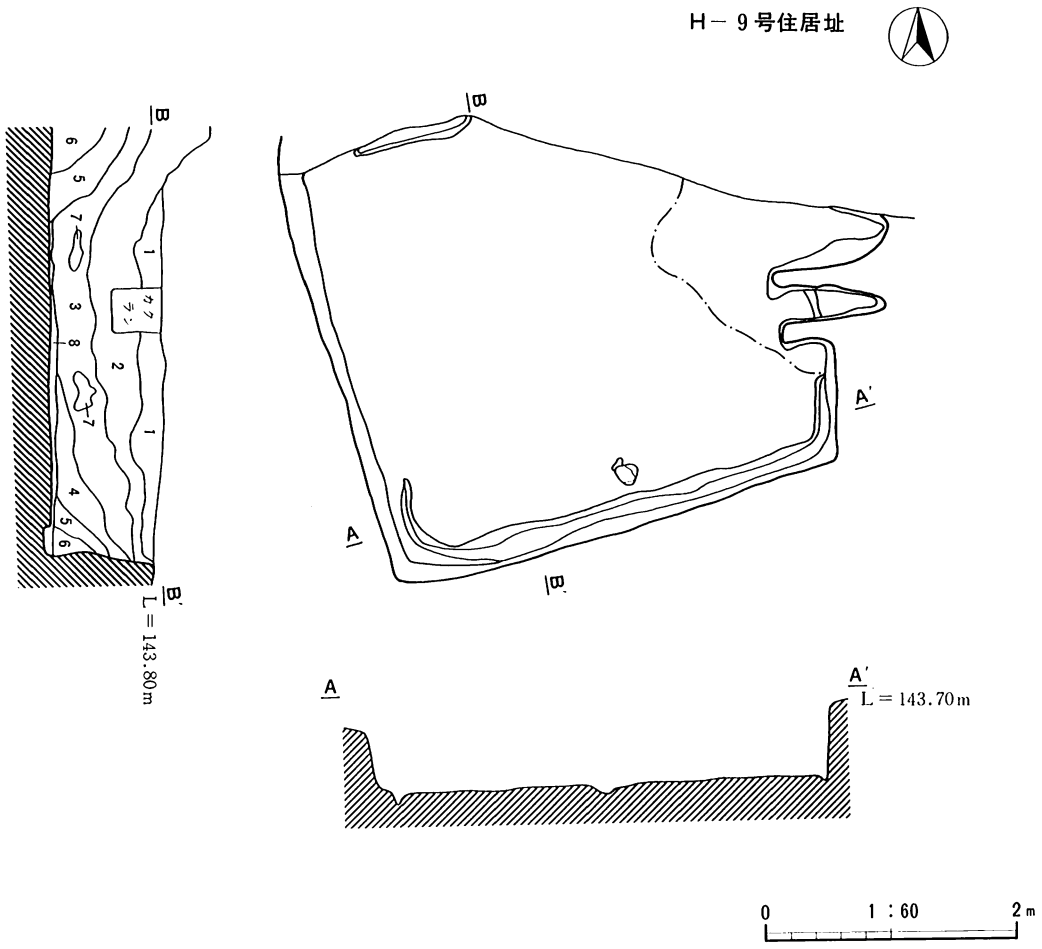


H－7号住居址竈
1層：灰褐色土層
焼土ブロックを10%含む細砂層。
しまり有り、粘性やや有り。
2層：にぶい褐色土層
灰を主体に焼土ブロックを若干含む細砂層。
しまり、粘性共にやや有り。
3層：褐灰色土層
灰を主体に炭化物粒を若干含む細砂層。
しまり、粘性共にやや有り。
4層：にぶい赤褐色土層
焼土を主体に炭化物粒を若干含む細砂層。
しまり、粘性共にやや有り。
5層：黒褐色土層
炭化物を主体に灰を多量に含む細砂層。
しまり、粘性共にやや有り。
6層：褐灰色土層
焼土粒3%、炭化物粒を多量に含む細砂層。
しまり、粘性共にやや有り。
7層：明赤褐色土層　細砂。焼土ブロック。

H－8号住居址竈
1層：灰褐色土層
灰を主体に焼土粒10%、炭化物粒5%含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。
2層：赤褐色土層　細砂。焼土ブロック。

0　1：30　1m

Fig. 15　芳賀北原遺跡遺構図（10）



H－9号住居址

1層：黒褐色土層
径2～3cmのFP 3％、径1～2mmのCP20％含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

2層：にぶい褐色土層
径1～2cmのFP 5％、径1～2mmのCP15％、焼土粒、炭化物を若干含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

3層：にぶい褐色土層
径1～2mmのCP 7％、ローム粒20％、炭化物粒若干含む細砂層。しまり有り、粘性やや有り。

4層：褐色土層
径1～2mmのCP 5％、ローム粒10％含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

5層：黒褐色土層
炭化物粒20％、ローム粒3％含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

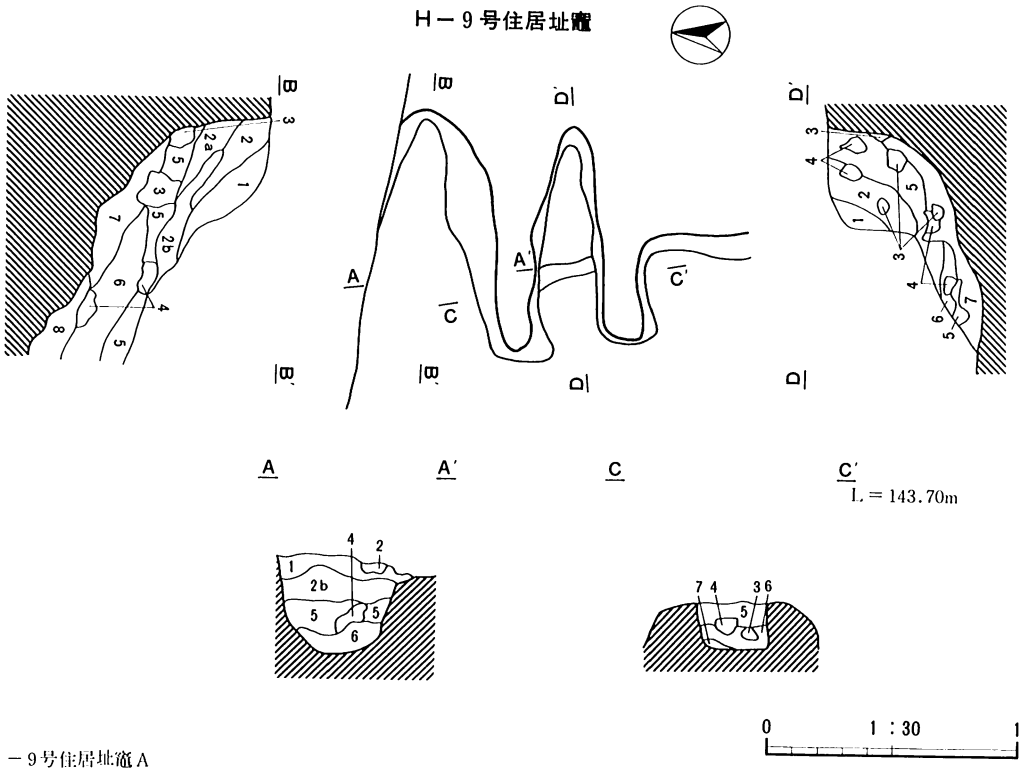
6層：黄褐色土層
ソフトロームを主体にCP 3％、炭化物粒5％含む細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

7層：明黄褐色土層　微砂。ハードロームブロック。

8層：黒褐色土層
ハードロームを多量に含む細砂層。しまり強、貼り床面。

Fig. 16　芳賀北原遺跡遺構図（11）

H－9号住居址竈



H－9号住居址竈A

1層：褐灰色土層
　径1～2㎜のCP3％、焼土粒5％含む細砂層。
　しまりなし、粘性やや有り。

2層：明褐色土層
　焼土を主体に灰を少量含む細砂層。
　しまり有り、粘性やや有り。

2a層：明褐色土層
　焼土を主体に灰と炭化物を少量含む細砂層。
　しまり有り、粘性やや有り。

2b層：明褐色土層
　焼土を主体に灰と炭化物を少量含む細砂層。
　しまり、粘性共に有り。

3層：明赤褐色土層
　焼土ブロック。しまり有り、粘性やや有り。

4層：褐灰色土層
　灰を主体に粘土粒を多量に含む微砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

5層：にぶい褐色土層
　焼土を主体に粘土粒子を少量含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

6層：明赤褐色土層
　焼土粒子を多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

7層：褐灰色土層
　灰を主体に焼土粒、炭化物粒を多量に含む微砂層。しまりなし、粘性有り。

8層：灰褐色土層
　灰を主体に炭化物粒を若干含む微砂層。
　しまりなし、粘性やや有り。

H－9号住居址竈B

1層：褐灰色土層
　径1～2㎜のCP3％、焼土粒5％含む細砂層。しまりなし、粘性やや有り。

2層：明褐色土層
　焼土を主体に灰を少量含む細砂層。
　しまり有り、粘性やや有り。

3層：明赤褐色土層
　焼土ブロック。しまり有り、粘性やや有り。

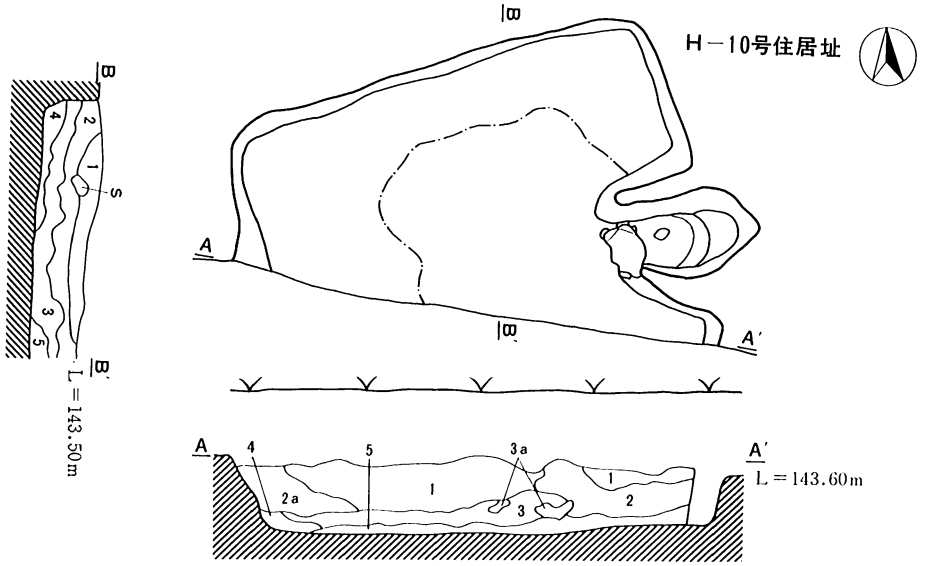
4層：褐灰色土層
　灰を主体に粘土粒を多量に含む微砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

5層：にぶい褐色土層
　焼土を主体に粘土粒子を少量含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

6層：明赤褐色土層
　焼土粒子を多量に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

7層：褐灰色土層
　灰を主体に焼土粒、炭化物粒多量に含む微砂層。しまりなし、粘性有り。

Fig. 17　芳賀北原遺跡遺構図（12）



H－10号住居址

1層：黒褐色土層
　　径1～2㎜のCP20%、ローム粒1%含む細砂層。
　　しまり、粘性共にやや有り。

2層：にぶい黄褐色土層
　　径2～3㎜のCP10%、FP10%を含む細砂層。
　　しまり、粘性共にやや有り。

2a層：にぶい黄褐色土層
　　径1～2㎜のCP5%、ソフトローム5%含む細砂層。
　　しまり、粘性共にやや有り。

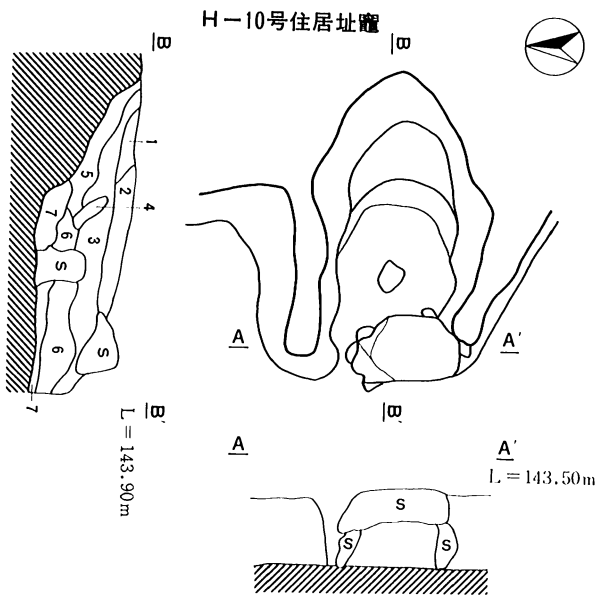
3層：黒褐色土層
　　径2～3㎝のFP10%、CP10%含む細砂層。
　　しまり、粘性共になし。

0　1：60　2m

3a層：黒色土層
　　径1～2㎜のCP5%含む細砂層。
　　しまり、粘性共になし。

4層：黒色土層　径1～2㎜のCP5%、炭化物粒若干含む細砂層。しまり、粘性共に有り。

5層：黒褐色土層
　　炭化物粒10%含む細砂層。
　　しまり、粘性共に有り。



H－10号住居址竈

1層：明褐色土層
　　焼土粒20%、炭化物粒5%含む細砂層。
　　しまり、粘性共にやや有り。

2層：橙色土層
　　焼土粒30%含む細砂層。
　　しまり有り、粘性なし。

3層：にぶい褐色土層
　　粘土ブロック10%、炭化物粒10%含む細砂層。
　　しまり、粘性共にやや有り。

4層：明黄褐色土層　微砂。ハードロームブロック。

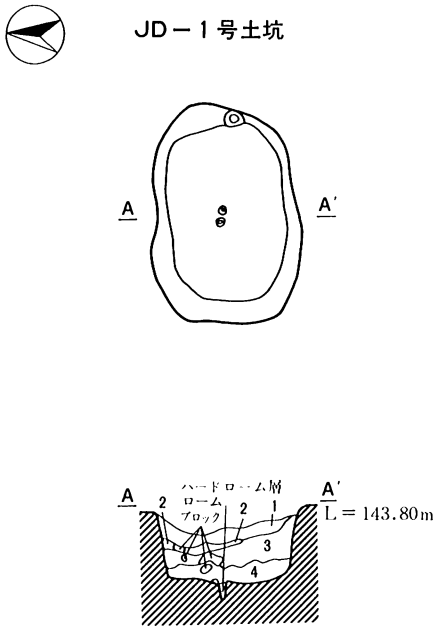
5層：にぶい褐色土層
　　焼土粒10%、炭化物粒を若干含む細砂層。
　　しまり、粘性共にやや有り。

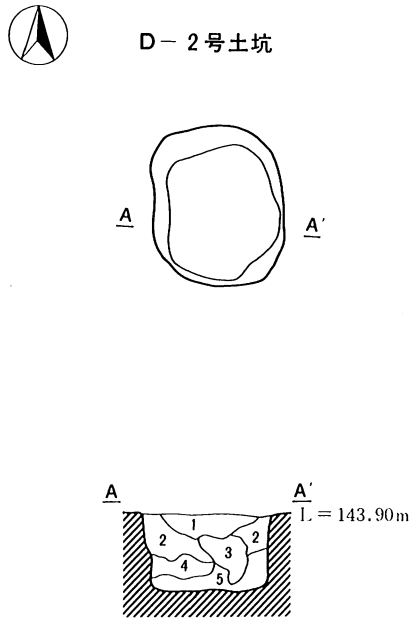
6層：黒色土層
　　灰を主体に黒色炭化物多量に含む細砂層。
　　しまり、粘性共にやや有り。

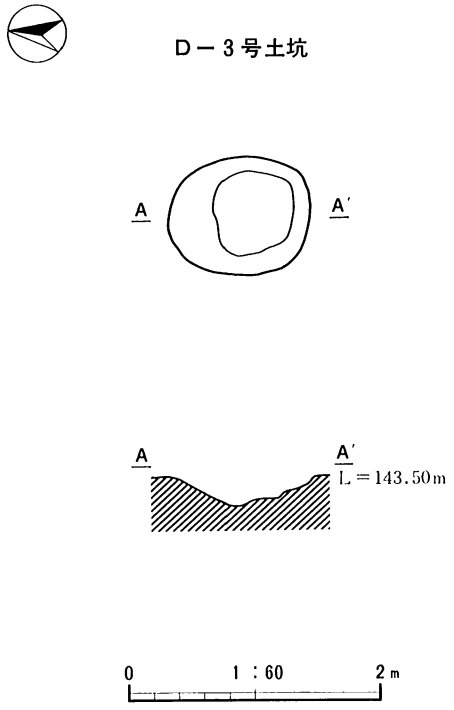
7層：灰褐色土層
　　灰を主体に粘土少量を含む微砂層
　　しまりやや有り、粘性有り。

0　1：30　1m

Fig. 18　芳賀北原遺跡遺構図（13）







JD－1号土坑

1層：にぶい黄褐色土層
　ソフトロームを主体に黒色土を斑状に含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

2層：褐色土層
　黒色土を主体にソフトロームを若干含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

3層：明黄褐色土層
　ソフトロームを主体にハードロームを斑状に含む
　細砂層。しまり、粘性共に有り。

4層：明黄褐色土層
　ハードロームを主体に黒色土を若干含む細砂層。
　しまり有り、粘性やや有り。

D－2号土坑

1層：黒褐色土層
　CP20%、ローム粒1%を含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

2層：にぶい黄褐色土層
　CP1%含む細砂層。
　しまり、粘性共にやや有り。

3層：にぶい黄褐色土層
　ソフトロームブロックを多量に含む
　細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

4層：黄褐色土層
　ハードロームブロックを多量に含む
　細砂層。しまり有り、粘性やや有り。

5層：褐色土層
　ハードロームブロックを少量含む
　細砂層。しまり、粘性共にやや有り。

Fig. 19　芳賀北原遺跡遺構図（14）

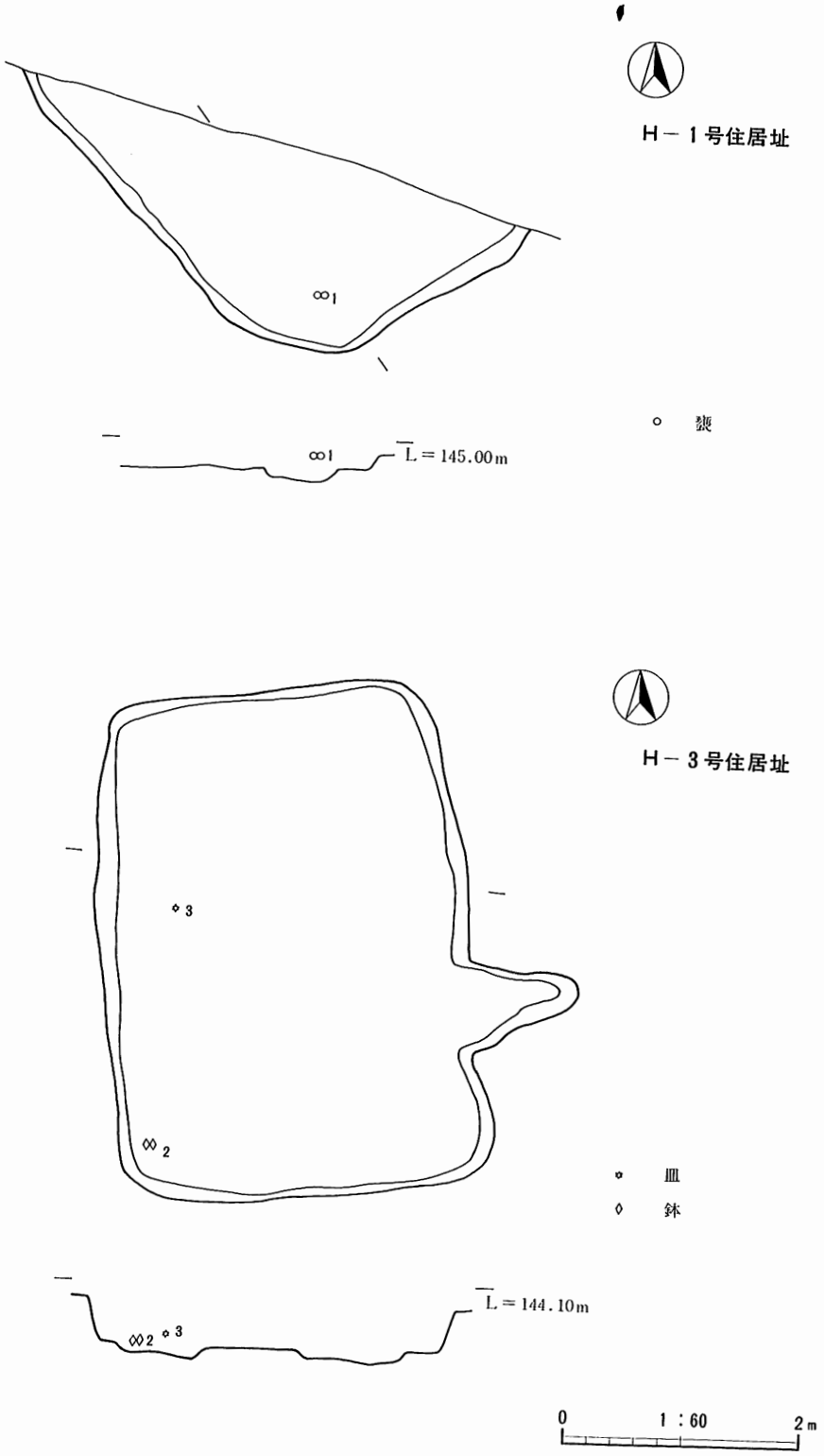


Fig. 20 芳賀北原遺跡遺物分布図(1)

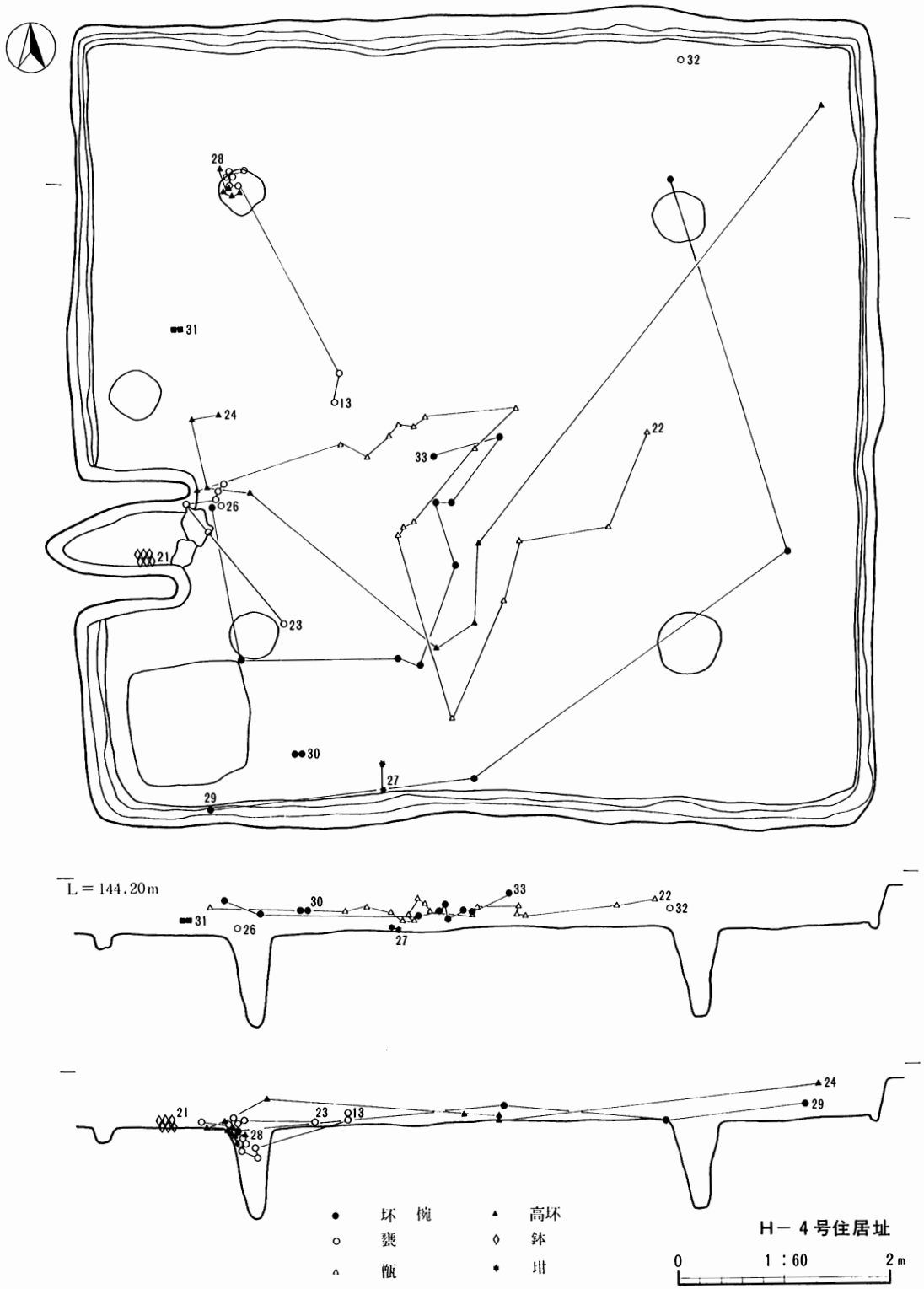


Fig. 21　芳賀北原遺跡遺物分布図(2)

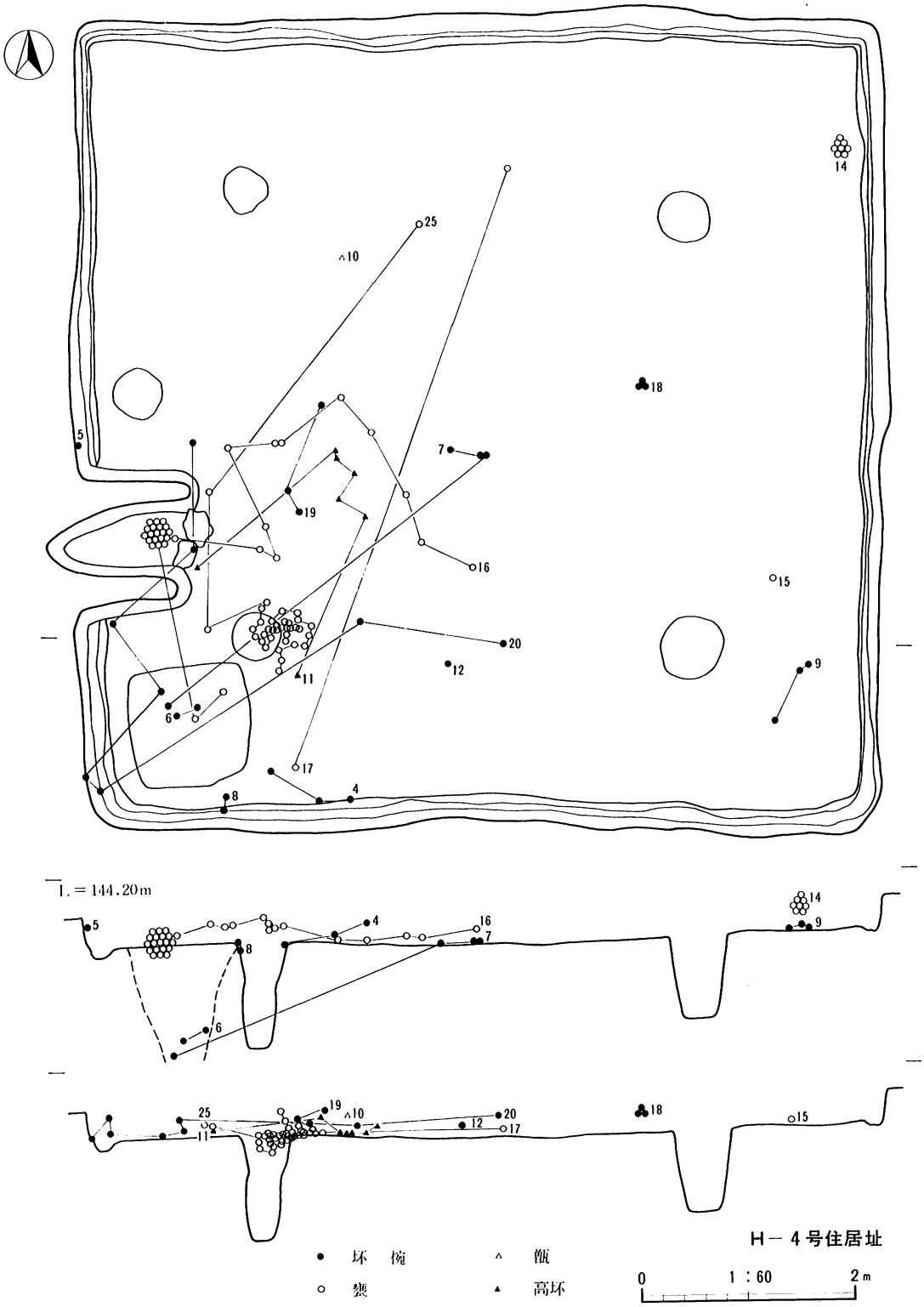


Fig. 22　芳賀北原遺跡遺物分布図(3)

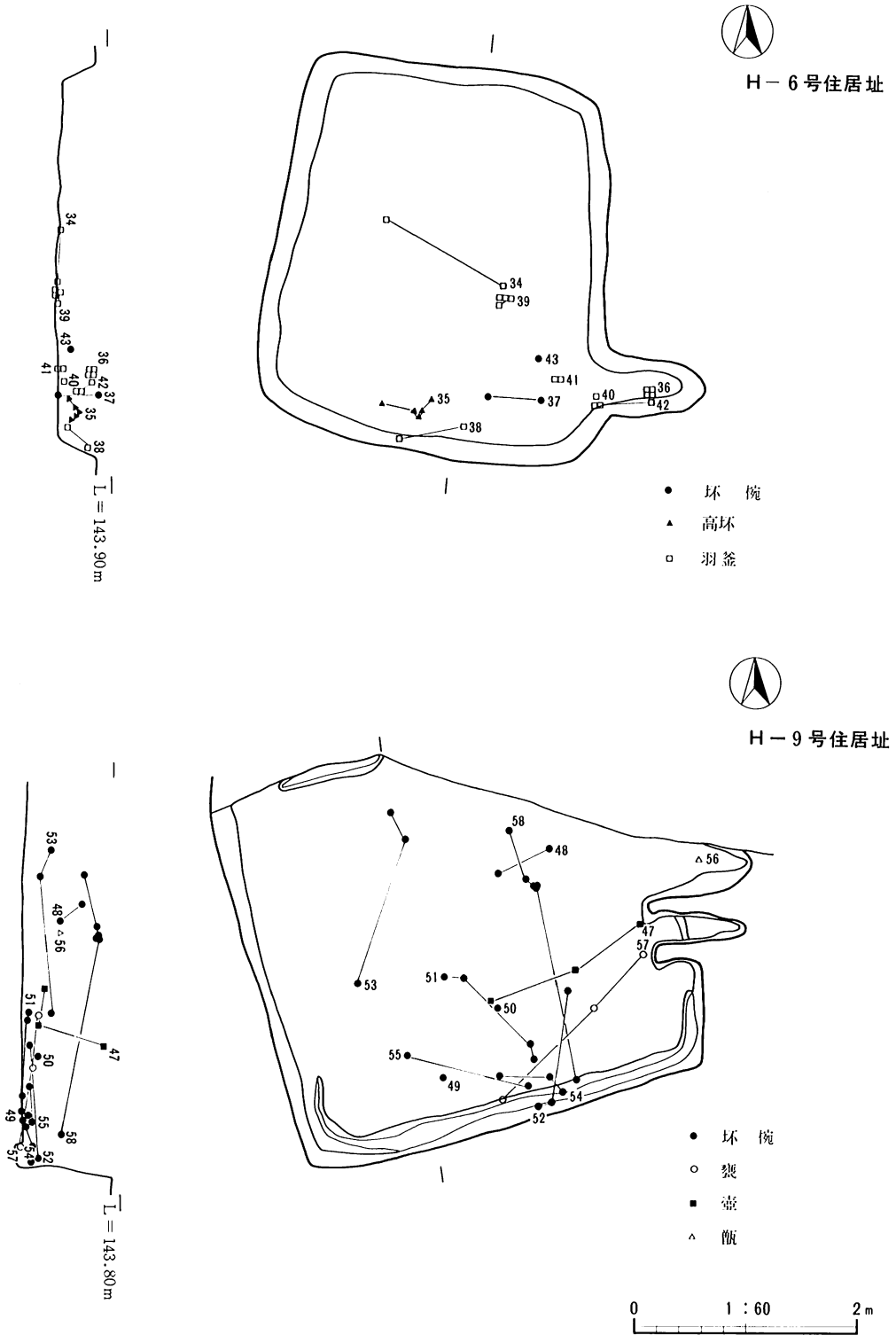


Fig. 23　芳賀北原遺跡遺物分布図(4)

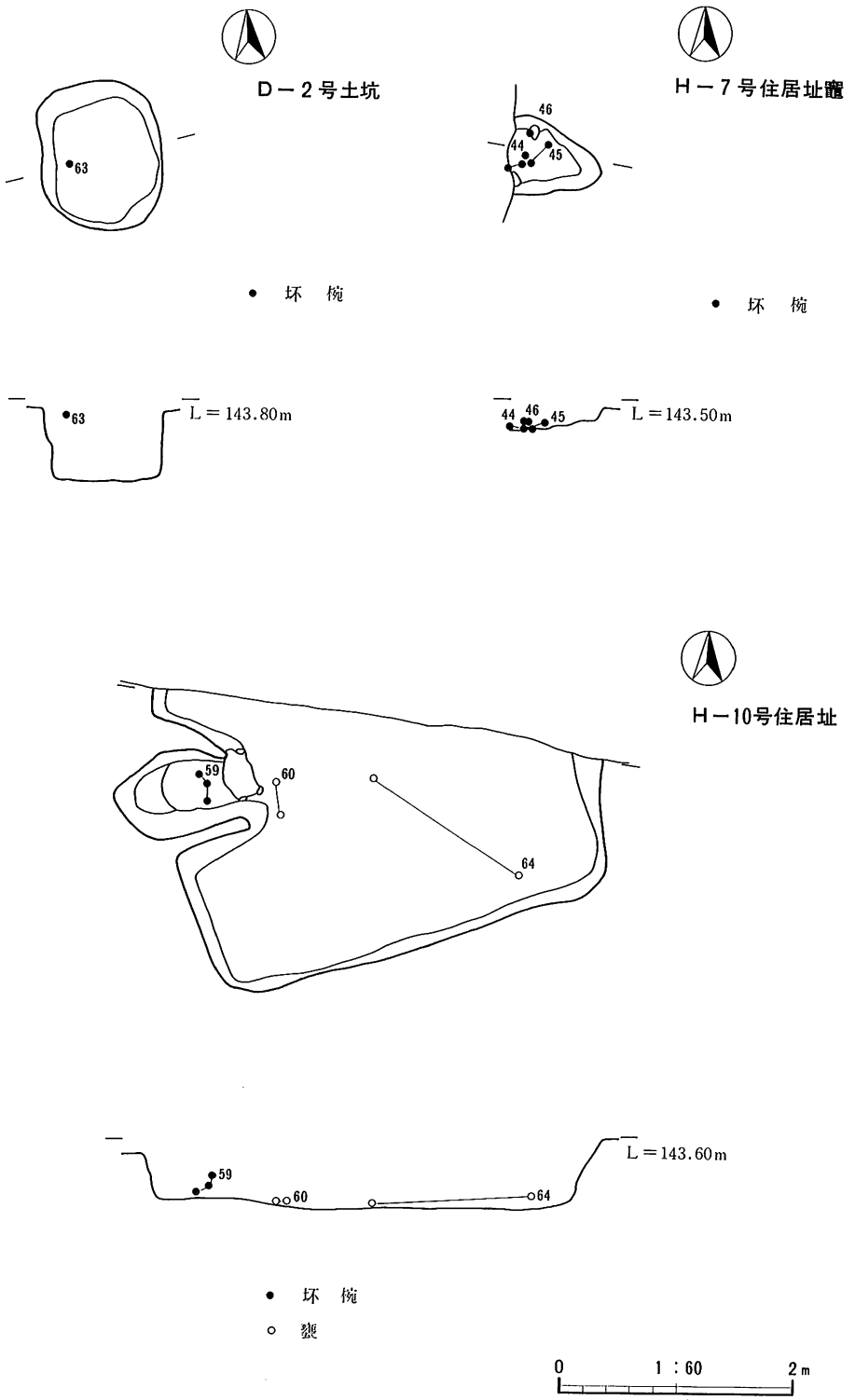


Fig. 24 芳賀北原遺跡遺物分布図(5)

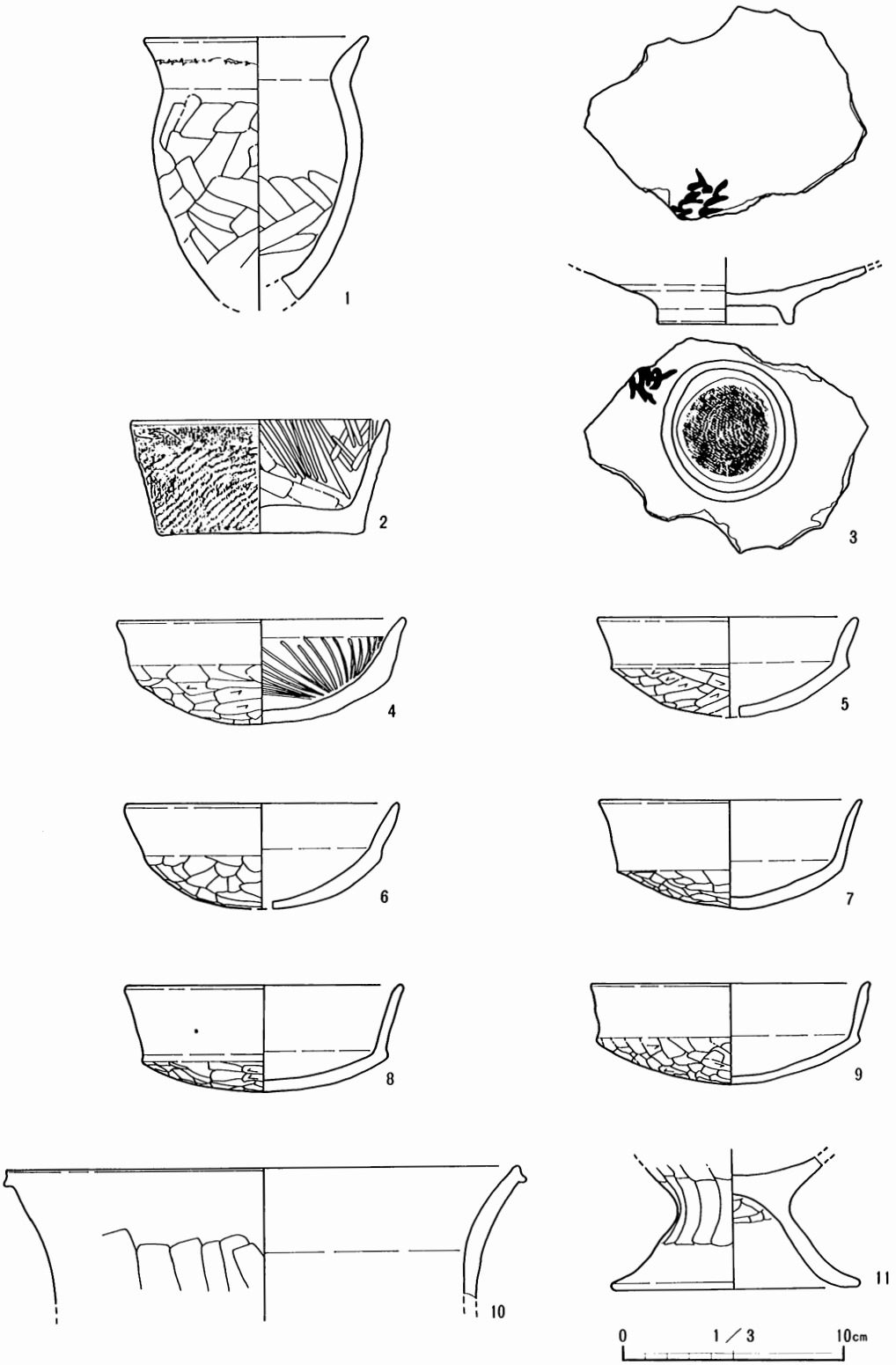


Fig. 25　芳賀北原遺跡出土遺物（1）

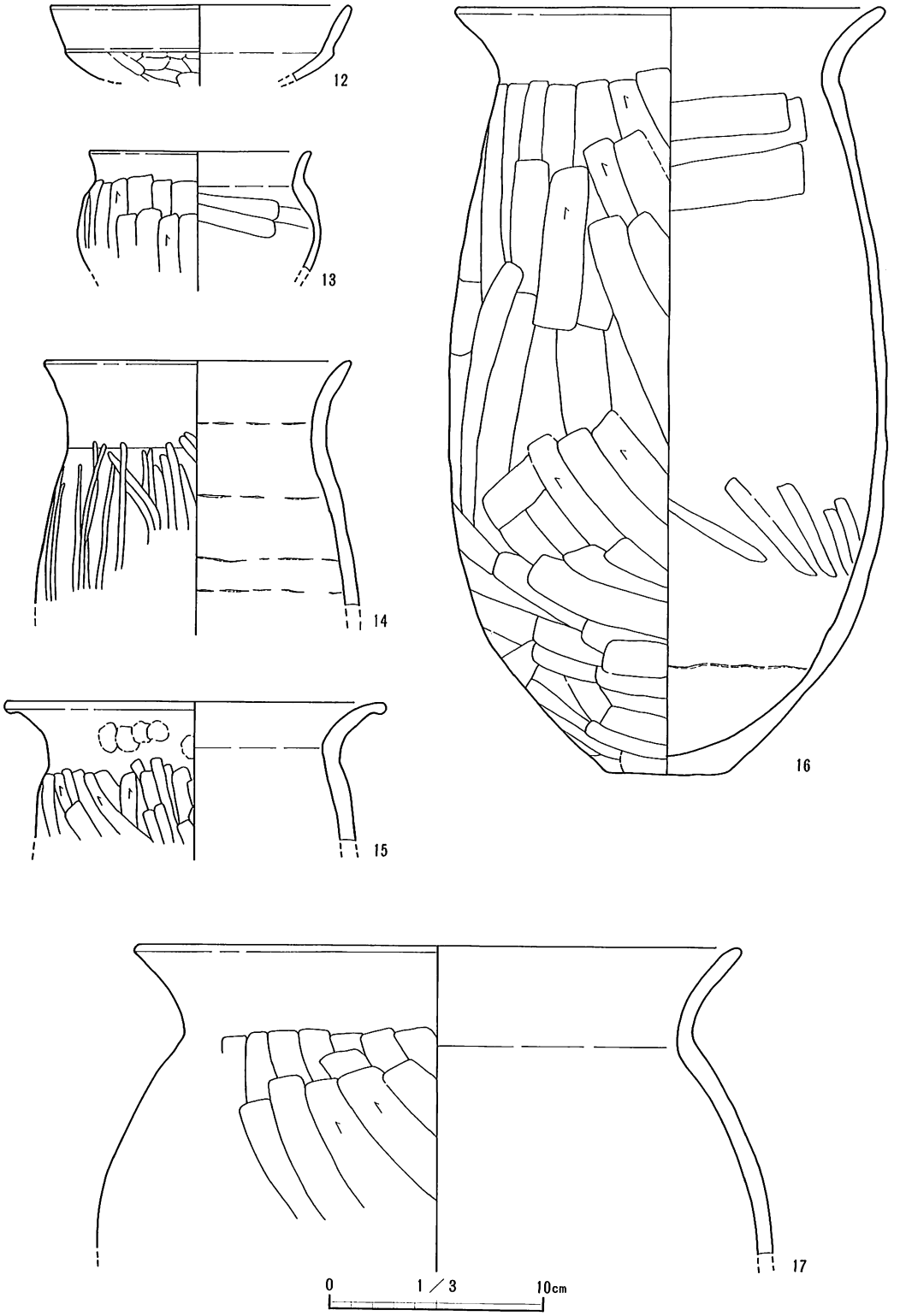


Fig. 26　芳賀北原遺跡出土遺物（２）

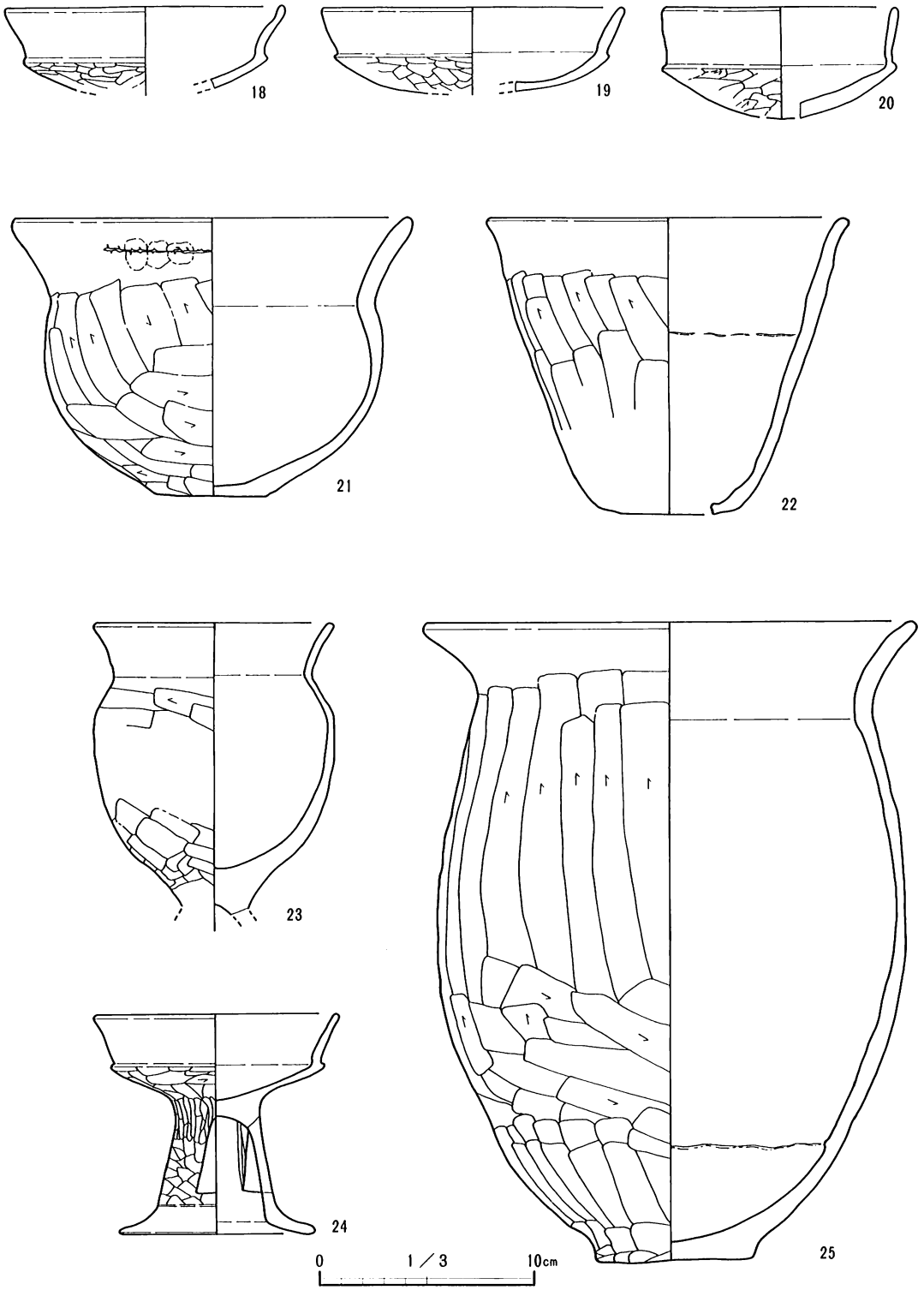


Fig. 27　芳賀北原遺跡出土遺物（3）

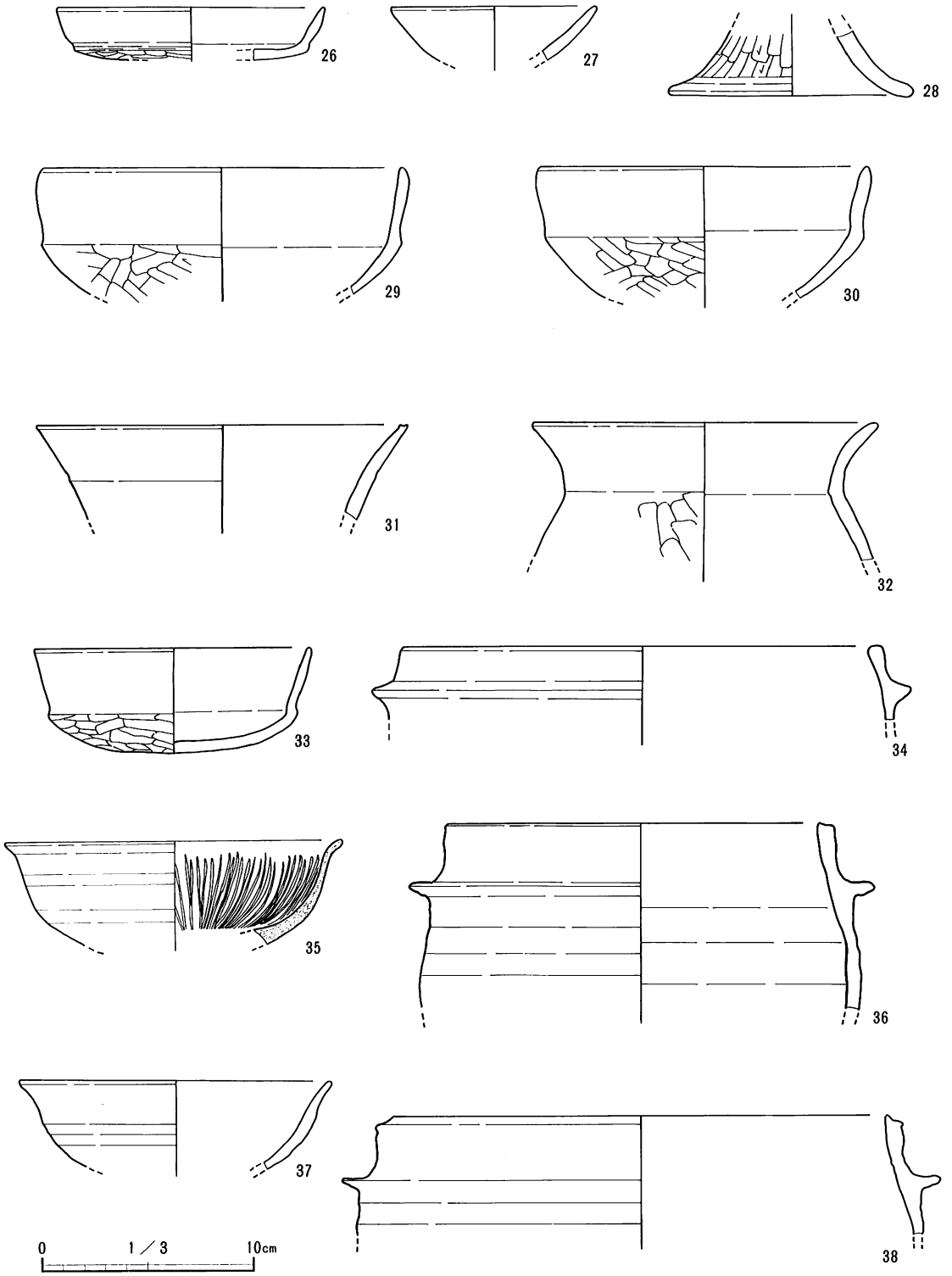


Fig. 28　芳賀北原遺跡出土遺物（4）

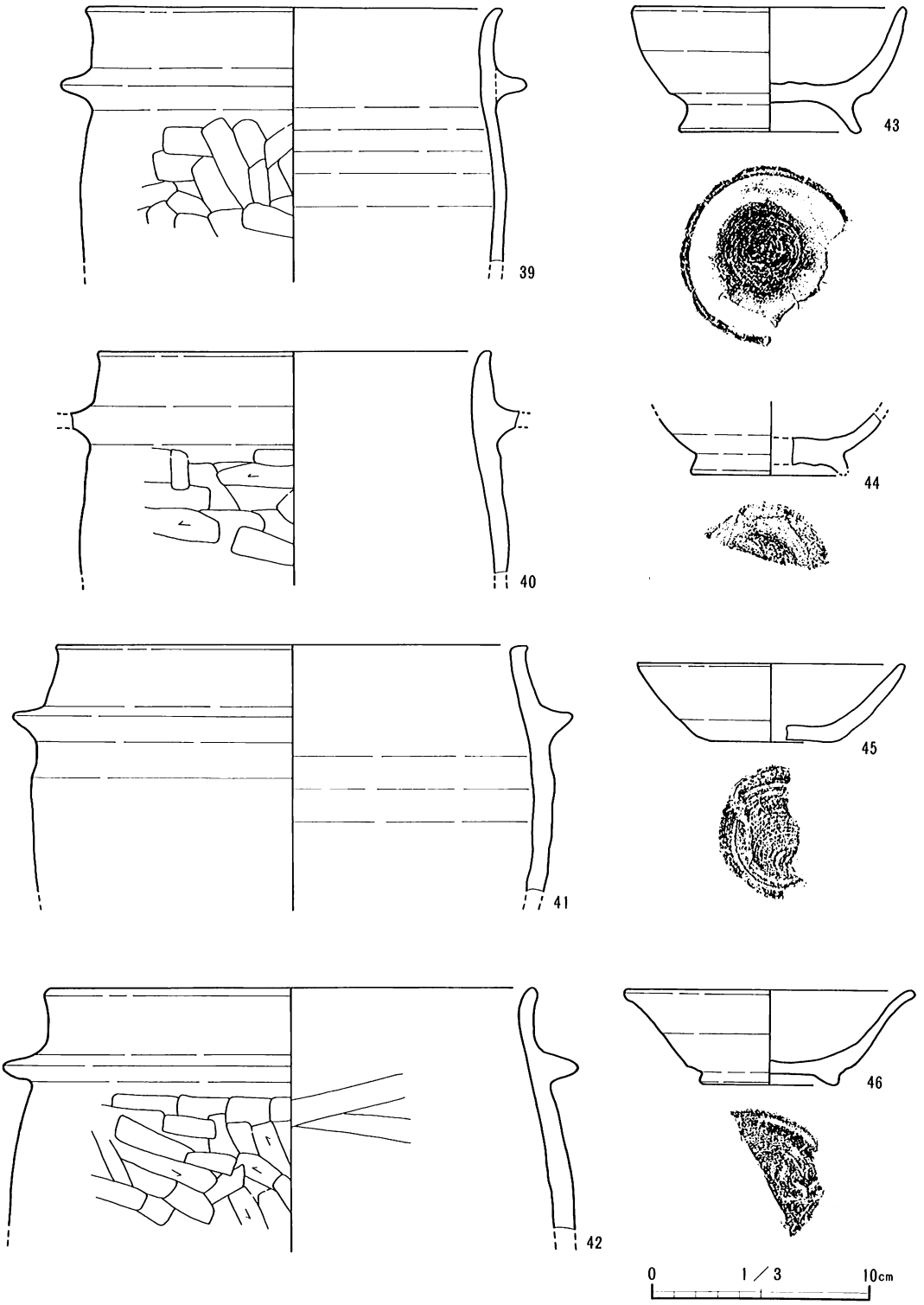


Fig. 29　芳賀北原遺跡出土遺物（5）

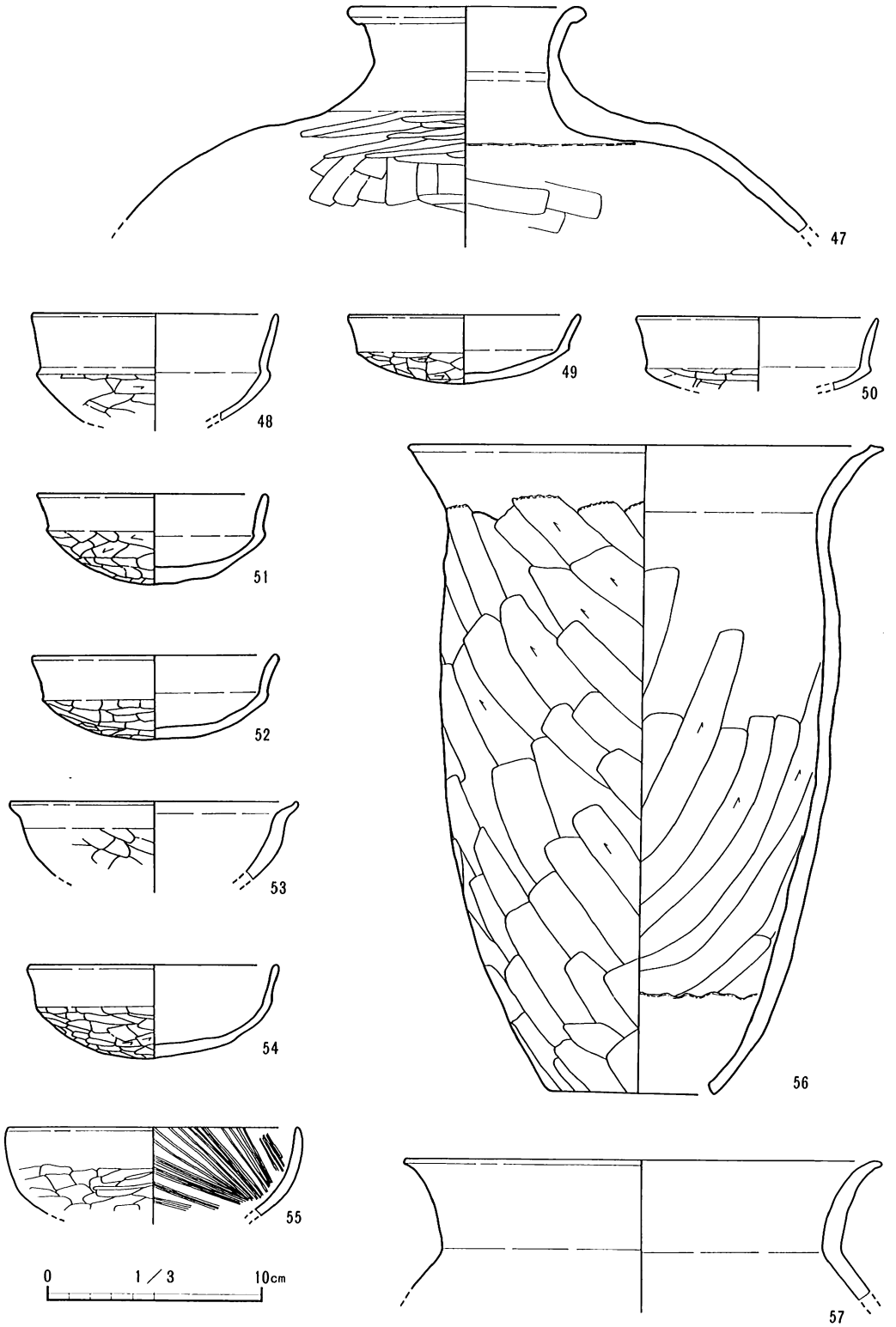


Fig. 30　芳賀北原遺跡出土遺物（6）

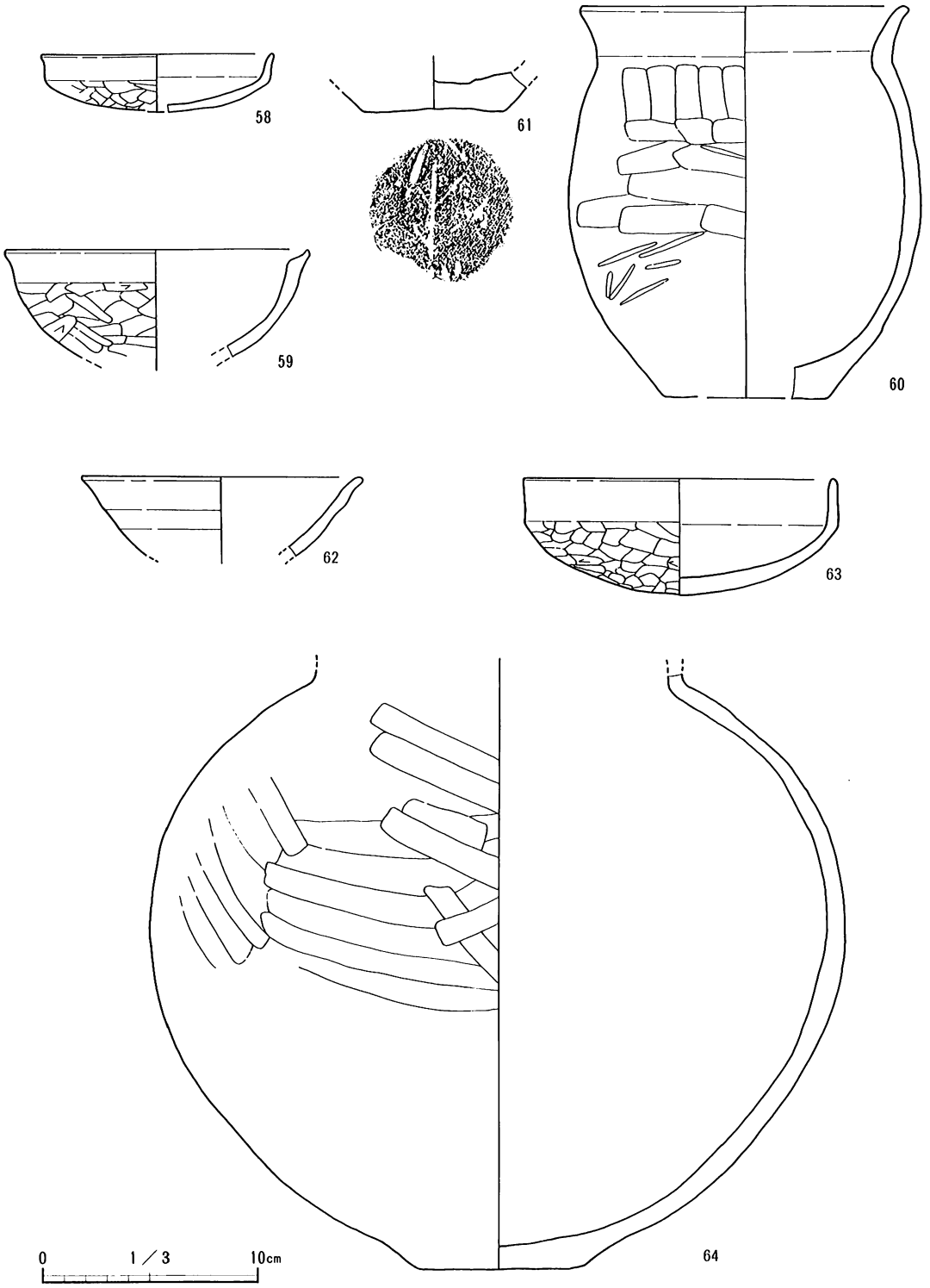


Fig. 31　芳賀北原遺跡出土遺物（７）

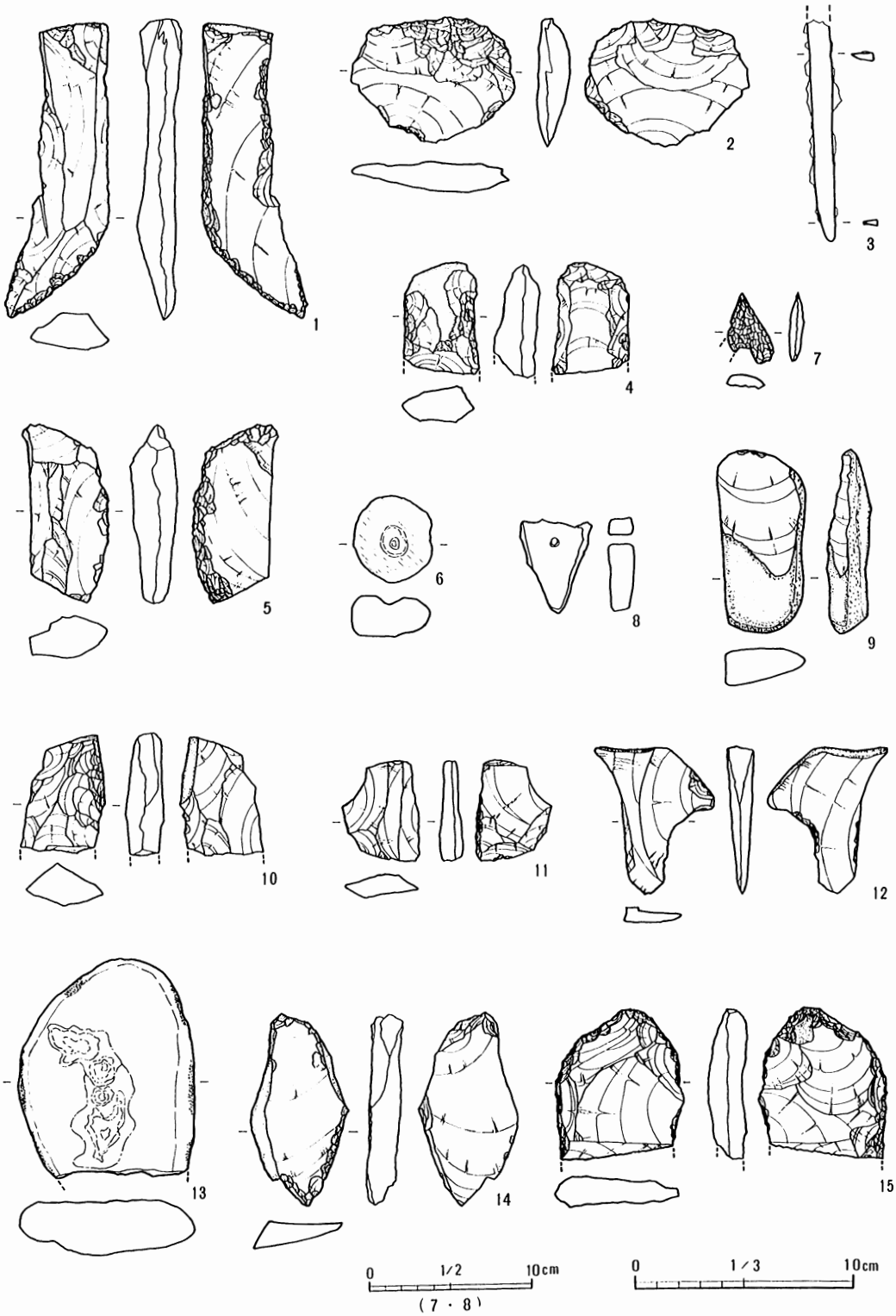


Fig. 32 芳賀北原遺跡出土遺物（8）

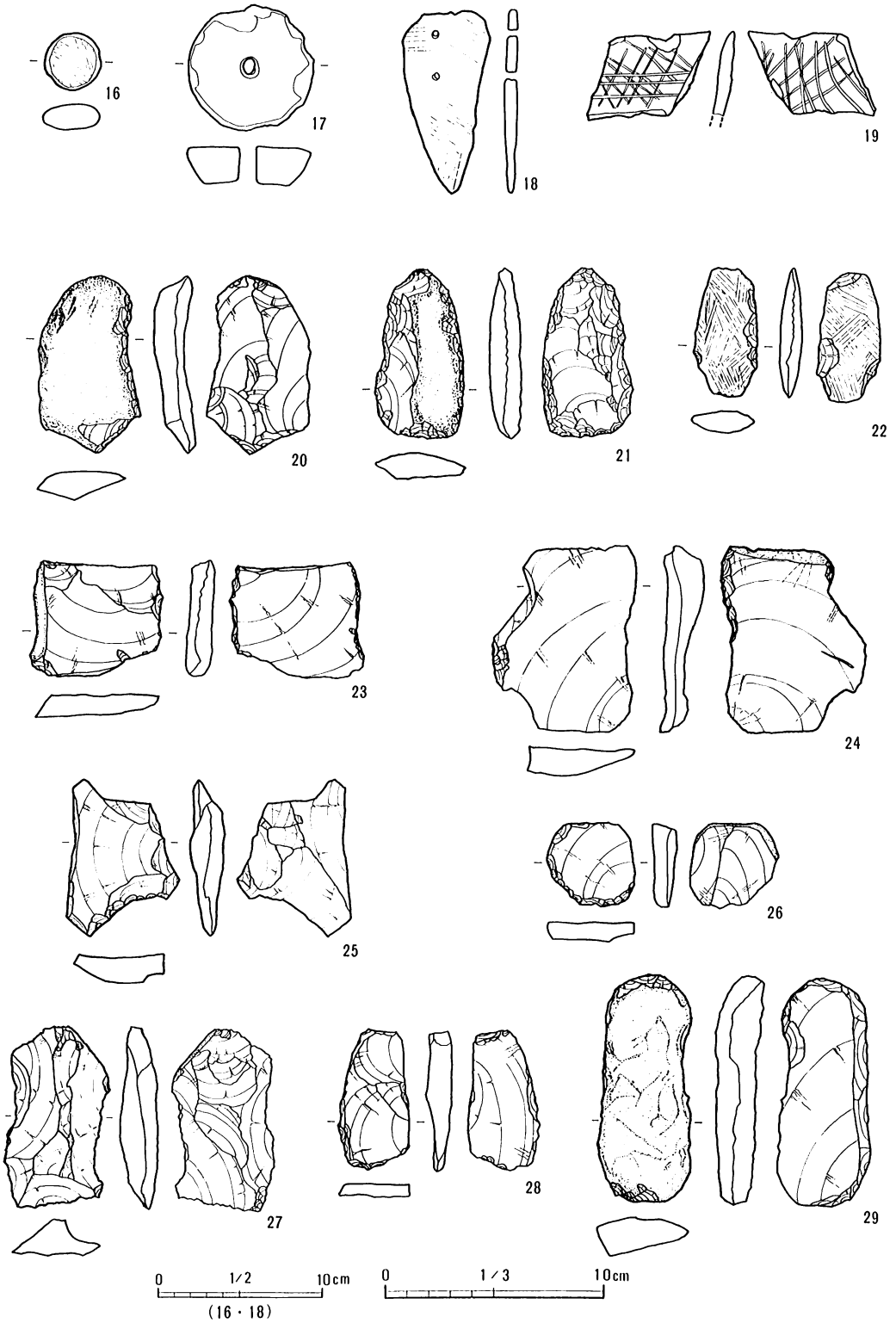


Fig. 33 芳賀北原遺跡出土遺物（9）

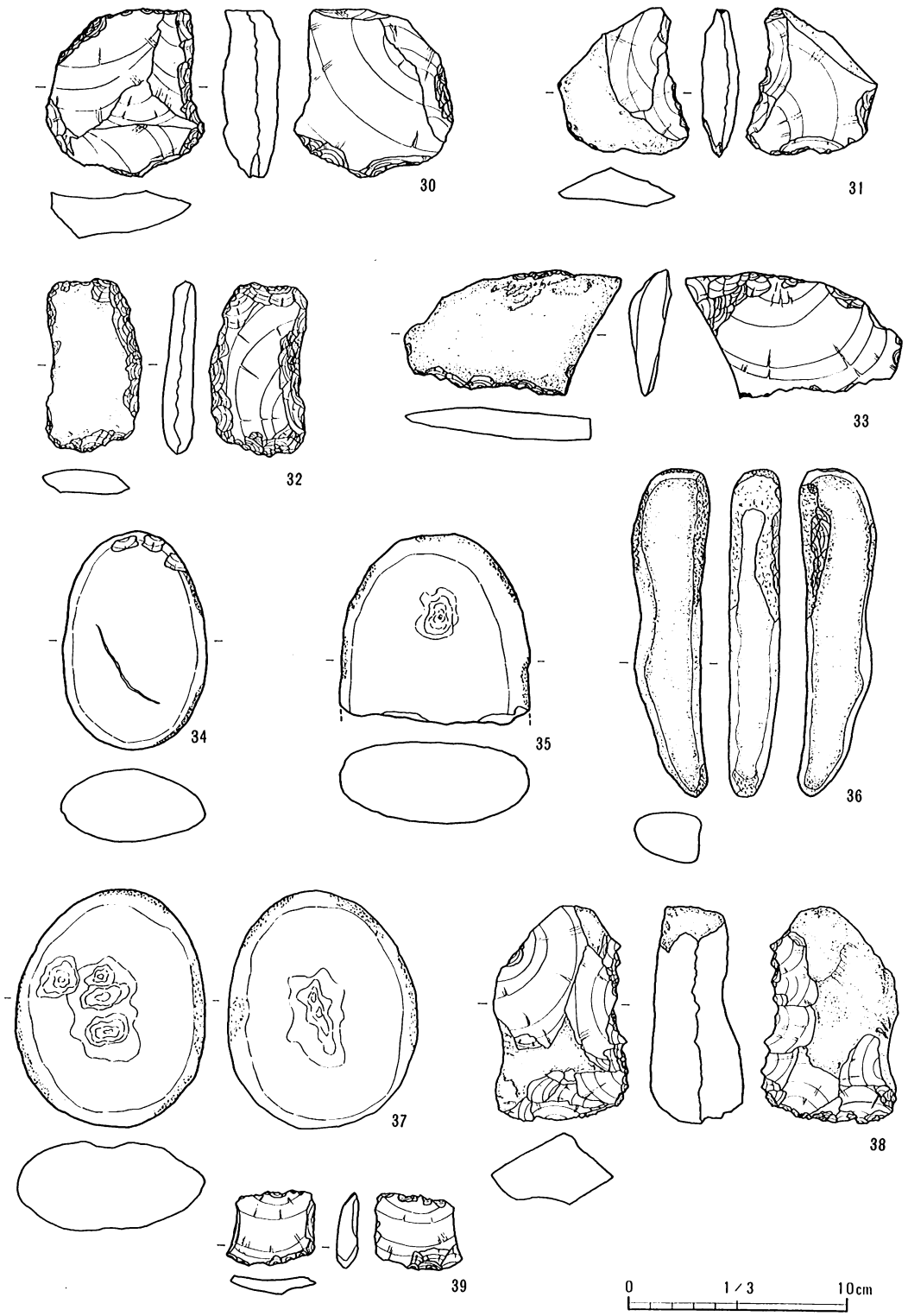


Fig. 34　芳賀北原遺跡出土遺物（10）

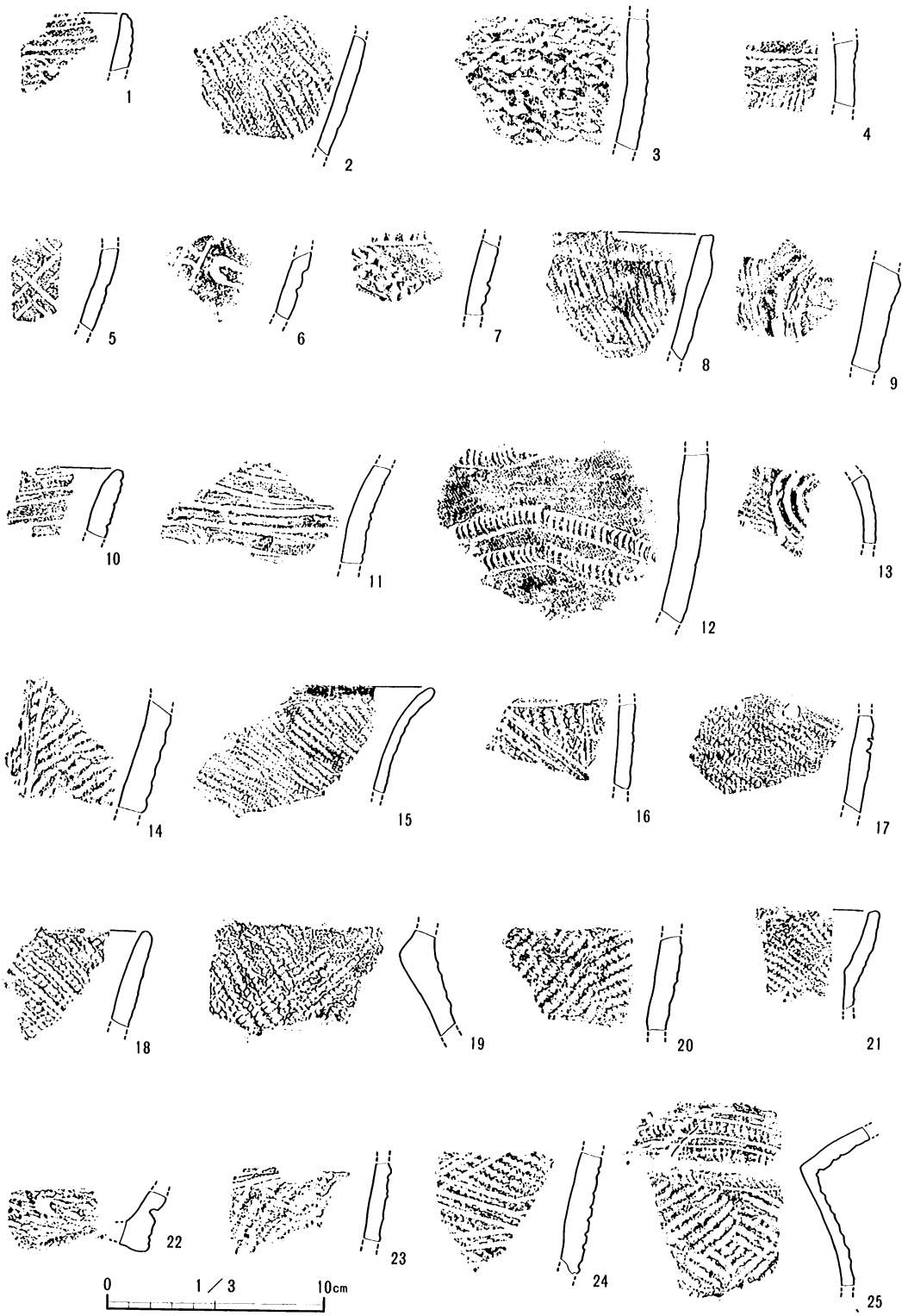


Fig. 35 縄文式土器(1)

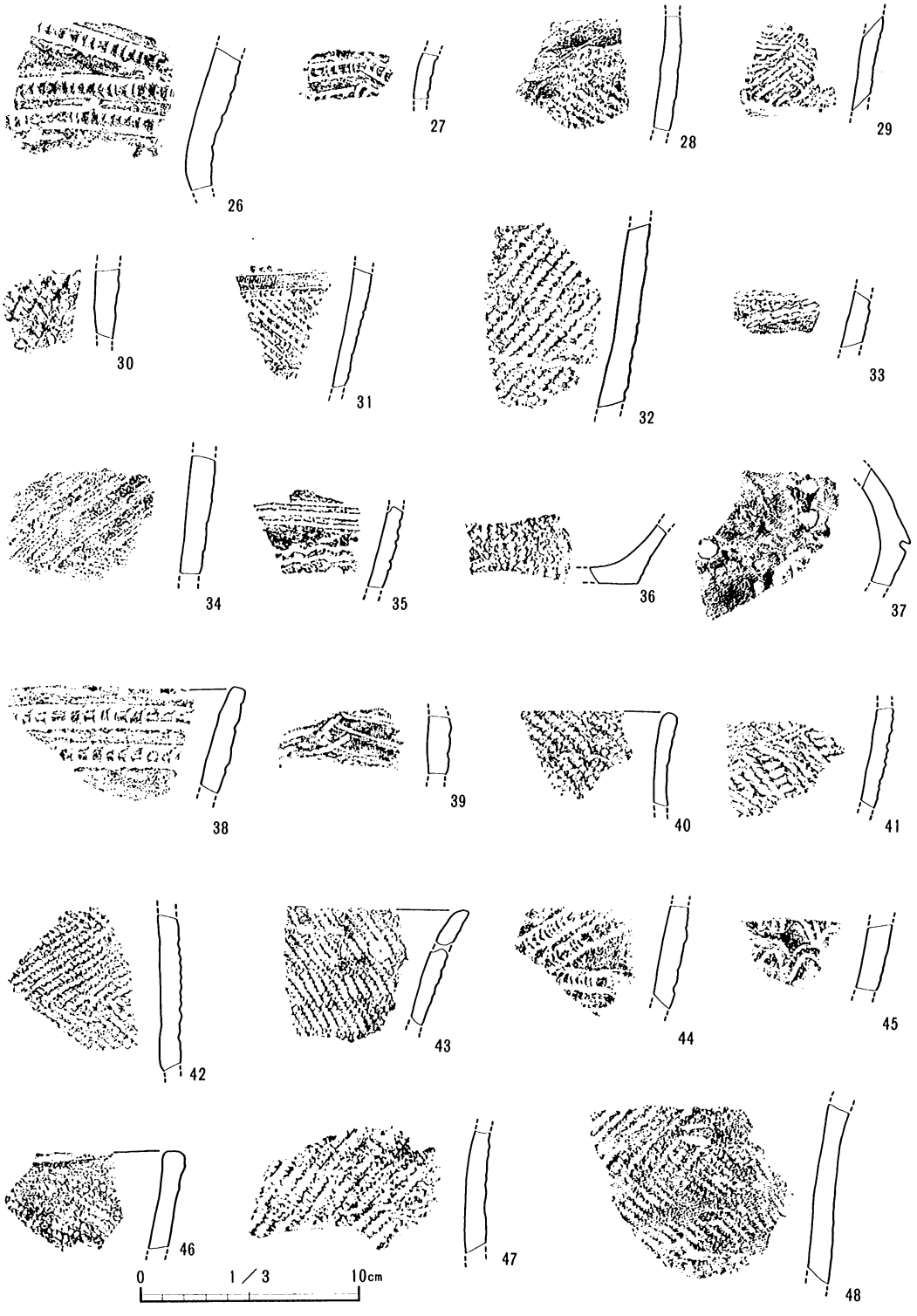
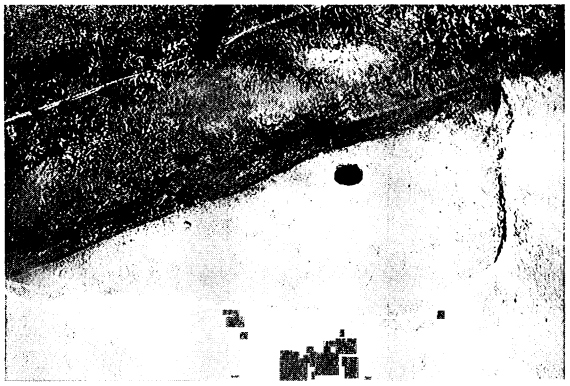
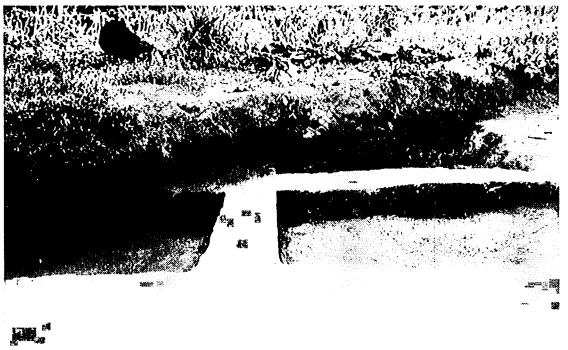


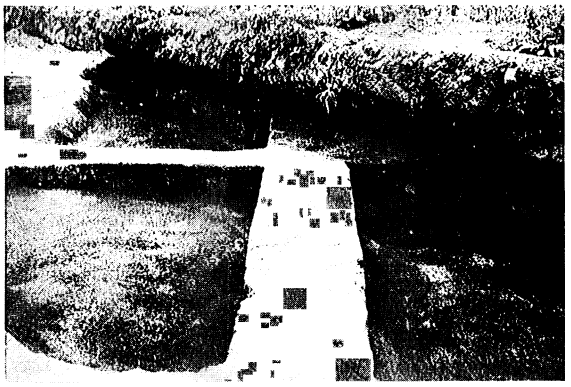
Fig. 36 縄文式土器(2)



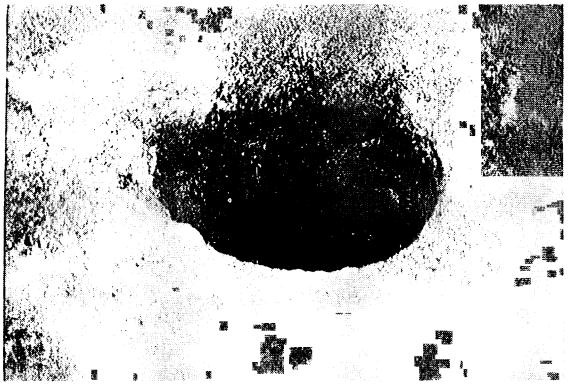
1．H－1号住居址（西から）



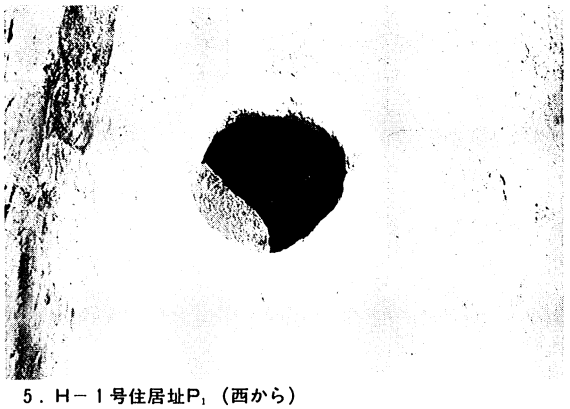
2．H－1号住居址南北セクション（南西から）



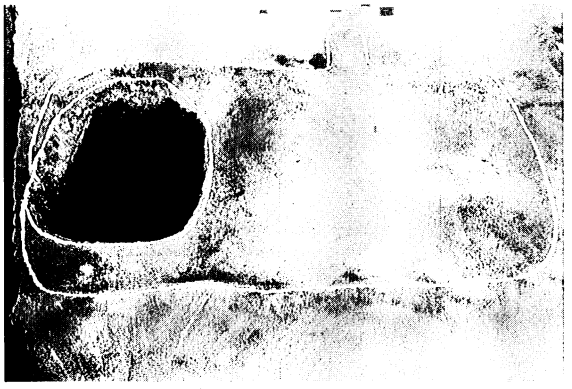
3．H－1号住居址東西セクション（南東から）



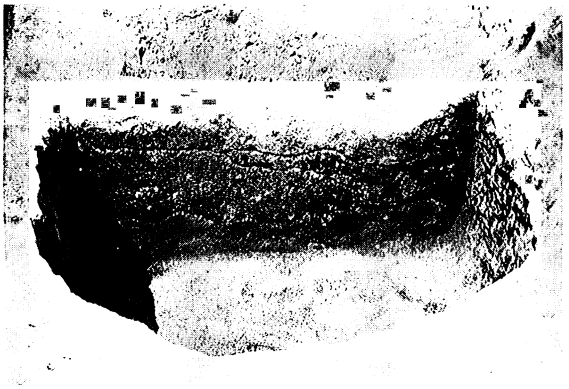
4．H－1号住居址P_1東西セクション（南から）



5．H－1号住居址P_1（西から）



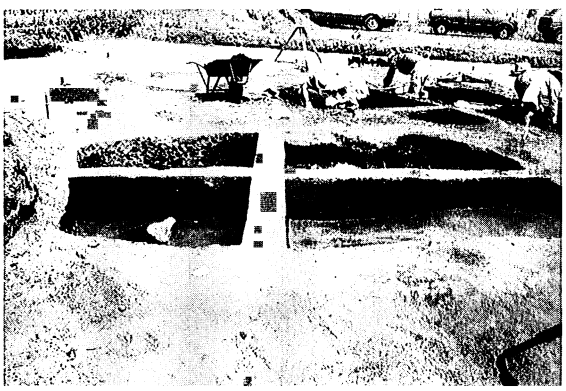
6．H－2号住居址（西から）



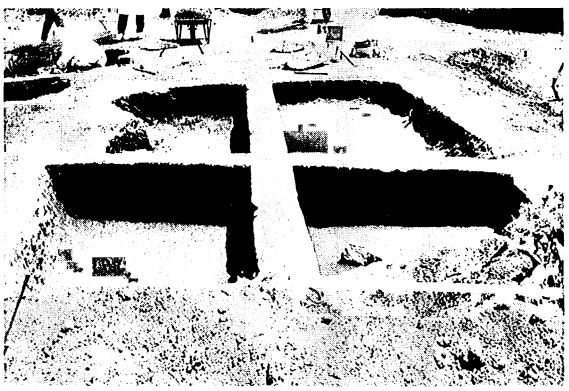
7．JD－1号土坑南北セレクション（西から）

8．JD－1号土坑（西から）

1．H－3号住居址（西から）

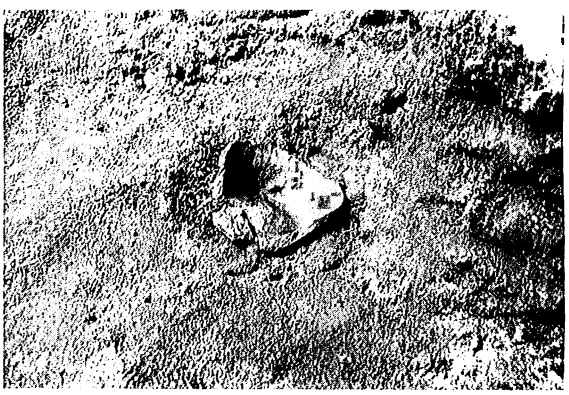


2．H－3号住居址東西セクション（北から）

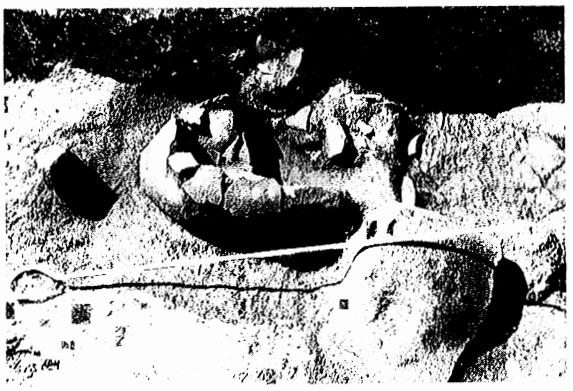


3．H－3号住居址南北セクション（西から）

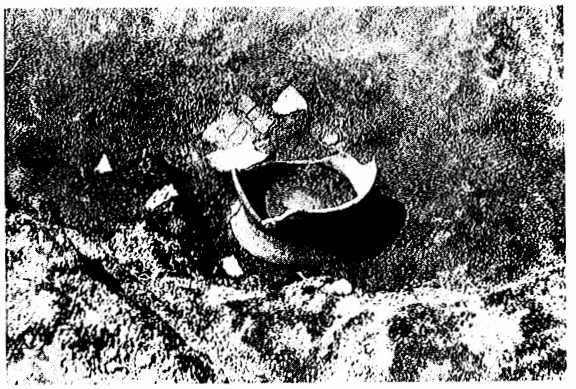
4．H－3号住居址カマド（西から）



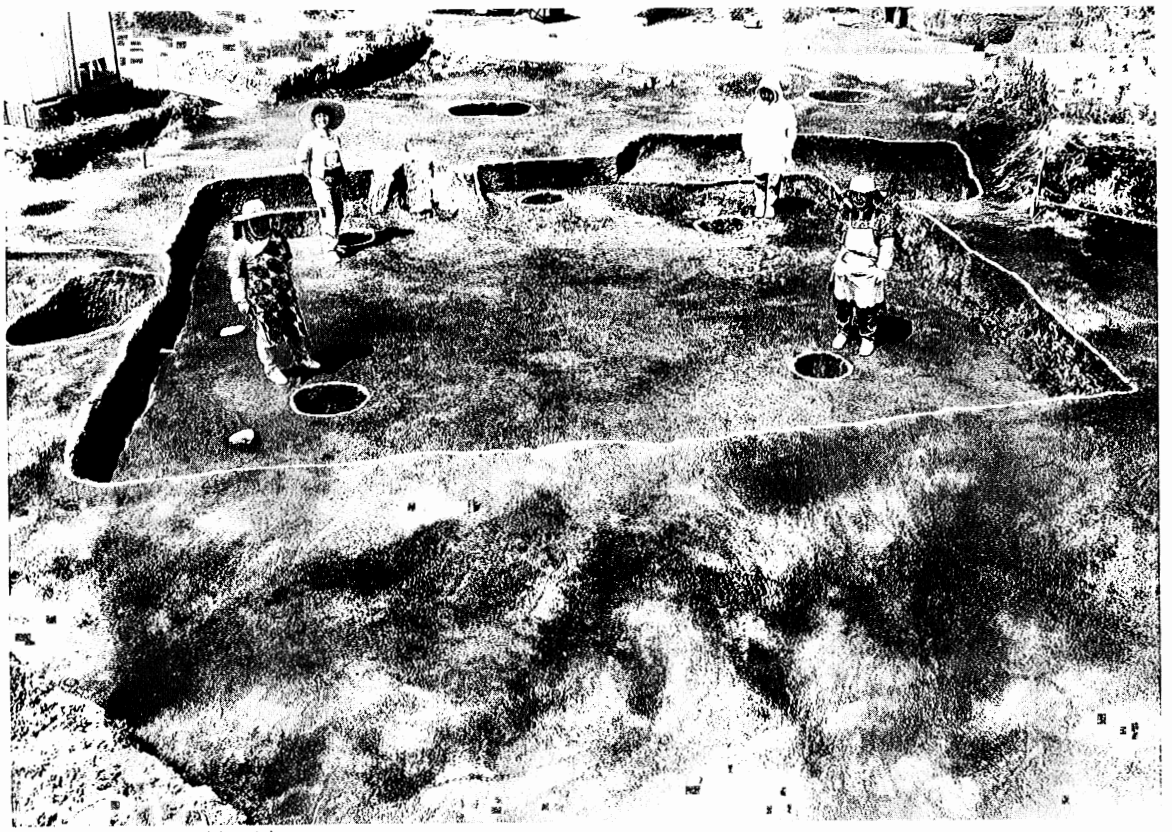
5．H－3号住居址遺物出土状態（北から）



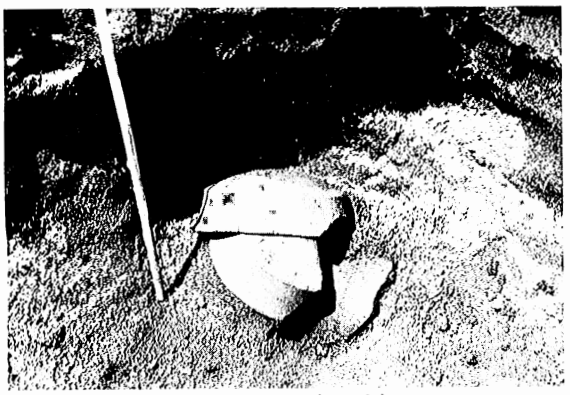
1．H－4号住居址カマド遺物出土状態（南から）



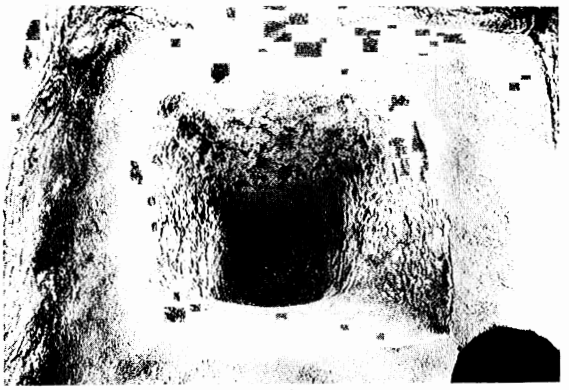
2．H－4号住居址遺物出土状態（南東から）



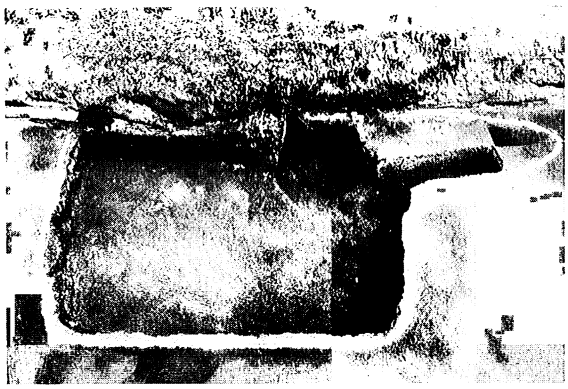
3．H－4号住居址（東から）



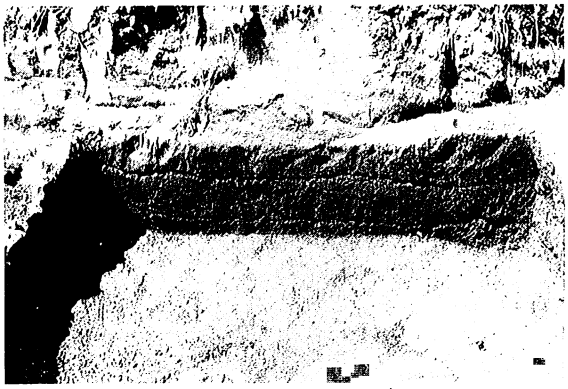
4．H－4号住居址遺物出土状態（南から）



5．H－4号住居址P_5（南から）

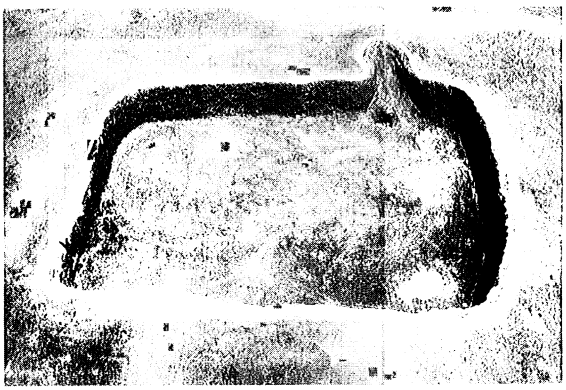


1．H－5号住居址（南から）



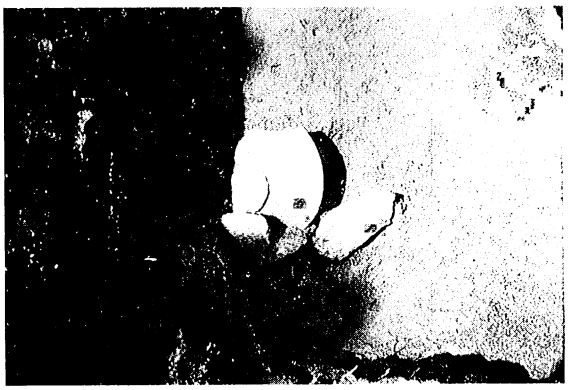
2．H－5号住居址東西セクション（南から）

3．H－5号住居址南北セクション（西から）

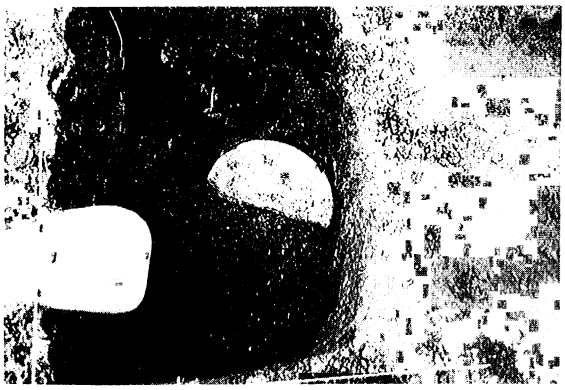


4．H－6号住居址（西から）

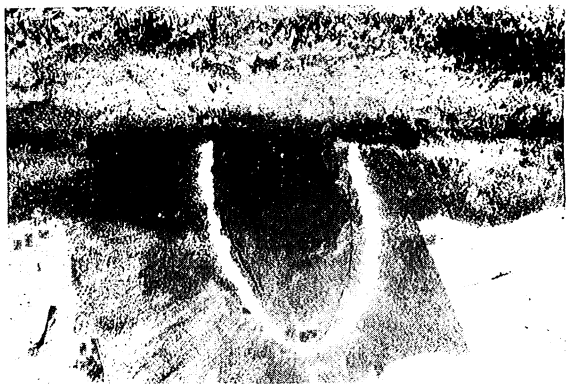
5．H－7号住居址（東から）



6．H－7号住居址遺物出土状態（東から）

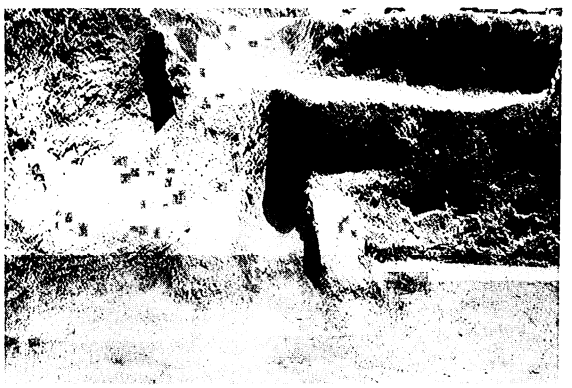


7．H－7号住居址遺物出土状態（南から）

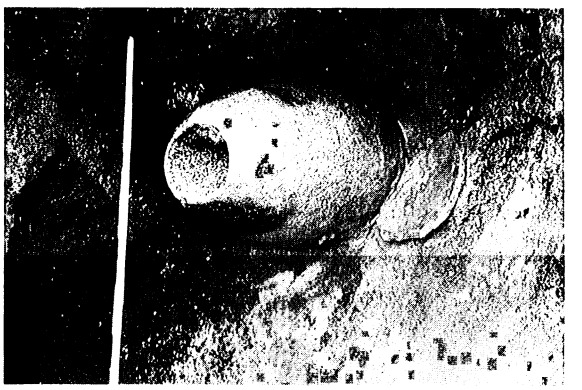


8．H－8号住居址（東から）

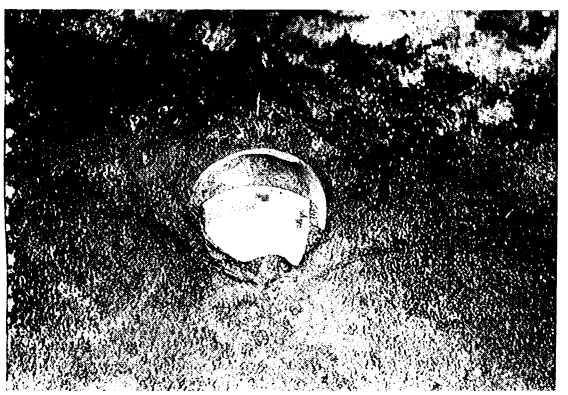
1．H－5，H－9号住居址の重複（西から）



2．H－9号住居址カマド（西から）



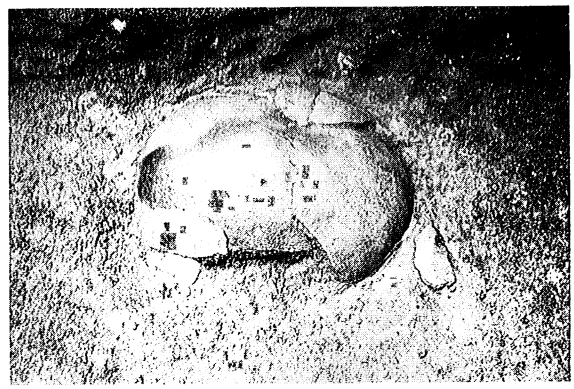
3．H－9号住居址遺物出土状態（北から）



4．H－9号住居址遺物出土状態（南から）

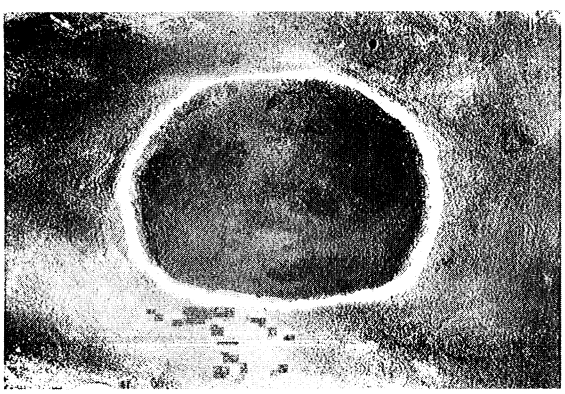
5．H－9号住居址遺物出土状態（南から）

1．H－10号住居址遺物出土状態（北から）

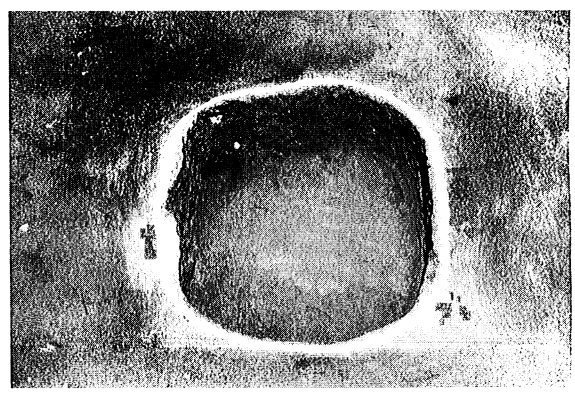


2．H－10号住居址遺物出土状態（西から）

3．H－10号住居址（西から）

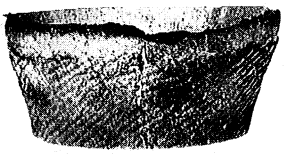


4．D－2号土坑（南から）



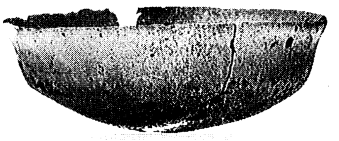
5．D－3号土坑（南から）

1



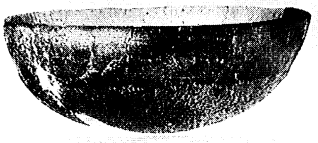
2

3



4

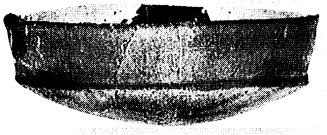
5



6

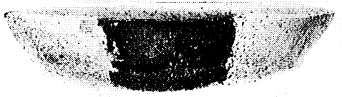
7

8



9

11

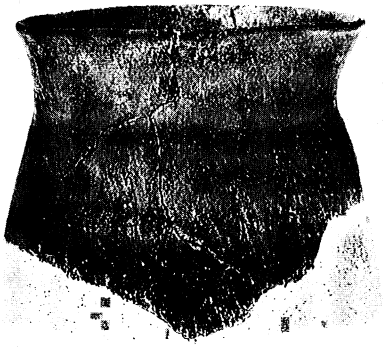


12

13

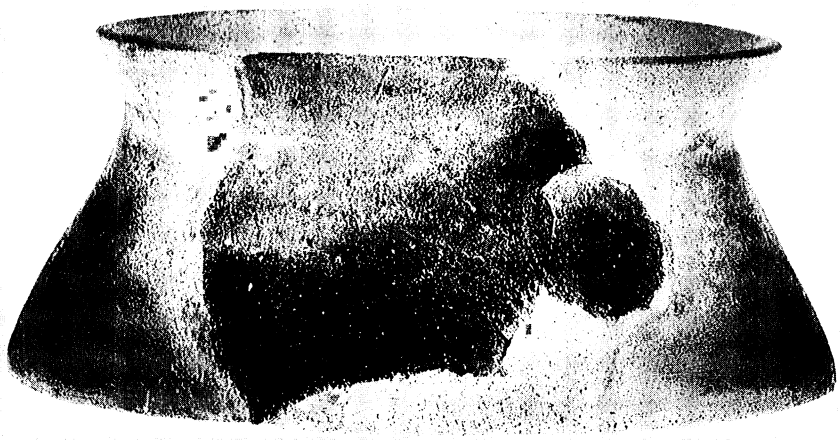
16

PL. 8



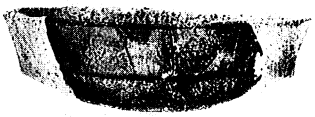
14

15



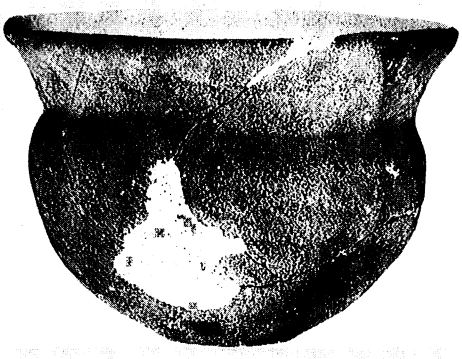
17

18



19

20



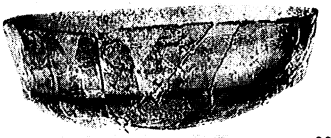
21

22

23

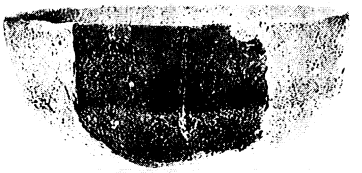
24

26

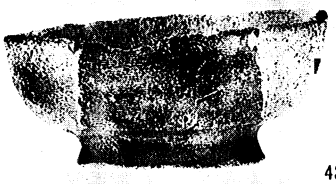


33

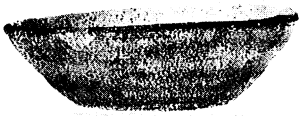
29



30



43



45

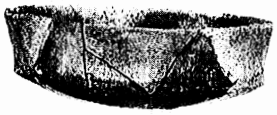
46

48

25

PL. 10

49



50

51

52

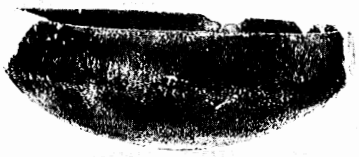
56

54

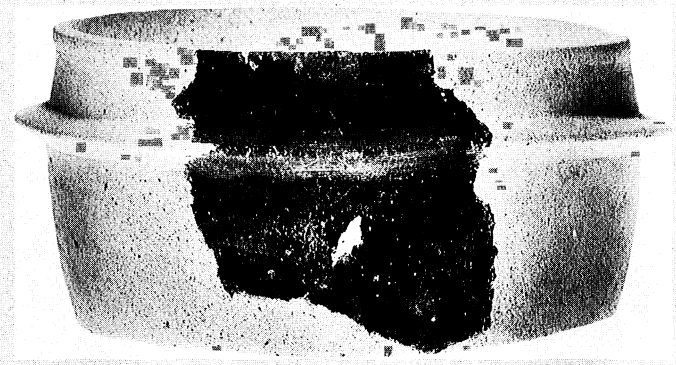
61

58

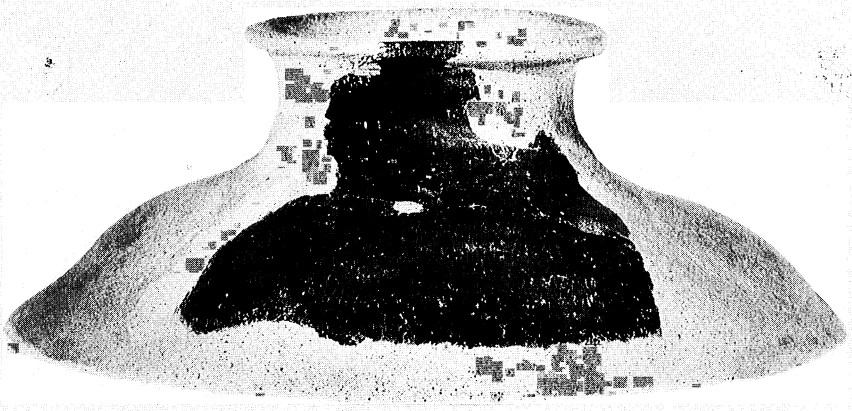
59



63

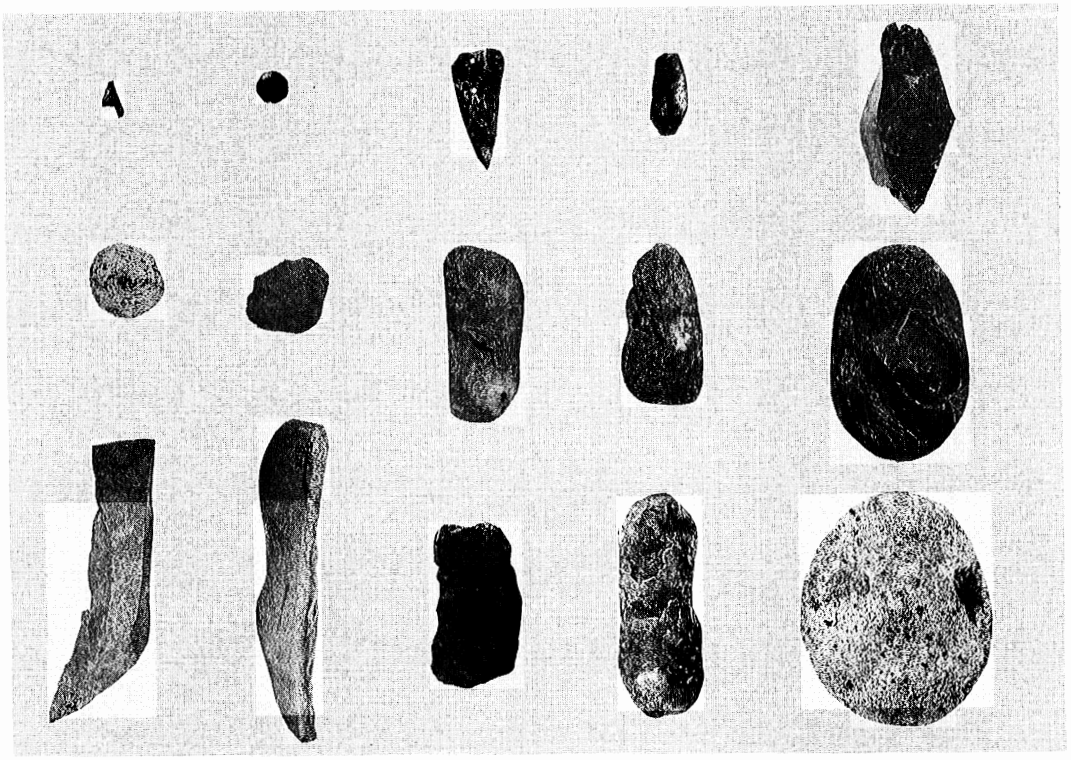


41

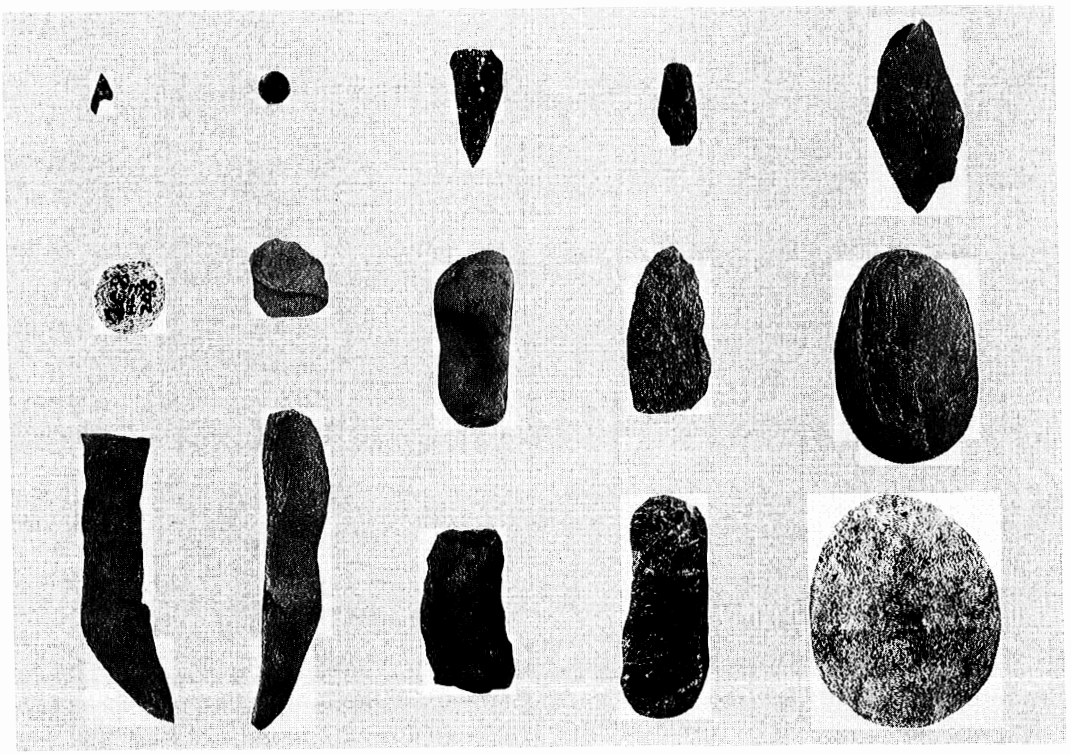


47

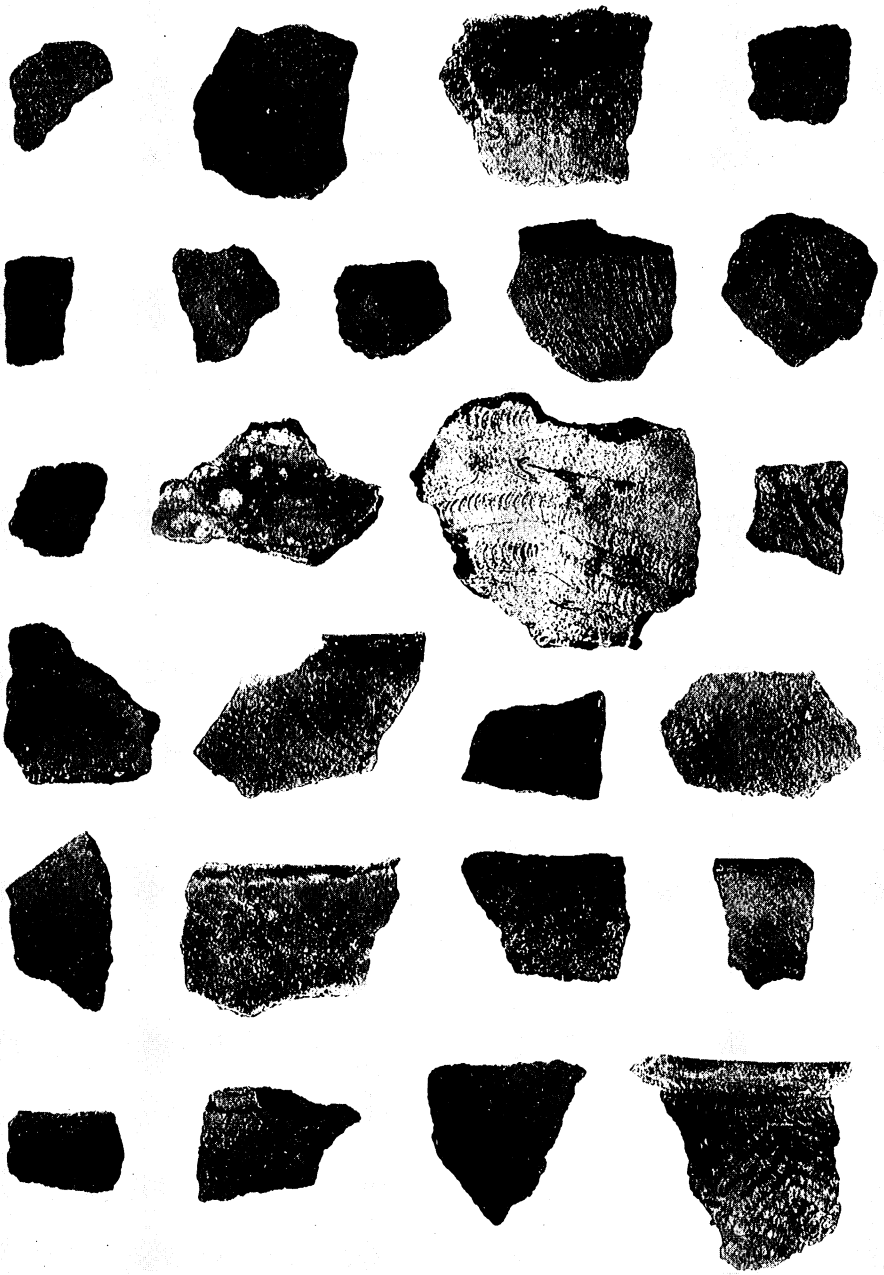
64



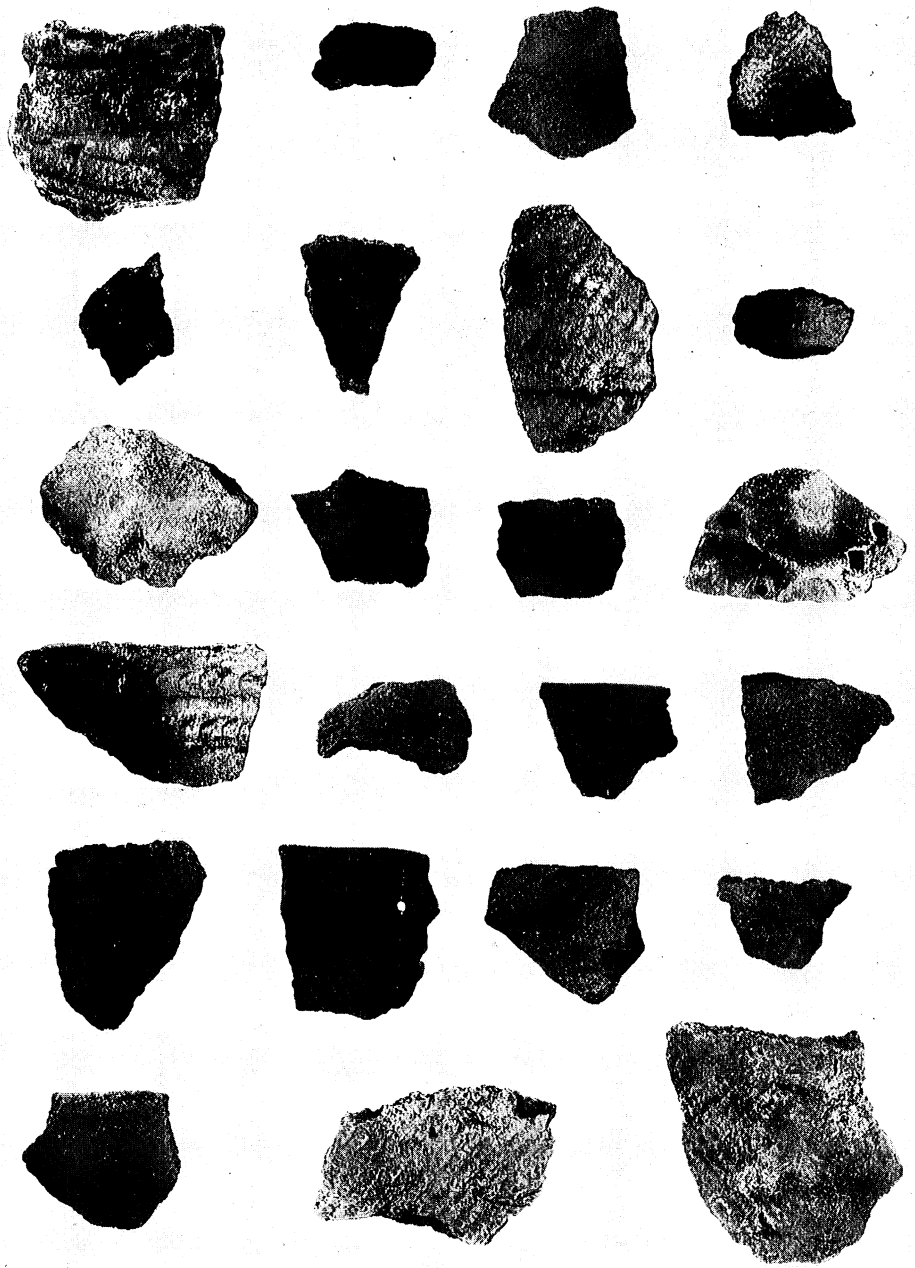
1. 石器・石鏃類（表）



2. 石器・石鏃類（裏）



縄文式土器 1～25



縄文式土器 26～48

調　査　要　綱

遺跡名称	芳賀北原遺跡（はがきたはらいせき）
遺跡記号	２Ｃ８
遺跡所在地	群馬県前橋市鳥取町字北原３５３－５
調査期間	平成３年５月７日～平成３年６月７日
調査面積	250㎡
調査原因	民間開発（配電用変電所新設）
調査依頼者	東京電力株式会社群馬支店　支店長　岡島　徹
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団　長　遠藤　次也
事務局	事務局長　福田　紀雄　事務局次長　遠藤　和夫
	財政係員　高橋　賢靖　井上　敏夫　庶務担当　須田みずほ　田野真喜子
調査担当者	鈴木　雅浩　狩野　吉弘
調査参加者	岩木　佳代　岩木　操　大田　一郎　岸　フクエ　住谷　文彦
	渡木　秋子　湯浅たま江　湯浅　政夫　湯浅　道子
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課　群馬県埋蔵文化財調査事業団　東京電力株式会社群馬支店
	飯島　静男　大西　雅広　早田　勉
	井上測量株式会社　(有)古環境研究所　たつみ写真スタジオ　宮下工業株式会社

（五十音順　敬称略）

芳賀北原遺跡

平成３年３月20日　印　刷
平成３年３月25日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－４
ＴＥＬ　0272-31-9531

印　　刷　株式会社　開文社印刷所